

青森県埋蔵文化財調査報告書第81集

弥栄平遺跡(2)

発掘調査報告書

昭和58年度

青森県教育委員会

弥栄平遺跡(2)

発掘調査報告書



昭和58年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、むつ小川原開発予定地域内の埋蔵文化財の保護と活用を図るため、昭和46年度から年次計画をたて、分布調査、試掘調査、発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、その地域内に所在する弥栄平遺跡(2)の記録保存のため、発掘調査を実施し、その成果をまとめたものであります。

調査の結果、縄文時代中期末から後期初頭の土器や遺構が発見されました。

本報告書が今後の埋蔵文化財の保護と研究にいさかでも役立てば幸いと思います。

ここに、調査の実施及び本報告書の作成に当たって、種々御指導、御協力をいただいた調査員をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

青森県教育委員会

教育長 二ツ森 重志

例 言

1 本報告書は、昭和56・57年度に実施した上北郡六ヶ所村に所在する弥永平遺跡(2)の発掘調査報告書である。

2 執筆者の氏名はそれぞれの文末の()内に記した。

3 挿図縮尺は、原則として次のとおりである。

住居跡 $\frac{1}{50}$ 埋設土器遺構 $\frac{1}{50}$ 土壌 $\frac{1}{50}$

土器実測図 $\frac{1}{25}$ 土器拓影図 $\frac{1}{25}$

剥片石器 $\frac{1}{2}$ 碾石器 $\frac{1}{2}$ 文化遺物 $\frac{1}{2}$

4 挿図・表中の表示は次のようにした。

土器(P)……● 石器(S)……▲ 文化遺物……■

遺構・遺物の実測図のスクリーントンは次のようにある。



焼 土



炭化物



地 山 (第IV層)



石器のスリ痕



" タタキ痕

5 石質鑑定は八戸高等学校 松山 力教諭に依頼した。

6 本報告書作成にあたり、次の諸氏より御教示を賜った。(敬称略、順不同)

猪狩忠則、馬目順一、高田和徳、工藤清泰、工藤竹久、目黒吉明、岡本孝之、堀越正行

7 文中の氏名は敬称を略した。

引用参考文献は巻末に記した。

目 次

序

例 言

第1章 調査に至る経過と調査要項	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の概観	5
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
1 遺跡の位置	5
2 周辺の遺跡	5
第2節 遺跡周辺の地形と地質	14
1 地 形	14
2 地 質	14
第3章 調査の方法と経過	17
第1節 調査の方法	17
第2節 調査の経過	20
第4章 検出遺構と出土遺物	24
第1節 検出遺構と遺構内出土遺物	24
1 第1号住居跡	24
2 土 壤	28
3 埋設土器遺構	32
4 集石遺構	34
第2節 遺構外出土遺物	36
1 土 器	36
2 石 器	82
3 その他の遺物	86
第5章 考察とまとめ	94
第1節 住居跡について	94
第2節 出土土器について	94
——ま と め——	96
引用参考文献	98

挿 図 目 次

第1図 周辺の地形と遺跡分布図	4	第26図 第III群土器実測図	41
第2図 遺跡地形図	13	第27図 第IV群土器実測図	43
第3図 遺跡基本層序	15	第28図 第IV群土器拓影図	44
第4図 遺跡西端部の地形・地質 (土層)の模式断面図	16	第29図 第V群A類土器実測図	46
第5図 第1次調査グリッド配置図	18	第30図 第V群B類土器実測図	47
第6図 第2次調査グリッド配置図	21	第31図 第V群C類土器実測図-(1)	48
第7図 第2次調査発掘調査グリッ ド図	22	第32図 第V群C類土器実測図-(2)	49
第8図 第2次調査遺物出土・遺構 配置図	23	第33図 第V群D類・E類土器実測図	50
第9図 第1号竪穴住居跡	25	第34図 第V群土器拓影図-(1)	51
第10図 第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	26	第35図 第V群土器拓影図-(2)	52
第11図 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	27	第36図 第V群土器拓影図-(3)	53
第12図 第2号土壤	28	第37図 第VI群土器実測図	55
第13図 第3号土壤	29	第38図 第VI群土器拓影図	56
第14図 第3号土壤出土遺物	30	第39図 第VII群土器実測図-(1)	58
第15図 第4号土壤	31	第40図 第VII群土器実測図-(2)	59
第16図 第4号土壤出土遺物	31	第41図 第VII群土器拓影図-(1)	60
第17図 第5号土壤	28	第42図 第VII群土器拓影図-(2)	61
第18図 埋設土器遺構	32	第43図 第VI群土器拓影図-(3)	62
第19図 埋設土器実測図	33	第44図 第VII群土器実測図-(4)	63
第20図 集石遺構	35	第45図 第III群～第VII群土器底部拓 影実測図-(1)	64
第21図 第I群土器拓影図	36	第46図 第III群～第VII群土器底部拓 影実測図-(2)	65
第22図 第II群土器拓影図	37	第47図 第VII群～IX群土器実測図及 び拓影	66
第23図 第III～第VII群土器出土グリ ッド図-(1)	38	第48図 遺構外出土遺物-(1)	87
第24図 第III～第VII群土器出土グリ ッド図-(2)	39	第49図 遺構外出土遺物-(2)	88
第25図 第III群土器拓影図	40	第50図 遺構外出土遺物-(3)	89
		第51図 遺構外出土遺物-(4)	90
		第52図 遺構外出土遺物-(5)	91

表 目 次

第1表 六ヶ所村所在遺跡の試掘・発掘調査一覧表	8
第2表 縄文時代早期の周辺遺跡一覧表	11
第3表 縄文時代前期初頭の周辺遺跡一覧表	11
第4表 縄文時代後期前半の周辺遺跡一覧表	12
第5表 弥生時代の周辺遺跡一覧表	12
第6表 第1号竪穴住居跡出土土器観察表	26
第7表 第1号竪穴出土石器計測表	27
第8表 第3号土壤出土土器観察表	30
第9表 第4号土壤出土土器観察表	31
第10表 土器観察表 1	68
第11表 土器観察表 2	69
第12表 土器観察表 3	74
第13表 土器観察表	81
第14表 石鎚計測表	82
第15表 石匙計測表	82
第16表 スクレイバー計測表	83
第17表 R・フレイク計測表	83
第18表 U・フレイク計測表	83
第19表 フレイク	84
第20表 磨製石斧計測表	84
第21表 敲石計測表	85
第22表 磨石計測表	85
第23表 石皿計測表	86

写 真 図 版 目 次

図版 1 遺跡全景及び基本層序	101
図版 2 第1号竪穴住居跡遺物出土状態・完掘・第2号土壤完掘	102

図版 3 第 3 号・4 号・5 号土壤完掘	103
図版 4 埋設土器遺構・集石遺構	104
図版 5 第 1 号竪穴住居跡出土遺物、第 3 号土壤出土遺物	105
図版 6 遺構外出土土器-(1)	106
図版 7 遺構外出土土器-(2)	107
図版 8 遺構外出土土器-(3)	108
図版 9 遺構外出土土器-(4)	109
図版 10 遺構外出土土器-(5)	110
図版 11 遺構外出土土器-(6)	111
図版 12 遺構外出土土器-(7)	112
図版 13 遺構外出土土器-(8)	113
図版 14 遺構外出土遺物、石器-(1)	114
図版 15 遺構外出土遺物、石器-(2)	115
図版 16 遺構外出土遺物、石器-(3)、埋設土器	116
図版 17 土器出土状況	117

第1章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至るまでの経過

昭和44年度に発表された新全国総合開発計画で、本県のむつ小川原地域がその有力な候補地として注目を集めた。その後昭和47年度には、むつ小川原開発第一次基本計画および住民対策大綱が発表され、総合開発計画が具体性を帯びてきた。それと同時に青森県教育委員会は、開発に伴って破壊の恐れのある遺跡の保護措置を講ずるため、分布・試掘調査を実施し、その成果について概要を発表してきた。

昭和49年には、むつ小川原第二次基本計画の骨子が発表され、幹線道路を含む工業基地土地利用図が公表された。

昭和52年3月むつ小川原開発第二次基本計画に係る環境影響評価報告書いわゆる環境アセスメントが住民に示され同年8月閣議了解されいよいよ本格的に着工される見通しとなった。

この開発地域におけるむつ小川原開発株式会社所有地内の発掘調査は、昭和49年、昭和50年にかけての新住宅区にかかる千歳遺跡(13)と、昭和54年、55年の石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン予定地の表館遺跡、発茶沢遺跡がある。

本報告書の弥栄平遺跡(2)は、昭和56年以前は常に弥栄平遺跡としていたものである。この遺跡は、石油国家備蓄基地で必要とする消火用水確保のため、遺跡上を通さざるを得なくなり、昭和56年度に発掘調査を実施したもので、その後、工業用地内の計画的発掘調査として引き続き昭和57年度も継続したものである。

第2節 調査要項

(1) 第1次調査要項

(ア) 調査目的

むつ小川原開発事業実施に先立ち、当該事業区域内に所在する六ヶ所村弥栄平遺跡(2)を、発掘調査をして記録保存をはかるものである。

(イ) 調査予定期間

昭和56年6月10日から昭和56年8月31日まで

(ウ) 遺跡名及び所在地

弥栄平遺跡(2) 上北郡六ヶ所村大字尾駒字表館2-36外

(エ) 発掘調査予定面積

5,000m²

(才) 発掘調査依頼者

むつ小川原開発株式会社

(力) 調査受託者

青森県教育委員会

(キ) 調査担当者

青森県教育庁文化課

(ク) 調査協力機関

六ヶ所村教育委員会

(ケ) 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教授 青森県文化財保護審議会委員
調査員	松山 力	県立八戸高等学校教諭
調査補助員	五十嵐敬昌	
"	加川 正宏	
"	閑 史裕	
"	金今 宗子	
"	内山 文子	
文化課長	山本 博	(現・文化庁文化財保護部記念物課課長補佐)
" 課長補佐	佐藤 昭栄	(現・県立郷土館総務課長)
" 総括主幹	山田 雄二	(現・文化課課長補佐)
" 務務班主査	間山 明臣	(現・農林部水田対策課主査)
" "	藤井 若葉	(現・財務課主査)
" 埋蔵班班長	山道 紀郎	
" 主任主査	天間 勝也	
" 主査	成田 誠治	(現・埋蔵文化財調査センター主任主査)
" 主事	坂本 洋一	(" 主事)

(2) 第2次調査要項

(ア) 調査予定期間

昭和57年6月16日から昭和57年10月31日まで

(イ) 遺跡名及び所在地

弥栄平遺跡(2) 上北郡六ヶ所村尾駒字表館2-47外

(ウ) 発掘調査予定面積

7,000m²

(エ) 発掘調査依頼者

むつ小川原開発株式会社

(オ) 調査受託者

青森県教育委員会

(カ) 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

(キ) 調査協力機関

六ヶ所村教育委員会

(ク) 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教授 青森県文化財保護審議会委員
調査協力員	田中 澄	六ヶ所村教育委員会教育長
調査員	木村 克彦	八戸工業大学工学部助教授
"	松山 力	県立八戸高等学校教諭
"	滝沢 幸長	私立光星学院開発局職員
"	橋本 正信	県立八戸南高等学校教諭
"	山口 義伸	県立木造高等学校稻垣分校教諭
調査補助員	三上 等	
"	花田比呂志	
"	小田川哲彦	
"	矢田真輝子	
"	島田ひろみ	

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 工藤 泰典

次長 古井 隆夫

総務課長 森内 四郎

調査第二課長 山田 洋一

"主任主査 成田 誠治

"主事 岡田 康博



第1図 地形と遺跡分布図 (本図は建設省國土地理院発行の5万分の1地形図を複製したものである)

第2章 遺跡の概観

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 遺跡の位置

本遺跡は、六ヶ所村に所在する湖沼のうち最大の薦架沼^{たかげこも}の北岸に接した標高約45~55mの段丘上に位置している。薦架沼は、太平洋から西方へ細長く入り込んだ沼であるが、本遺跡は、この沼の奥まった部分で、沼口から直線距離で約7kmの場所である。また、国家石油備蓄基地が建設された弥栄平から室ノ久保部落へ通じる県道沿線にもほぼ隣接している場所である。

2. 周辺の遺跡

六ヶ所村内には多数の湖沼が点在するが、いずれもその沿岸に接する段丘上には多くの遺跡が確認されている(第1図)。このうち、昭和58年3月現在まで当教育委員会が発掘調査及び試掘調査を実施した遺跡は、第1表のとおりであり、遺跡の時代は、旧石器時代、縄文時代各期、弥生時代、平安時代、中世とほぼ各時代にわたっている。本遺跡では、縄文時代早期、中期末葉、後期前半及び弥生時代の土器が出土しているので、これらの時期に関連する主な遺跡及び、明確に判定できる土器は出土していないが、前期初頭に関連する遺跡について簡単に記述しておきたい。なお、この項では青森県埋蔵文化財調査報告書を県埋文と略す。

(1) 縄文時代早期

早期の土器が出土した周辺の主な遺跡は11遺跡であるが、このうち住居跡を検出した遺跡は新納屋遺跡(2)と発茶沢遺跡(1)である。

新納屋遺跡(2) 昭和52年に、道路建設のため北端部約2,000m²を発掘調査しているが、この際に早期中葉と思われる住居跡2軒、土壙11基のほか、早期中葉ないしは末葉と思われる住居跡も1軒検出した。遺物は、吹切沢式及びこれに伴うとみられる貝殻条痕文・無文の土器が最も多く出土した。これら一群の土器のほかに、量は多くないが、物見台式・ムシリ I式・並びに赤御堂式と早稻田5類などに比定される土器が出土している。石器は、石皿・凹石・すり石・敲石・石錐・打製石斧・局部打製石斧・磨製石斧・局部磨製石斧・尖頭状スクレイバー・エンドスクレイバー・ラウンドスクレイバー・石箒・石匙・石槍・石鎌などで、特に石錐は、集積された状態で出土するなど多量に出土した。立地場所が沼に面した段丘上であることなどから、漁労に関係の深い集落跡であろうと推定している。

発茶沢遺跡(1) 道路建設及び国家石油備蓄基地へのパイプライン建設のため昭和54年度、55年度に発掘調査を実施したが、この際に、ムシリI式土器を伴うとみられる竪穴住居跡を2軒検出している。

このほか、復原できた土器及び破片だけが出土した遺跡もあるが、それらの主なものは第2表のとおりである。

(2) 縄文時代前期初頭

この時期の土器が出土した主な遺跡は、第3表のとおりであるが、いずれも遺構が検出されていない。しかし、本県における前期初頭の土器に位置づけられている尾較式及び表館式土器が出土した場所は、表館遺跡周辺であり、この近辺の地域は、三沢市の小川原湖周辺に所在する早稻田貝塚とともに早期末葉から前期初頭にかけての土器散布地として以前から知られている。

(3) 縄文時代中期末葉

この時期の遺跡は、数少ないうえに次の後期初頭と一線を画し難いものもあるが、次のような遺跡があげられる。

富ノ沢遺跡(1)次に述べる富ノ沢遺跡(2)と隣接する場所である。斜行縄文を施文した土器が多く出土し、これらの中には、折り返し口縁のものもみられる。また、斜行縄文に鎌描き沈線文を施文したものもある。この沈線文は、縦長弧状、直線、曲線、渦巻、鋸歯状のもので、これらの口縁部も折り返しになっているものもみられる。

富ノ沢遺跡(2) 出土土器は、上記富ノ沢遺跡(1)で出土したような土器のほかに、最花式土器や大木系土器とみられるものも出土している。床面から最花式土器が出土した住居跡も検出されたが、この住居跡は、円筒上層式土器を伴出する住居跡を切って構築されている。

六原遺跡(4)(第1図25)・六原遺跡(5)(第1図26)共に分布調査の際の資料(県埋文第1集1973)だけであるが、中期末のものと思われる破片が採集されている。遺跡は、(4)が田面木沼西端に接する標高20~40mの段丘上で、(5)は、田面木沼西端に開かれた沢の最奥部に当たる標高30mの段丘及び斜面である。

(4) 縄文時代後期前半

後期前半の遺跡は、周辺の遺跡のうちで最も数多く、また、遺構などが検出された遺跡も多い。弥栄平遺跡(1)(旧名称 原原種農場遺跡(1))昭和46年9月に人骨入りの大型甕形土器(縄文後期前半)が発見された遺跡として有名である。この人骨は、頭骨も残存していたため、復顔され現在青森県立郷土館に土器とともに保管されている。この遺跡は、第1表のとおり試掘

調査も実施され、縄文中期末から後期初頭に位置づけられる土器群及び後期前半の土器が出土している。

鷹架沼竪穴遺跡 広範囲なため試掘調査の際 4 区に分けて調査したが、このうちⅢ区からは中期末から後期初頭とみられる土器を伴出する住居跡の一部分を検出した。またⅣ区では、後期の初頭と思われる土器群や後期前半の土器が出土している。

大石平遺跡(1) 広範囲な遺跡であるが、後期に限定すれば、十腰内 I 式土器だけといってよい。試掘調査では、石組炉が 1 基、円形状小竪穴が 3 基、フラスコ状竪穴(フラスコ状ピットと同じ)が 3 基検出されたが、このうち、第 1 号フラスコ状竪穴の底面の約 60cm 上部に、倒立状態で朱塗壺形土器が 1 個出土したほか、第 3 号フラスコ状竪穴の底面には、2 個倒立状態で深鉢形土器が出土した。以上のほか、試掘調査部分より更に西側のやや高い場所には、大小の石が多量に埋もれており、配石構造らしいものも確認されている。

鷹架遺跡 広範囲な遺跡であるが、昭和 54 年度に発掘調査した区域は遺跡の南端部に当たる。この調査によって検出された遺構は、土壤が 18 基である。これらのうち注目されるのは、立石を伴った土壤及び埋設されたとみられる土器が伴出したフラスコ状ピットと円形ピット及び 7 個体分の土器が壊された後廃棄された状態で出土した円形ピットである。これらの土器は、いずれも十腰内 I 式であるが、一括遺物として重要な資料である。

遺構外から出土した後期の土器破片は、十腰内 I 式が多数を占めるが、ほかに、十腰内 I 式以前に編年され得る土器も出土している(成田滋彦 1980)。

以上の 4 遺跡のほか、発掘及び試掘調査を行った遺跡の概要は第 4 表のとおりである。また、このほか分布調査の際に表面採集し、県埋文報告書に拓本図版が掲載されている遺跡は次のとおりである。ハブ道遺跡(第 1 図 3 - 以下第 1 図を略す)、鷹ノ巣沢堤遺跡(4)、二階坂遺跡(5)、遠市遺跡(7)、平沼北堤遺跡(8)、老部川遺跡(1) [9]、六原遺跡(1) [22]、六原遺跡(2) [25]、六原遺跡(5) [26]、六原遺跡(6) [27]、田面木沼貝塚(28)、平沼遺跡(31)、幸畑遺跡(4) [35]、幸畑遺跡(5) [36]、幸畑遺跡(6) [37]、戸鏡遺跡(41)、湯の沢遺跡(2) [63]

(5) 弥生時代

昭和 58 年 3 月現在では、住居跡の検出例がない。しかし、土壤は、千歳遺跡(13)で検出されている。

千歳遺跡(13) 昭和 50 年度の調査の際に、土壤墓と思われる(北林八洲晴 1976) 遺構が検出され、伴出した土器は、遺構内の北側部分から倒立状態で出土した。この土器は、鉢形で、口縁部に浮線波状文、胴部上半に連続連弧文、胴部下半に斜行縄文が施文され、平縁・平底である。このほかに、江別式土器に類似する土器も上記の土壤とは別な場所に散在していた。

大石平遺跡(1) 昭和49年度の試掘調査の際には、弥生時代の土器に類するとみられる破片が数片出土したが、近くに湧水もあり居住地域としては良好な場所である。

このほか、発掘調査及び試掘調査の際に破片が出土した遺跡及び昭和46年度の分布調査（以下分布調査と略称する）の時に表面採集などによる資料で県埋文第1集に実測図及び拓本、写真図版で登載されている遺跡は、第5表のとおりである。

第1表 六ヶ所村所在遺跡の試掘、発掘調査一覧表

遺跡名	番号	立地	調査年月日 (発掘・試掘)	文献
表館遺跡	19	尾駒沼と霧架沼の開口部分に面する標高8~20mの段丘上。	昭和47年6月26日 ~7月16日 (試掘調査) 昭和52年6月8日 ~6月18日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「19 表館遺跡」 県埋文第3集 48. 3. 22 「II 表館・発茶沢遺跡試掘調査」 県埋文第42集 53. 3. 31 「第2章 表館遺跡1」
			昭和47年7月15日 ~7月20日 (緊急発掘調査)	県埋文第3集 48. 3. 22 「III 表館遺跡緊急発掘調査」
			昭和53年8月21日 ~9月30日 (発掘調査の事前調査)	県埋文第50集 54. 3 「第Ⅲ章 表館遺跡2」
			昭和54年4月23日 ~10月31日 (発掘調査)	県埋文第61集 56. 3 「表館遺跡発掘調査報告書」
幸畠遺跡(1)	32	市柳沼北岸に接する標高14~23mの段丘上(太平洋岸西方約2.5kmの地点)。	昭和51年6月28日 ~7月10日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「幸畠遺跡1」 県埋文第36集 52. 3 「第3章 幸畠遺跡1」
幸畠遺跡(3)	34	市柳沼北岸に接する標高20~30mの段丘上(太平洋岸西方約3kmの地点)。	昭和52年6月20日 ~6月25日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「34 幸畠遺跡3」 県埋文第42集 53. 3. 31 「第8章 幸畠遺跡3」
幸畠遺跡(4)	35	市柳沼北岸に接する標高14~26mの段丘上(太平洋岸西方約3kmの地点)。	昭和51年8月23日 ~9月4日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「35 幸畠遺跡4」 県埋文第36集 52. 3 「第4章 幸畠遺跡4」
幸畠遺跡(6)	37	市柳沼北西岸に面する標高28~38mの段丘上(太平洋岸西方約3.5kmの地点)。	昭和51年9月6日 ~9月18日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「36 幸畠遺跡6」 県埋文第36集 52. 3 「第5章 幸畠遺跡6」
発茶沢遺跡(1)	39	尾駒沼南岸と霧架沼北岸に接する標高10~20mの段丘上(太平洋岸西方約2kmから約3.5kmまでの地点の間)。	昭和47年7月13日 ~7月21日 (試掘調査) 昭和48年7月30日 ~8月11日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「39 発茶沢遺跡」 県埋文第3集 48. 3. 31 「表館・発茶沢遺跡試掘調査」 県埋文第9集 49. 3 「III 発茶沢遺跡2」

遺跡名	番号	立地	調査年月 (発掘・試掘)	文献
			昭和49年9月3日 ～9月14日 (試掘調査)	県埋文第24集 50. 3 「III 発茶沢遺跡(3)」
			昭和53年8月21日 ～9月30日 (発掘 調査の事前調査)	県埋文第30集 54. 3 「第Ⅳ章 発茶沢遺跡」
			昭和54年4月23日 ～10月31日 (発掘調査) 昭和55年5月9日 ～10月31日 (発掘調査)	県埋文第67集 57. 3. 31 「発茶沢」
弥栄平遺跡(1)	40	鷹架沼北岸に面する標高 40～64m の段丘上 (太平 洋岸西方約5.5kmの地点)。	昭和47年10月2日 ～10月14日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「40・原原種農場遺跡(1)」 県埋文第3集 「IV・原原種農場遺跡試掘調査」
鷹架沼豎穴遺跡	46	鷹架沼南岸に接する 標高約50～60m の段丘上 (太平洋岸西方6kmの地点)。	昭和52年10月11日 ～10月29日 (試掘調査)	県埋文第42集 53. 3. 31 「第6章 鷹架沼豎穴遺跡」
富ノ沢遺跡(1)	48	尾駿沼西北端に面する 標高約60～70m の段丘上 (太平洋岸西方約4 kmの 地点)。	昭和48年8月20日 ～9月1日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「48・49 富ノ沢遺跡(1)」 県埋文第9集 49. 3
富ノ沢遺跡(2)	49	尾駿沼西北端に面する 標高60～73m の段丘上 (太 平洋岸西方約4.5 kmの 地点)。	昭和49年10月1日 ～10月12日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「48・49 富ノ沢遺跡(2)」 県埋文第24集 50. 3 「V 富ノ沢遺跡(2)」
弥栄平遺跡(2)	57	鷹架沼北岸に接する 標高40～65m の段丘上 (太 平洋岸西方約6.5 kmの 地点)。	昭和52年9月19日 ～10月1日 (試掘調査)	県埋文第1集 48. 3. 31 「57 弥栄平遺跡」 県埋文第42集 53. 3. 31 「第4章 弥栄平遺跡」
弥栄平遺跡(3)	64	鷹架沼北岸に接する 標高50～60m の段丘上 (太 平洋岸西方約5 kmの地点)。	昭和50年10月2日 ～10月12日 (試掘調査)	県埋文第28集 51. 3. 31 「第Ⅱ章 弥栄平(2)遺跡」
弥栄平遺跡(4)	65	尾駿沼西南端に面する 標高50～65m の段丘上 (太 平洋岸西方約5 kmの地点)。	昭和48年7月16日 ～7月28日 (試掘調査)	県埋文第9章 49. 3 「II 弥栄平遺跡(3)」
千歳遺跡(2)	67	標高約70m の低平丘陵の 北側斜面及び縁辺部分。	昭和48年6月11日 ～6月25日 (試掘調査)	県埋文第10集 49. 3. 25
千歳遺跡(7)	72	標高約70m の低平丘陵の 南側斜面及び縁辺部分。	昭和48年6月16日 ～6月26日 (試掘調査)	県埋文第10集 49. 3. 25
千歳遺跡(3)	77	標高78～95m の低平丘陵 地。 (太平洋岸と野辺地沿岸 との中間地帯)。	昭和48年6月26日 ～7月6日 (試掘調査) 昭和49年4月15日 ～8月29日 (発掘調査) 昭和50年4月14日	県埋文第10集 49. 3. 25

遺跡名	番号	立地	調査年月日 (発掘調査)	文献
陸采遺跡①	78	魔架沼へ注ぐ後川の上流右岸の標高70~85mの段丘縁辺	昭和49年8月19日 ~8月30日 (試掘調査)	県埋文第24集 50. 3 「Ⅷ 陸采遺跡①」
陸采遺跡②	85	魔架沼へ注ぐ後川の上流右岸の標高70~80mの台地縁辺。	昭和52年10月3日 ~10月12日 (試掘調査)	県埋文第42集 53. 3. 31 「第9章 陸采遺跡②」
陸采遺跡⑩	87	田面木沼へ注ぐ川の上流右岸の標高75~80mの台地縁辺	昭和52年10月13日 ~10月29日 (試掘調査)	県埋文第42集 53. 3. 31 「第10章 陸采遺跡⑩」
家ノ前遺跡	96	尾駒沼北岸に接する標高30~40mの段丘上(太平洋岸西方約4kmの地点)	昭和54年7月29日 ~8月30日 (試掘調査)	県埋文第48集 54. 3. 31 「第Ⅲ章 家ノ前遺跡」
大石平遺跡①	99	老部川下流域右岸の標高42~63mの段丘上(太平洋岸西方約3kmの地点)	昭和49年9月17日 ~9月30日 (試掘調査)	県埋文第24集 50. 3 「IV 大石平遺跡①」
上尾駒遺跡②	102	尾駒沼北岸に接する標高20~46mの段丘上(太平洋岸西方3.5kmの地点)	昭和53年6月27日 ~8月10日 (試掘調査)	県埋文第48集 54. 3. 31 「第Ⅱ章 102号遺跡」
沖附遺跡①	103	尾駒沼南岸に接する標高50~60mの段丘上(太平洋岸西方4kmの地点)	昭和54年10月1日 ~10月31日 (試掘調査)	県埋文第48集 54. 3. 31 「第Ⅳ章 103号遺跡」
沖附遺跡②	104	尾駒沼南岸に接する標高50~55mの段丘上(太平洋岸西方4.5kmの地点)	昭和54年9月28日 ~10月31日 (試掘調査)	県埋文第48集 54. 3. 31 「第Ⅴ章 104号遺跡」
発茶沢遺跡②	105	魔架沼北岸に接する標高30~45mの段丘上(太平洋岸西方4kmの地点)	昭和52年8月1日 ~9月17日 (試掘調査)	県埋文第42集 53. 3. 31 「第3章 105号遺跡」
新納屋遺跡①	107	市柳沼東北端に接する標高10~15mの段丘上(太平洋岸西方約1.5kmの地点)	昭和50年10月24日 ~10月31日 (試掘調査)	県埋文第28集 51. 3. 31 「第Ⅳ章 新納屋①遺跡」
新納屋遺跡②	109	魔架沼南岸に面する小舌状に突出した標高10~14mの段丘上(太平洋岸西方約900mの地点)	昭和52年10月13日 ~10月16日 (試掘調査) 昭和54年4月23日 ~7月31日 (発掘調査)	県埋文第42集 53. 3. 31 「第7章 新納屋遺跡②」 県埋文第62集 56. 3 「新納屋遺跡②発掘調査報告書」
室ノ久保遺跡②	110	魔架沼北岸に接する標高40~60mの段丘上(太平洋岸西方約7kmの地点)	昭和52年6月8日 ~6月25日 (試掘調査)	県埋文第42集 53. 3. 31 「第5章 室ノ久保遺跡③」
魔架遺跡	115	魔架沼南岸に面する舌状に張り出した標高12~24mの段丘上(太平洋岸西方約1.3kmの地点)	昭和54年4月23日 ~10月31日 (試掘調査)	県埋文第63集 56. 3 「魔架遺跡発掘調査報告書」
弥采平遺跡⑤	116	尾駒沼西端に面する標高60~65mの段丘上(太平洋岸西方約5.5kmの地点)	昭和50年10月13日 ~10月23日 (試掘調査)	県埋文第28集 51. 3. 31 「第Ⅲ章 弥采平④遺跡」

第2表 繩文時代早期の周辺遺跡一覧表

遺跡名	番号	概要	備考
千歳遺跡13)	77	白浜式・小舟渡平式土器及び物見台式土器に比定される七器片が多く出土し、復原できた個体も數十個あった。	
新納屋遺跡1)	107	白浜式・小舟渡平式土器に間連性の強い土器群の破片が出土した。	
寺畠遺跡1)	32	早期前半の同軸押型文土器や白浜式・小舟渡平式土器にみられる貝殻条痕文、刺突文、沈線文、貝殻腹縫文、爪形刺突文等が施文された土器の破片が出土した。また、尖底部分が出土した住居跡の一部分を検出した。	
鷹架遺跡	115	白浜式、吹切沢式、物見台式等に比定される土器の破片や早稲田5類等に比定される繩文施文土器の破片が多く出土した。	
表館遺跡	19	白浜式・小舟渡平式土器・吹切沢式土器及び繩文施文の早稲田5類や東鋼路Ⅲ・Ⅳ式の土器が多く出土し、復原できたものもあった。ほかには、量は多くないが、物見台式、ムシリI式、早稲田3類、赤御堂式、早稲田4類などに比定される土器が出土した。	
発茶沢遺跡2)	105	早稲田5類に比定される土器破片など繩文施文の七器破片が出土した。	
家ノ前遺跡	96	破片のため型式比定はし難いが、早期中葉と思われる貝殻文、条痕文を施文した土器が若干と、ムシリI式及び早稲田5類に比定できる土器破片が出土した。	
上尾駿遺跡(2)	102	白浜式土器及び物見台式土器に比定される土器の破片が出土した。	
大石平遺跡1)	99	早期中葉及び末葉の七器の破片が出土した。	

第3表 繩文時代前期前葉の周辺遺跡一覧表

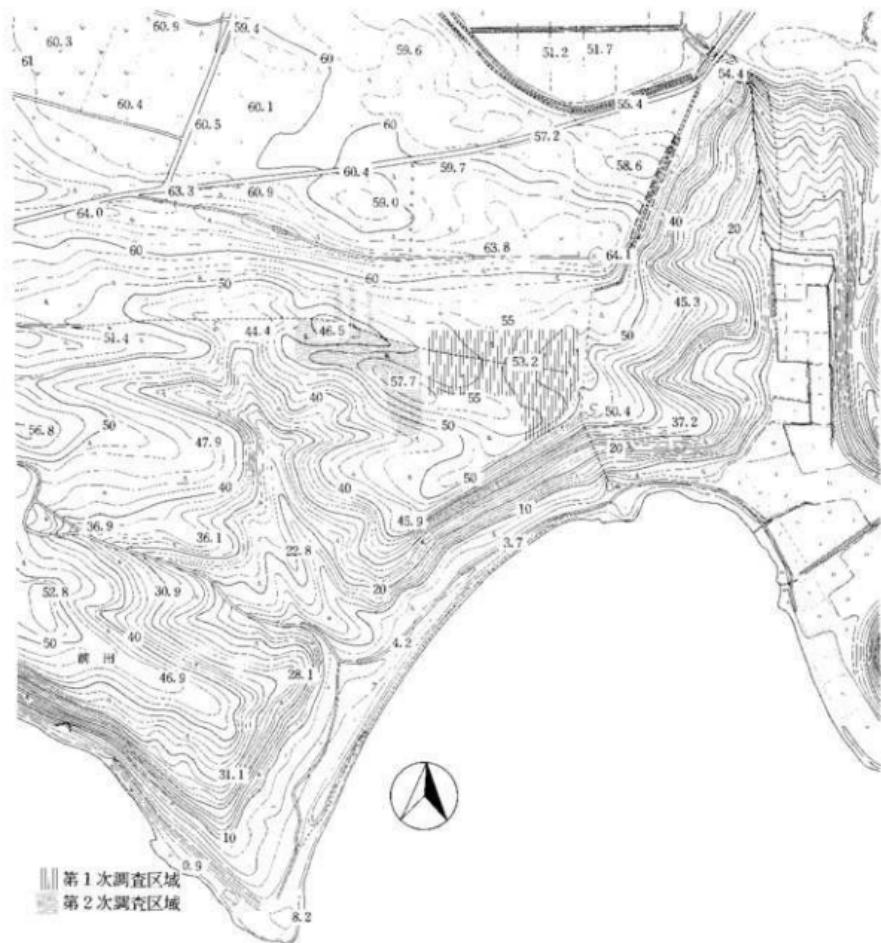
遺跡名	番号	概要	備考
表館遺跡	19	早稲田6類及び春日町式、表館式とみられる破片が出土した。	
発茶沢遺跡1)	39	早稲田6類、尾駿式とみられる土器破片が出土した。	
鷹架遺跡	115	早稲田6類、尾駿式、表館式に比定される土器の破片が出土した。なかには復原できたものも数個ある。	
新納屋遺跡2)	109	長七谷地Ⅲ群土器の破片が出土したが、11縁から胴下部まで接合したものもある。	
上尾駿遺跡	102	早稲田6類の土器の破片及び春日町式とみられる土器が出土した。早稲田6類の破片のなかには、胴下部まで復原できたものもある。	
家ノ前遺跡	96	早稲田6類、尾駿式に類する土器の破片が多数出土した。	
千歳遺跡13)	77	尾駿式とみられる土器の破片が若干出土した。	

第4表 繩文時代後期前半の周辺遺跡一覧表

遺跡名	番号	概要	備考
表館遺跡	19	十腰内I式土器が少量出土した。	
幸畑遺跡1)	32	十腰内I式土器の破片が数多く出土し、復原できたものもあった。また、たく形土器も1個出土した。	
発茶沢遺跡1)	39	後期初頭の土器及び十腰内I式土器が出土した。	
宮ノ沢遺跡2)	49	後期初頭から十腰内I式にかけての土器が出土した。	
千歳遺跡13)	77	後期初頭の土器及び十腰内I式土器が出土した。	
睦栄遺跡1)	78	十腰内I式土器の破片が数多く出土した。	
睦栄遺跡10)	87	十腰内I式土器の破片が散布していた。そのほか、フラスコ状ピットの底面直上からも破片が出土した。	
家ノ前遺跡	96	後期初頭から十腰内I式にかけての土器が出土した。	
上尾駿遺跡2)	102	十腰内I式土器が多量に出土し、復原できた土器もあった。	
沖附遺跡2)	104	十腰内I式土器の破片が多数出土した。	
室久保遺跡2)	110	弥栄平遺跡(2)の西側に隣接する遺跡であるが、十腰内I式土器の破片が出土している。	
幸畑遺跡7)	120	後期前半の土器が多量に出土した。	昭和56年に試掘調査

第5表 弥生時代の周辺遺跡一覧表

遺跡名	番号	概要	備考
表館遺跡	19	昭和54年度の発掘調査の際、二枚構式土器の破片が出土した。	
発茶沢遺跡1)	39	発掘調査の際、鏡面状文のある土器の破片が少量出土した。	
家ノ前遺跡	96	浮線波状文のある口縁部破片や連続連弧文・山形文及び斜行縞文が施された肩部破片などが出土した。	
上尾駿遺跡2)	102	連続連弧文・山形文、平行沈線文及び斜行縞文その他の土器の破片が出土した。	
六原遺跡3)	24	分布調査の際、田舎館式に類似する土器を採集した。	県理文第1集 P40~41
幸畑遺跡1)	32	分布調査の際、二枚構式と思われる土器の破片を採集した。	県理文第1集 P56~58
幸畑遺跡3)	34	分布調査の際、二枚構式土器の破片が採集されたが昭和52年度試掘調査では、土器が出土しなかった。	県理文第1集 P61~62



第2図 遺跡地形図

第2節 遺跡周辺の地形と地質

1. 地形

上北郡六ヶ所村は、下北半島頸部の太平洋側にあって、この付近には、北方から尾駒沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼がみられる。また、海岸段丘の発達も顕著で、吹越鳥帽子段丘（標高100～140m）、長者久保段丘（90～130m）、千歳段丘（60～100m）、七鞍平段丘（12～50m）の4段丘が確認できる。そして太平洋沿岸には、上記の湖沼群を閉塞するような形で天ヶ森砂丘が分布している。

本遺跡は、弥栄平南方約500m、また、馬鈴薯原原種農場南西約800mの地点にあって、遺跡南方には鷹架沼がある。鷹架沼は、東西方向に約4km、南北方向に約500mの細長い沼で、沼の北方は急崖となっている。本遺跡の北にある弥栄平付近は、標高40～50mの平坦な海岸段丘（七鞍平段丘に相当）である。また、弥栄平の南方に所在する本遺跡付近は標高50～70mであり、また弥栄平付近より高く起伏の多い凹凸面で、遺跡西方に広大に分布する上位の千歳段丘の浸食斜面となっている。中央部には標高45mの谷状凹地が東西方向に発達し、谷状凹地の北方は標高65～70mの東西方向に伸びる帯状の小丘地である。また、南方も標高50～55mの東西方向に伸びる帯状の小丘地で、この小丘地の南斜面は鷹架沼に面する急崖となっている。本遺跡は、中央部の谷状凹地から南の小丘地にかけて位置し、標高45～55mである。遺跡西端は鷹架沼に注ぐ浸食谷となっていて、この浸食谷のために、遺跡の位置する南の小丘地は西方に傾斜する地形となっている。なお、北の小丘地は、東方に緩く傾斜する地形である。谷状凹地の西端は第4図にあるように、南の小丘地の浸食崩壊によって地形的に多少の高まりを示している。すなわち、南の小丘地の頂部がII層形成時にブロック状に北斜面へ地滑り的に移動したものと考えられ、その移動距離が短かいためにほぼ原形をとどめた状態で北斜面のII層の上位に堆積したものである。ただ、北斜面の頂部付近にはII層及びIII層の混合物が移動の際の崩壊物として堆積し、その混合物をとび越えて移動したものであろう。この崩壊によって、南の小丘地の北斜面の傾斜角が6°～7°緩傾斜となり、東方での傾斜角が15°～20°と急傾斜となっているのと違っている。中央部の谷状凹地は、この崩壊によってその西端部が閉塞され、東西方向に細長いプール状の低地となってしまった。

2. 地質

遺跡周辺の基盤は、第四系下部洪積統の野辺地層である。野辺地層は、下位の新第三系を不整合におおい、本遺跡周辺全般にわたってほぼ水平に堆積している。全体的に砂とシルトとの

互層から成り立ち、葉理 (lamina) の発達がみられる。なお、遺跡内では斜交葉理 (cross-lamina) の発達が顕著である。この付近は、千歳段丘の浸食斜面であるために、野辺地層をおおう段丘構成層を確認することができなかった。

遺跡内の基本層序は次のとおりである。(第3図参照)

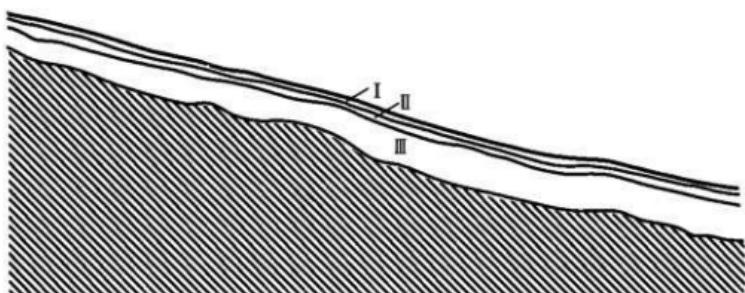
I層 黒褐色土層 (5 cm) 表土である。粘性、湿性がなく、やや砂質で綿まりがなくソフト



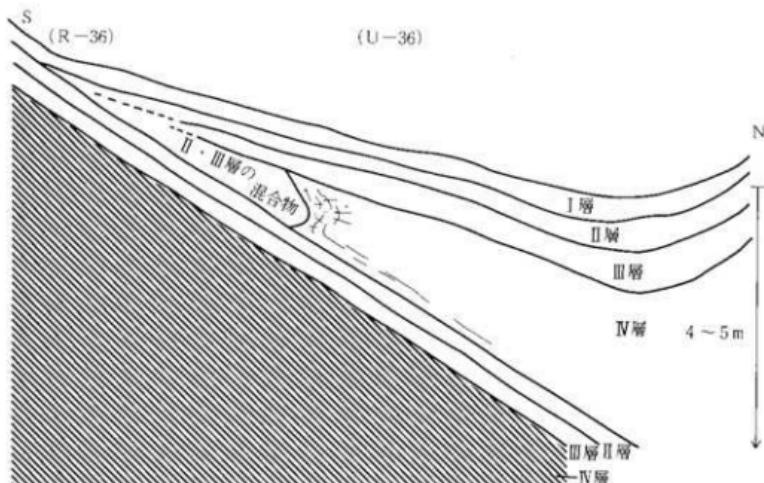
$O-27^+$ $O-28^+$ $O-29^+$ $O-30^+$

$O V-2^+$ $O U-2^+$ $O T-2^+$ $O S-2^+$

OV-2~OS-2セクション



第3図 遺跡基本層序



第4図 遺跡西端部の地形・地質（土層）の模式断面図

である。

- II層 黒褐色腐植質土層（10~15cm） 発茶沢遺跡II層に対比される。粘性、湿性があって、綿まりもみられるが、もろい。炭化物を多量に含有している。II層下部から下位のIII層上部にかけて縄文時代中期末葉から後期の遺物が包含されている。
 - III層 暗褐色砂質土層（30~100cm） 砂質分に富むが、炭化物の混入等で腐植質土であることから、土壤化しつつある土層である。なお、谷状凹地から北方の小丘地の南斜面にかけてIII層下部に粘性、湿性の強い泥炭質の黒色腐植質土層（厚さ約30cm）がレンズ状に挿入している。
 - IV層 黄褐色中粒砂層 基盤の野辺地層に相当するが、上部は風化浸食作用によって綿まりのない風成層となっている。なお、谷状凹地においてはIV層最上部に発茶沢遺跡V層の黄褐色ラビリ質浮石層が局部的に認められた。
- （山口）

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

調査区の設定

遺跡は、鷹架沼の北岸に接する段丘上にあるが、この段丘上は、東側がやや平坦な面が多く、西側が起伏に富んだ地形になっている。

発掘区域は、第1次調査が東側部分で、第2次調査が西側部分である。

上記のような地形的相違により、第1次と第2次のグリッド設定は、次のようにした。

第1次調査は、N-(10)~Wの線を基準にして、東から西方向へアルファベット、南から北へ算用数字を付し、各グリッドの名称は、両者の組み合わせで表示した（第5図参照）。また、1グリッド大きさは、3m×3mである。

第2次調査区は、小丘地が東西方向に並行する地形であるため、磁北に合わせてグリッドを設定した。原点は、第1次に隣接する任意の点とし、南から北方向へアルファベット、東から西方向へ算用数字を付した。各グリッドの名称は、第1次と同じくアルファベットと算用数字の組み合わせで表示した。なお、発掘区域が、後述するように、原点よりも更に南側へ延長することになったので、南側区域では、アルファベットの前に「0」を付し、「0Z-1」「0Y-1」のように表示することとした（第6図参照）。また、1グリッドの大きさは4m×4mとした。

第1次・第2次共に、数個のグリッドを合わせてトレンチ状に設定した場所もある。

発掘調査の方法

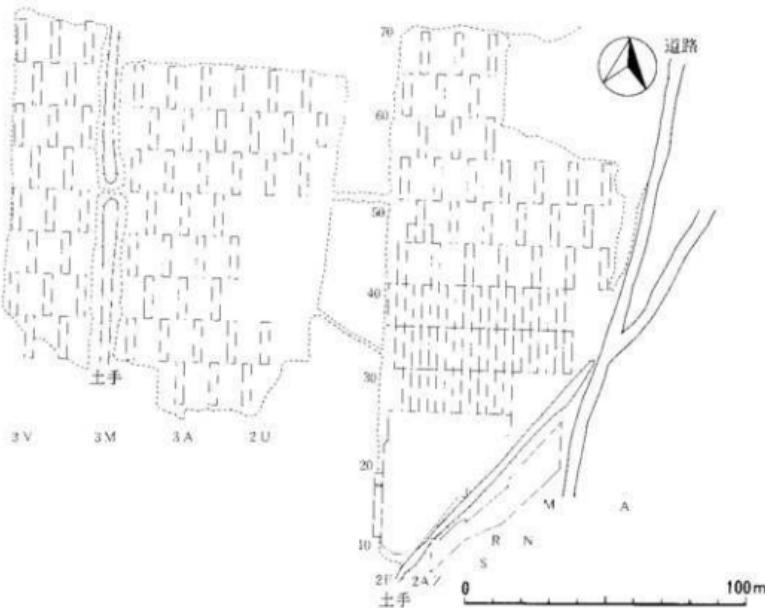
1. 粗掘りの方法

第1次調査では、東南側の沼べりから粗掘りを始め、遺物の出土状況によって順次北側及び西側へ掘り進めた。第2次調査では、土捨て場確保の必要から、まず調査区西側部分で32~36ライン上のグリッド及び、調査区東側部分で10ラインとHラインに画されたグリッドから粗掘りに着手した。第1次・第2次調査とも粗掘りの際、各層の遺物の包含状況を把握して、遺構確認は極力上面で行うようにし、更に遺構の掘り込み面と基本層序との関係を把握するよう努めた。

2. 遺構の調査方法

(1) 調査は、四分法による分層発掘で行うこととした。また、遺構内堆積土については、特に精密に観察を行った。

(2) 遺物の取り上げについては、各遺物のドット・マップを作成して取り上げた。その際、形



第5図 第1次調査グリッド配置図

状の図化可能な大型土器破片等については、微細図を作成した。更に、遺物の出土状況を明確にしておくため、個々の遺物に対して遺物番号・出土層位・レベル・遺物の表裏（土器についてのみ）・備考等を記録した。

(3) 住居跡の場合は、特に次の点に留意し、その他の遺構についてもこれに準じて調査した。

- 立地条件- 台地の占有形態・集落内の位置
- 堆積土- 各層の形成過程、住居埋没の成因
- 柱穴- 柱穴の確認面・住居跡との帰属関係・主柱穴の配置・支柱穴の有無及び配置・柱の規模・掘り方と柱痕の関係・柱の埋め方・使用木材
- 間仕切り- 有無・間仕切り方法
- 出入口- 位置及び施設の有無
- 床面- 利用頻度と利用状況及び構築方法・敷物の有無
- 炉- 位置・形態・構築方法・使用頻度・内部状況（獸魚骨・炭化植物等の有無）
- 壁穴外施設- 周堤及び壁穴外柱穴の有無・その形態と機能

その際、各層の形成過程を復原し、各層に含まれる土器の時間差を区分できるような記録化に

努めた。また、自然遺物等の出土にも極力努めた。

3. 実測図の作成

平面図：遺構の平面図は原則として $\frac{1}{50}$ 縮尺、炉跡その他微細図が必要なものは $\frac{1}{10}$ 縮尺とした。

簡易通り方測量によって作成した。各平面図には原則として25cm間隔にレベルを記入した。

断面図：遺構の断面図は原則として $\frac{1}{50}$ 縮尺、炉跡その他微細図が必要なものは $\frac{1}{10}$ 縮尺とした。

土層断面図には土色・かたさ・混入物等の諸特徴を記入した。土色については、『新版標準土色帖』（小山、竹原：1967）によった。

4. 写 真

写真撮影は35mm版モノクロームフィルム、及びカラーリバーサルフィルムを用いた。

（成田）

第2節 調査の経過

〈第1次調査〉

昭和56年6月8日、発掘調査器材運搬・プレハブを現場設営するとともに、作業員に対し調査について説明会を開催した。翌9日、調査方法等について調査関係者による打合せ会議を開催した。調査は10日から開始した。調査地点は一面ササ類が繁茂しているため、この笹刈り作業から開始し、グリッド設定作業、発掘作業も並行して行った。グリッド設定は、調査区南側に基本杭を打ち込み、2E-11グリッド付近から始めた。

発掘調査は、調査区最南端2D-11グリッドから順次北に向けて進めることにしたが、土捨て場を確保する必要があるため、最初に南東にある土手（放牧地として利用した時設置したもの）の外側松林を発掘した。この地点からは遺構・遺物とも確認されなかった。

6月中に発掘した地域からは、遺構・遺物はほとんどなく、7月に入ってR-22グリッドで土器片、X-26グリッドから石匙等が出土した。

7月21日、比較的平坦な部分の調査を終了した。次いで北側の斜面部分にグリッド設定し発掘に着手した。この地区も遺構・遺物とも少なく、また、包含層も少ないため予想以上に順調に進行した。そのため、密集する松林を越えた西側地区に調査区域を拡大することになり、その部分の笹刈りを始めた。7月29日からグリッド設定にかかり、発掘調査を開始した。

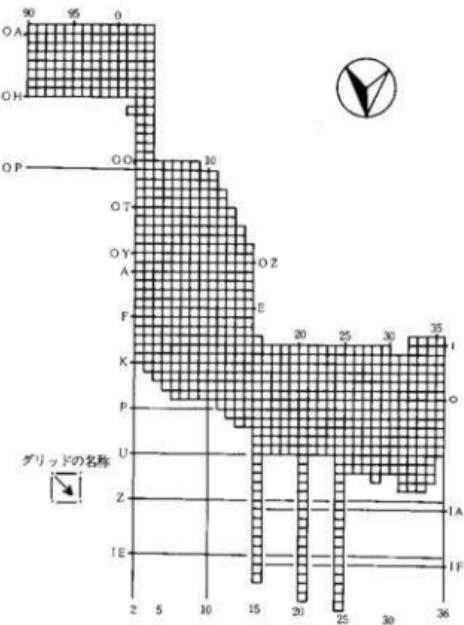
8月16日、土層観察用のセクション・遺物の出土状況等を実測図に作成。21日から精査した部分の埋め戻しを徐々に行い、29日に全調査を終了した。(天間)

〈第2次調査〉

文化課が実施した弥栄平遺跡(1)試掘調査の作業員を引き継ぎ、6月16日に発掘調査を開始した。発掘区域は、雑木林になっている場所であるため、まず雑木伐採及び笹刈り作業から始め、次いでグリッド設定、グリッド粗掘作業へと進んだ。

土捨て場予定区域と考えた32ライン以東及び10ラインとGラインに画された北側の区域を調査したが、遺物・遺構が検出されなかったので、排土区域として設定し、10ライン～32ラインの粗掘に移った。

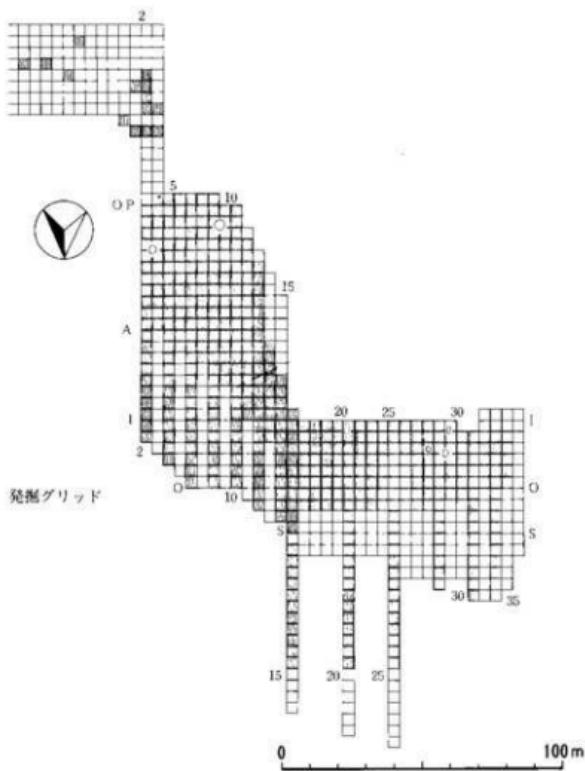
粗掘作業の際、分層的に作業を進めるために、土層観察用にベルトを残し、土層を観察しながら掘下げた。地形等を考慮し、東西セクションは0ライン、南北セクションは20ラインをセクションベルトとした。



第6図 第2次調査グリッド配置図

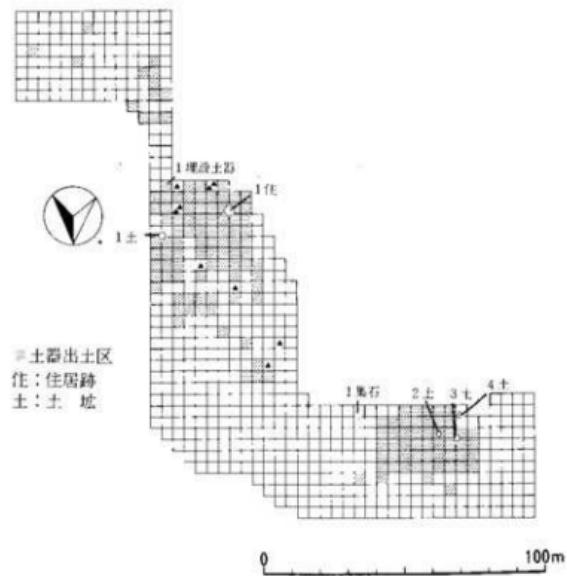
N- 22グリッドから土器片が出土したのをきっかけとして、次々と土器が出土し、特にM-24、M- 25、N- 24、N- 25にかけて復原可能な土器（第30図）が出土するなど、O- Iラインから22~31ラインの区域にかなりの土器の散布がみられた。この区域では、土壤が3基検出され、ほかに、多数の石が集積されたような状態で出土した部分（I- 20・J- 20グリッド）もあった。遺構としては判定できなかったが、L- 14、O- 17、O- 19、Q- 25、I- 27、I- 28グリッドから落込みが検出された。

Oラインでは、O- 20・O- 22・O- 26・P- 28グリッドから土器片が数片出土しただけで他のグリッドからは遺物が出土しなかったのでOライン以北は数本のトレンチを設定し、第IV層まで掘下げてみた。その結果、遺物・遺構が検出されなかった。なお、この地域は配石遺構（昭、52）が検出されているのでこの周辺一帯をボーリング棒で探査したが、配石が見当たらなかった。そこでこの区域の調査はこの段階で打ち切ることとし、未発掘相当面積分はIライ



ン以南の区域と振替えることで依頼者の了解を得た。Iライン以南区域の発掘は、雑木の伐採・笹刈りで開始し、次いで、グリッド設定にはいった。なお、Iライン以南の一部と、15ライン以西は急な崖である。また、Jラインには遺物が散見するだけだったのでグリッド設定をしなかった。

Iライン以南では、第8図のように遺物が出土しなかったグリッドはいくつがあるものの、復原できた土器や、磨製石斧・石鎌・石ヒ等の石器など多くの遺物が出土した。遺構では、縄文時代中期末あるいは後期初頭とみられる竪穴住居跡1軒と土壙1基・埋設土器遺構1基が検出された。この区域は、南側へ傾斜する地形であるが、南側へ掘り進めるほど出土遺物の量が



第8図 第二次調査遺物出土・遺構配置図

多くなる傾向を示している。

00ライン以南の区域では、13グリッドの表土を排土した段階で、すべてのグリッドから遺物が多量に出土した。

10月中旬から、発掘区域全面を埋め戻し、10月30日に作業をすべて終了した。

(成田)

第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

縄文時代の竪穴住居跡1軒、土壙4基、埋設土器遺構1基、集石遺構1基が検出された。遺構は、調査区域を北西に伸びる台地の、鷹架沼に面する南向き斜面に構築され、近くに土器の捨て場がある。以下、遺構を種類ごとにまとめ、個々の遺構及びその出土遺物等について述べる。

1. 第1号竪穴住居跡（第9・10・11図、図版2-1・2、図版5-1-16）

〔位置と確認〕 北西に伸びる台地の鷹架沼に面する南向き斜面、OQ-9・10、OP-9・10グリッドに位置し、第II層上面で不整円形の黒色土の落ち込みを確認した。

〔重複〕 認められない。

〔規模と形態〕 平面プランはほぼ円形である。大きさは、上端で3.5m×3.4m、下端で3.2m×2.8mで、深さは30~70cmである。床面積は約7.3m²である。周囲には他の遺構は検出されなかった。

〔壁〕 第IV層を掘り込んで構築され、壁は、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁面に特別な施設痕はみられない。

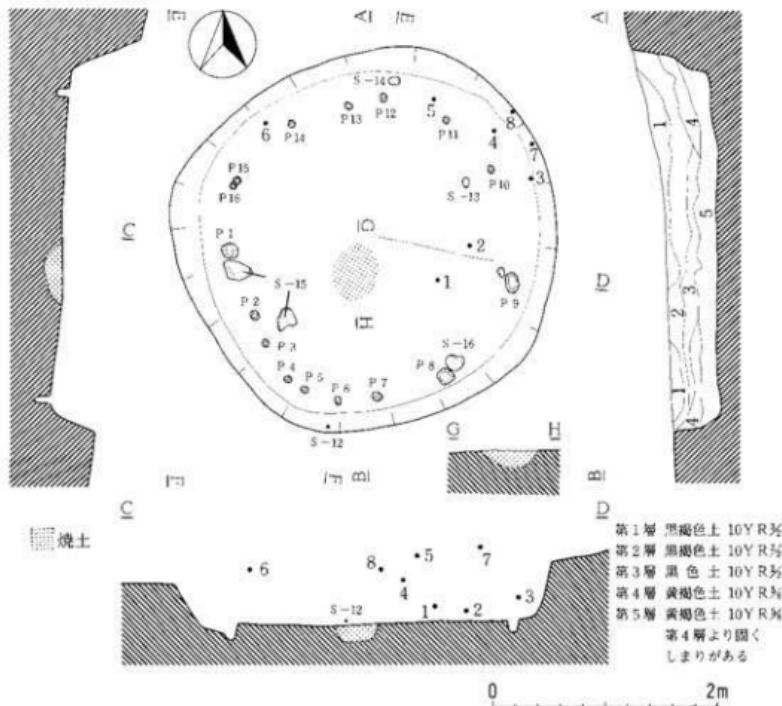
〔床面〕 傾斜地に構築されているが、床面はほぼ平坦で、炉周囲はかたく縛まっているが、壁際では比較的やわらかい。

〔壁溝〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 住居跡内から16個の壁柱穴が検出された。これらの柱穴は壁寄りのもの（ピット1~9）、壁から若干離れるもの（その他のピット）があり、前者は傾斜地の下側に位置し、しかも柱穴間の間隔が後者に比べて狭い。柱穴の深さは、最大18cm、最小6cm、平均約10cmで、傾斜の下側のピットが深い。

〔炉〕 住居跡の中心から若干南側（傾斜の下側）に地床炉が設けられている。これは床面が著しい火熱を受けて焼土化したものである。炉の直上からは焼土・灰・炭化物等は検出されなかった。

〔出入口〕 出入口と明らかに判断できるものはないが、壁柱穴ピット8・9は、直径が他のピットに比べて若干大きく、しかもその間隔が約1.5mと他の柱穴間に比べて大きく開くこと、また、この箇所の壁高が低いこと、更に、南東向きで季節風や谷筋を渡る風を避ける方向であ



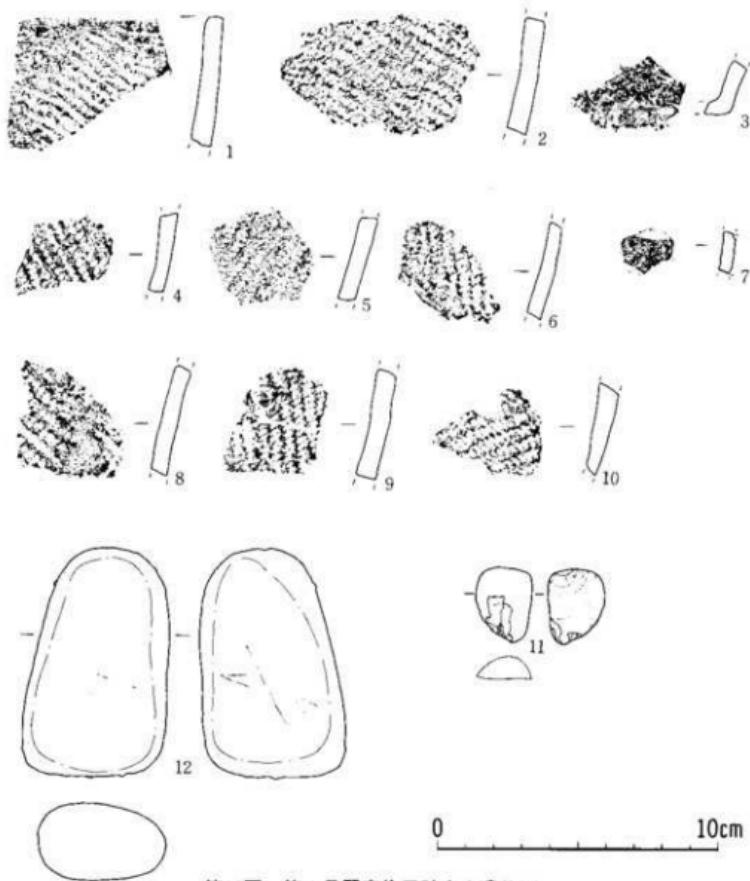
第9図 第1号竪穴住居跡

ことから、この南東の方向に面して出入口が設けられていた可能性が高い。

〔その他の施設〕 確認されなかった。

〔堆積土〕 5層に区分できた。第1層は黒褐色土で、部分的に第I層の腐葉土を含む。第2層はより黒色が強く、土質は第1層と本来的には同一層であるかもしれない。第3層は更に黒色が強くなり、土質は第2層と同様である。第4層は第2・3層の混合土と壁の崩落土の混合層である。第5層は第4層より黄褐色が強く、全体的に綺まった感を受けるが、人為的に埋め戻した痕跡はない。

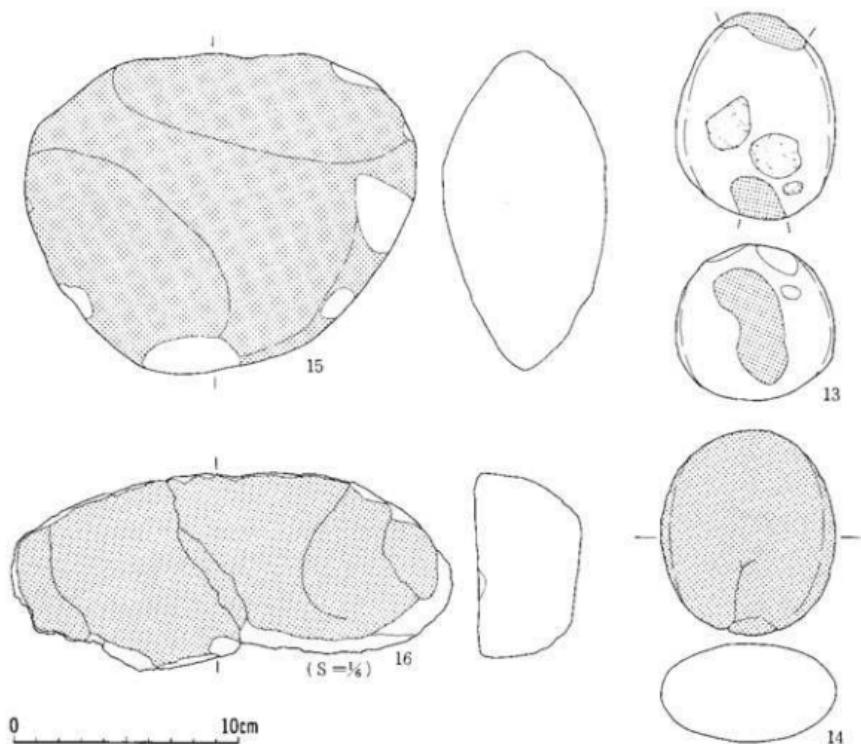
〔出土遺物〕 堆積土及び床面から土器、石器が出土した。土器の出土状態については特記すべきことはないが、床面直上から土器が3片、刻線のある石製品、石皿が出土している。石皿は離れた地点で出土し、接合したものである。また、床面には礫が認められるが、使用痕を有するものが3点ある。なお、堆積土中より両種打法による剥片が1片出土している。



第10図 第1号竪穴住居跡出土遺物(1)

図版	層位	P番号	部位	外施文(地文)	胎土分類	備考
1	床直	1	口縁部	L R 條文(縦位回転)	良好	V
2	"	2	側部	"	"	*
3	"	3	底部	"	"	*
4	フク土	4	側部	R L 條文(縦位回転)	"	*
5	"	5	"	"	"	*
6	"	6	"	"	"	*
7	"	7	"	不明	"	*
8	"	8	"	L R 條文(縦位回転)	"	*
9	"	9	"	R L 條文(縦位回転)	"	*
10	"	10	"	"	"	*

第6表 第1号竪穴住居跡出土土器観察表



第11図 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)

番 号	器 種	出土地区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 種	備 考
11	剥 片	フク土	25.2	19.9	8.0		寅岩	
12	刻線礫	床直	81.4	51.3	28.3	200	安山岩	
13	磨石	"	92.4	71.1	71.0		"	
14	磨石	"	90.6	77.0	45.3		"	
15	石皿	"	394.0	172.0	58.0		"	
16	"	"	174.0	143.0	72.5		凝灰岩	

第7表 第1号竪穴住居跡出土石器計測表

【小結】 本住居跡は、ほぼ中央に地床炉を有し、壁柱穴を配する円形の竪穴住居跡である。このような平面形の住居跡は、縄文時代中期末～後期初頭によくみられるものである。また、床面出土の土器のうち明らかに型式を同定できるものはないが、胎土・焼成・施文文様より中期末～後期初頭のいずれかの型式に属するものと考えられる。したがって、本住居跡は中期末～後期初頭の時期のものと考えられる。

2. 土 壤

5基の土壤が検出された。しかし、出土遺物が全くないものや、あっても細片のため土壤の時期を決定し難い。また、土壤の用途を決定できるような痕跡、遺物の出土状態はなく、土壤が相互に関連するものが独立して機能するものが不明である。

第2号土壤（第12図、図版2）

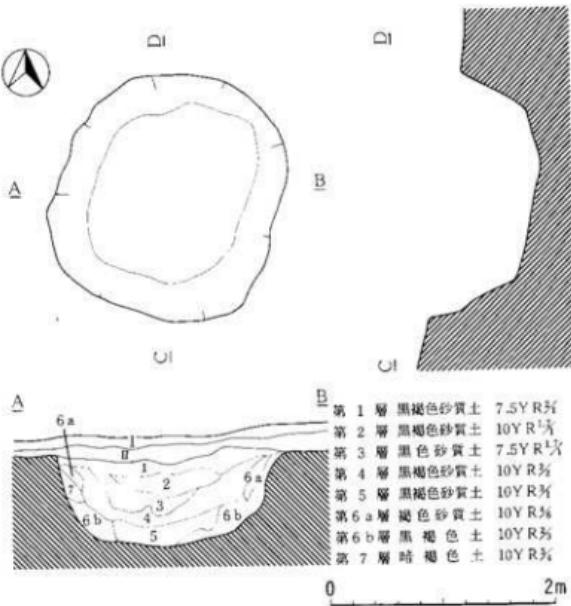
〔位置と確認〕 北西に伸びる台地の頂上部南側、K-29・30、L-29・30グリッドに位置し、第III層上面で黒褐色の不整円形の落ち込みを確認した。

〔重複〕 認められない。

〔規模と形態〕 上端で2.2m×1.9m、下端で1.6m×1.3mで、平面形は、隅丸長方形に近い不整円形である。深さは約1mである。

〔壁・底〕 壁は第III層を掘り込んで構築され、底部より緩やかに立ち上がるが、途中から急になる。底面は平坦ではなく、緩やかな起伏がある。

〔堆積土〕 7層に区分できた。第1～5層は黒褐色砂質土で、第6・7層は褐色砂質土であ



第12図 第2号土壌

る。第6層は第III層と近似し、崩落土又は土壤を掘り上げた際の土が流入した可能性がある。
焼土・炭化物等の混入は認められない。

(出土遺物) 出土していない。

第3号土壤 (第13・14図、図版3-1、図版5-17~21)

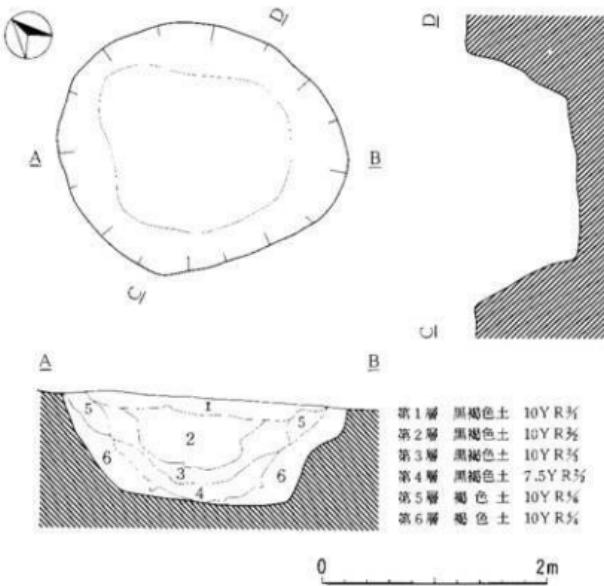
(位置と確認) 北西に伸びる台地の頂上部南側、K-27グリッドに位置し、第2号土壤に隣接する。第III層上面で黒褐色の不整梢円の落ち込みを確認した。

(重複) 認められない。

(規模と形態) 上端で2.6m×2.2m、下端で1.7m×1.4mで、平面形は不整梢円形である。深さは約1mである。

(壁・底) 壁は第III層を掘り込んで構築され、底面より緩やかに外に向かって立ち上がる。底面は平坦である。

(堆積土) 6層に区分できた。第1層~第4層は黒褐色砂質土で、第5・6層は黄褐色砂質土である。第6層は第III層と近似し、壁の崩落土又は土壤を掘り上げた際の土が流入した可能



第13図 第3号土塙

性がある。焼土・炭化物等の混入は認められない。

(出土遺物) 堆積土

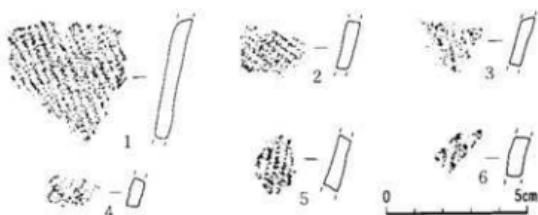
中から土器が6片出土

した。胎土・焼成・施

文文様からみて縄文時

代中期末葉 - 後期初頭

のものと考えられる。



第14図 第3号土塙出土遺物

第8表 第3号土塙出土土器観察表

図版	層位	P番号	部位	外面施文(地文)	胎土	分類	備考
1	フク土	1	胴部	L R 楕文(縱位回転)	良好	VII	
2	"	2	"	"	"	"	
3	"	3	"	"	"	"	
4	"	4	"	不明	"	"	
5	"	5	"	L R 楕文(斜位回転)	"	"	
6	"	6	"	"	"	"	

第4号土壤 (第15・16図、図版3-2)

(位置と確認) 北西に伸びる台地の南向き斜面、OT-2・3、OU-2・3グリッドに位置し、第III層上面で黒褐色の円形の落ち込みを確認した。

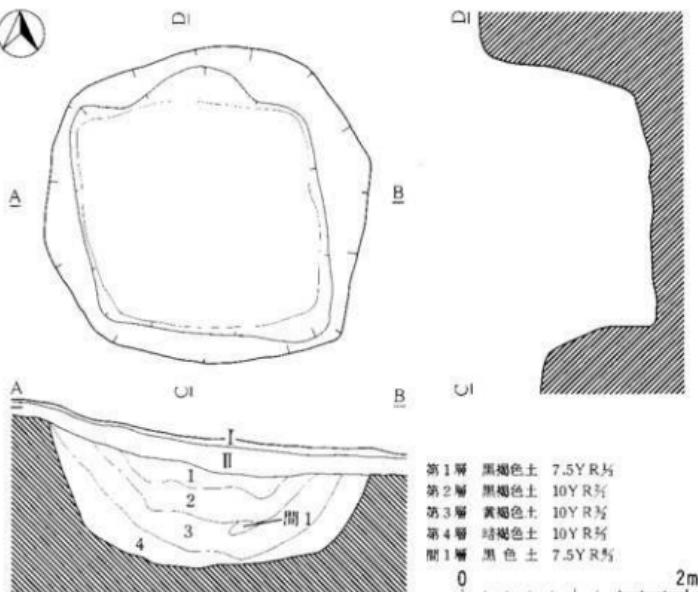
(重複) 認められない。

(規模と形態) 上端で一辺が2.2mの隅丸方形である。幾分円みを帯びるのは崩落のせいと思われる。下端は一辺が1.9mのゆがんだ隅丸方形である。深さは約1.5mである。

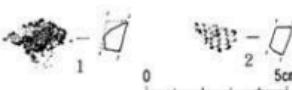
(壁・底) 壁は第III層を掘り込んで構築され、底面より若干外に開きながら直線的に立ち上がる。底面は平坦である。

(堆積土) 4層に区分できた。第1・2層は黒褐色砂質土で、第3・4層は黄褐色砂質土である。最下層の第4層は第III層に近似し、壁の崩落土又は掘り上げた際の土が流入した可能性がある。焼土・炭化物等の混入は認められない。

(出土遺物) 堆積土中より土器が2片出土した。2片とも細片で、磨耗が激しいため時期は不明である。



第15図 第4号土塙



第16図 第4号土塙出土遺物

第9表 第4号土塙出土土器観察表

図版	層位	P番号	部位	外面施文(地文)	胎土	分類	備考
1	フク土	1	肩部	不明	良好	Ⅳ	
2	~	2	~	LR繩文(斜位回転)	~	~	

第5号土壤 (第17図、図版3-3)

〔位置と確認〕 北西に伸びる台地の南向き斜面、I・J-29グリッドに位置し、第III層上面で半月型の黒褐色の落ち込みと、その上に焼土・炭化物が分布していることを確認した。

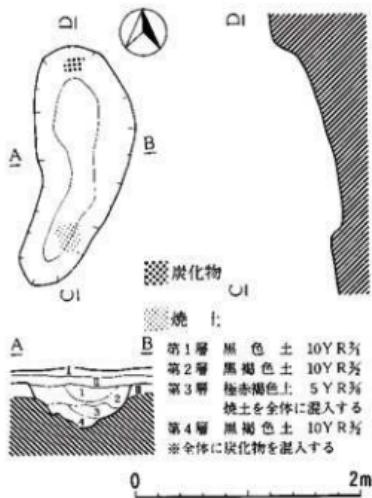
〔重複〕 認められない。

〔規模と形態〕 上端で $2.2m \times 0.8m$ 、下端で $1.6m \times 0.2m$ で、平面形はゆがんだ半月型である。深さは $0.45m$ である。

〔壁・底〕 壁は第III層を掘り込んで構築され、底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、現地表と同じように傾斜する。

〔堆積土〕 4層に区分できた。第1・2・4層は黒褐色砂質土である。第3層は焼土が混入している層である。

〔出土遺物〕 出土していない。



第17図 第5号土塚

3. 埋設土器遺構 (第18・19図、図版4、図版16-51)

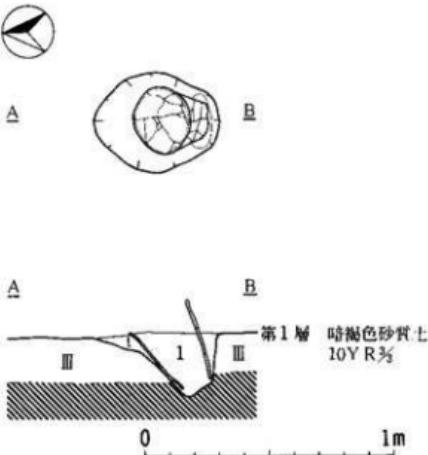
〔位置と確認〕 北西に伸びる台地より鷹架沼に続く緩斜面、OO-3グリッドに位置し、第III層上面で掘り方及び埋設土器の口縁部を確認した。

〔重複〕 認められない。

〔規模と形態〕 掘り方の上端で $50cm \times 40cm$ 、下端で $20cm \times 10cm$ で、平面プランはほぼ長楕円形である。断面はほぼ逆台形で、深さ $25cm$ である。

〔壁・底〕 壁は第III層半ばを掘り込んで構築され、底面より直線的に立ち上がる。底面は平坦である。

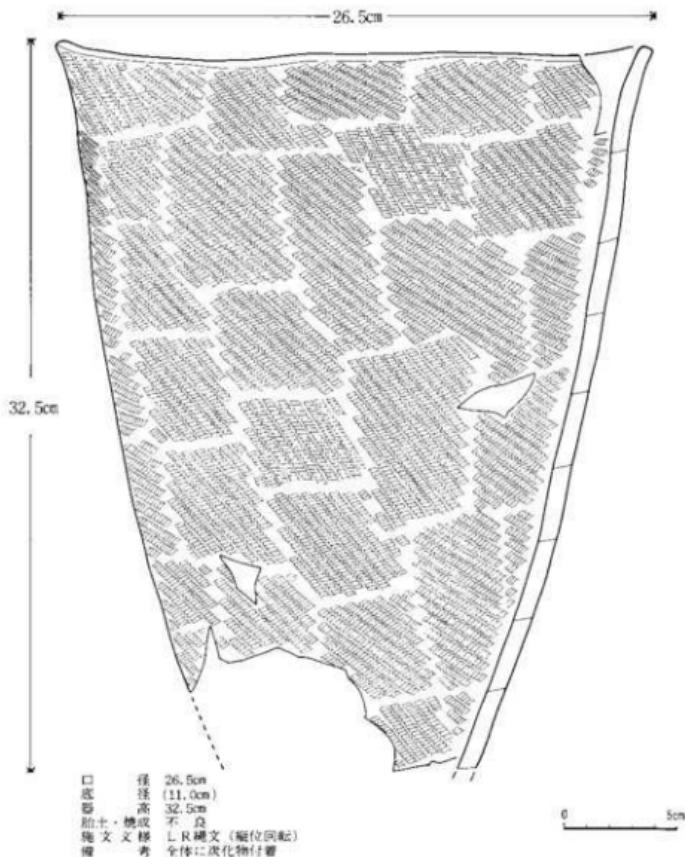
〔堆積土〕 1層のみである。暗褐色砂質土層で、粘性・湿性がある。層全体に若干の炭化物



第18図 埋設土器遺構

を含む。埋設土器内に充填されている土も同層である。

〔出土遺物〕 土器は口縁部を上に、掘り方の底面に接するように斜立した状態で出土した。平縁で、器表に斜繩文を施す深鉢形土器である。胴部に若干の膨らみを残しながら立ち上がり、口縁部が若干外反する。口唇部は外傾し、工具で平坦に整形され、施文はない。器表にはR字の原体を縦位に回転施文している。胎土には細砂粒を含み、粗く、焼成は良好である。色調は



第19図 埋設土器実測図

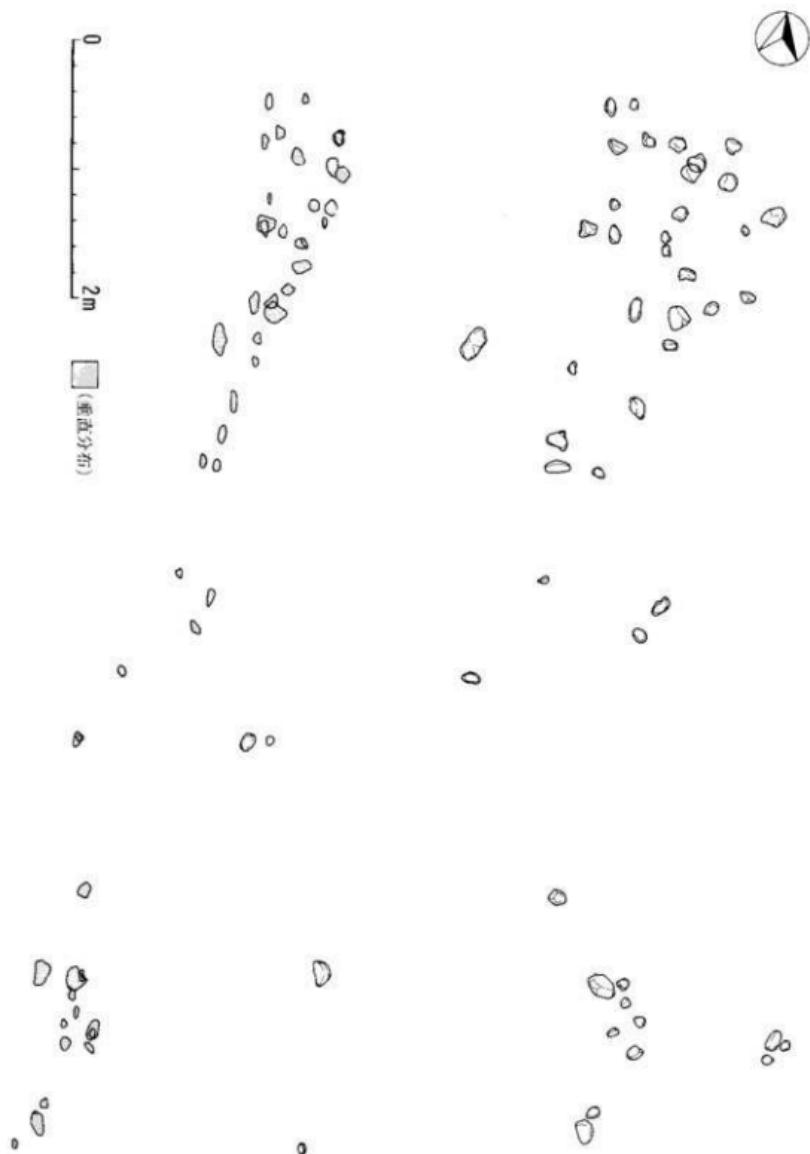
暗褐色である。口縁部から胴部上半にかけて炭化物の付着が著しく、また、胴部下半から底辺部にかけて、二次的火熱を受けたためか器面が赤褐色に変色しもろくなっている。底部は残存しない。第VII群土器で、縄文時代後期のものである。

4. 集石遺構（第20図、図版4）

（位置と確認） 北西に伸びる台地の南向き斜面、I・J-20グリッドに位置し、第III層上面で礫の分布を確認した。

（規模と形態） 3.0m×1.5mのほぼ長楕円形の範囲に礫は散在している。このグリッド以外に礫の分布は認められない。礫はすべて自然礫で、機能面・使用痕を有するものは認められなかった。集石は意図的な配置を示さず、また、集石の下からも土壤等の施設は検出されなかつた。伴出遺物がないため時期不明である。

なお、この集石について、山口調査員は本遺跡周辺には自然礫が少ないため、これは、人為的に運ばれたものと考えている。 （岡田）



第20図 集石遺構

第2節 遺構外出土遺物

第1次調査では、縄文時代早・後・晩期の遺物が出土し、第2次調査では第I～IIIから縄文時代早・中・後期の遺物や弥生土器が出土した。ここでは、2か年度分を一括して記載する。

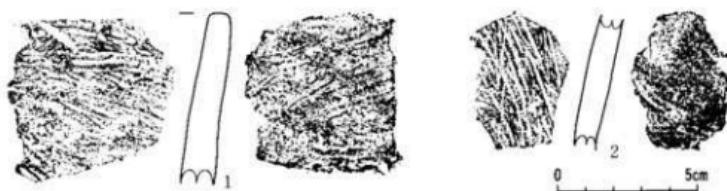
1. 土 器

縄文時代早・中・後・晩期、弥生時代の各期の土器が出土したが、帰属する時期等によって9群に分類される。

〈第I群土器〉(第21図、図版6-1・2)

縄文時代早期中葉の吹切沢式土器に比定される貝殻押引き文・貝殻条痕文の土器が、K-22、K-34グリッドからそれぞれ1片ずつ出土した。出土層位は第III層下部である。胎土には纏維を含まず、緻密でかたく、焼成は良好である。色調は赤褐色である。器厚は1.0cm～1.2cmで厚い。尖底の深鉢と推定される。(第21図-1、図版6-1)は口縁部破片で、口唇部は丸みを帯び、器表の口唇部直下には貝殻押引き文、その下には横位・斜位の貝殻条痕文が施文されている。裏面には横位の貝殻条痕文が施文されている。(第21図-2、図版6-2)は胴部下半の破片で、器表には縦位・斜位の貝殻条痕文、裏面には斜位の貝殻条痕文が施文されている。

(岡田)



第21図 第I群土器拓影図

〈II群土器〉(第22図、図版6-3)

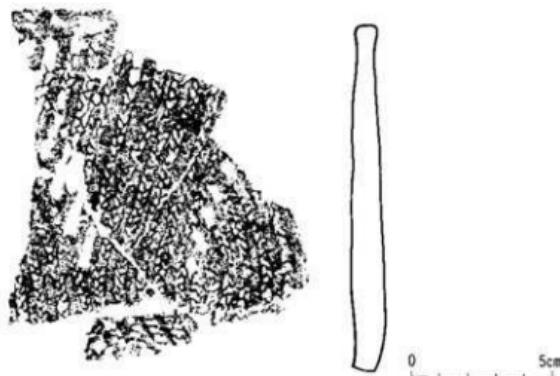
2A-46、2A-47グリッドの第II層と第III層に散在していた6片の破片のみである。これらはすべて接合した。

口縁部の破片であり、口縁から12.5cm下方までしか残存していない。ほぼ直立する口縁部で、下端付近は内湾し、全体の器形は丸底ないしは平底の深鉢形と思われる。口唇部はわずかに外

側に膨らんでいる。また、上面は平坦ぎみに整形され、かつ、外側にやや傾斜している。器壁は、口唇部の膨らんだ部分が9mm、その直下が最も薄く約7mmで、ここから下方にいくにつれて厚くなり、下端から3分の1のところで最大厚の13.5mmとなる。その下は急に内面が凹んで薄くなり、破片の下端で8mmとなる。

器表面は、胎土に含まれた砂粒によるザラつく感じがあり、緩い凹凸もある。裏面は、比較的滑らかであるが、やはり砂粒によるザラつきがあり、指で押圧したような凹みが多数ある。胎土は粗く、1mm前後の砂粒が多量に混入し、5mm以下の礫も混じっている。また、纖維もいくぶん混入していた痕跡がみられる。焼成は比較的よく堅緻である。表面の色調はあおむね灰色であるが、口縁部と口唇上面は黒色である。裏面は灰褐色であるが、下方の肥厚する部分は幅3cmほどの帯状にぼい橙色となっている。断面は褐灰色である。

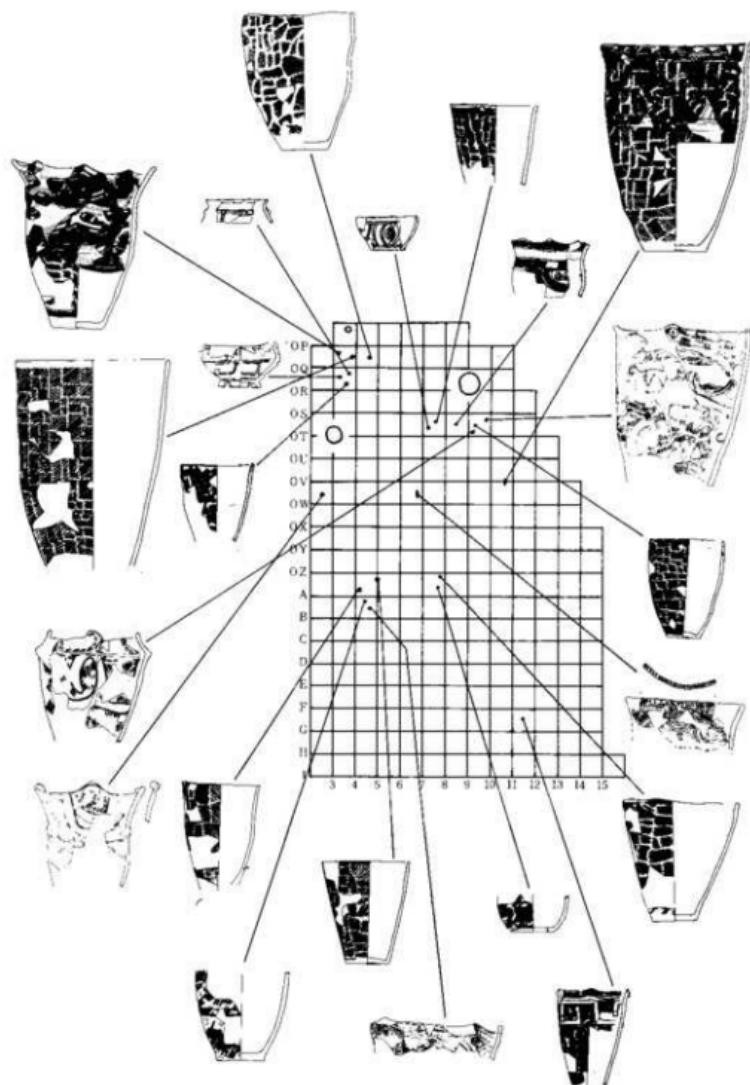
文様は、Lの縄3本による平組紐が10条ほど平行して施文されたものが単位となって構成されている。これは、各条の長さが異なることや湾曲していることからみると、各条ごとに押圧されたものと考えられる。各文様単位のうち中央のものは、口縁から急角度で左傾し、下端近くで右傾に方向を転じている。この単位の左側には別の単位があるが、これは、右下がり急傾斜し、下方で左下がりに転ずるものである。右側のもう1つの単位は、右下がりから左下がりの弧を描いて施文されている。これらの単位の各条の末端には、組紐とは異なるRの縄の一部分のものと思われる圧痕がみられる。このような圧痕は、口唇上面にも等間隔で施文されている。



第22図 第II群土器拓影図

なお、この土器片の表面の縁や断面の表面側は、黒色に変色しており。破碎後、加熱を受けたものと思われる。

(坂本)



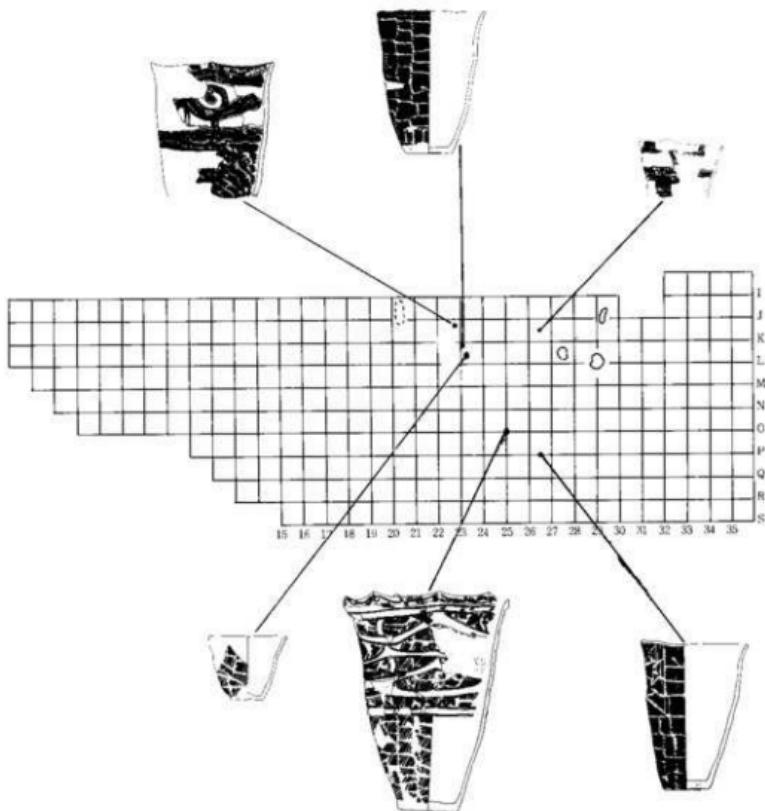
第23図 第III～第VI群土器出土グリッド図一(1)

〈第III群土器〉

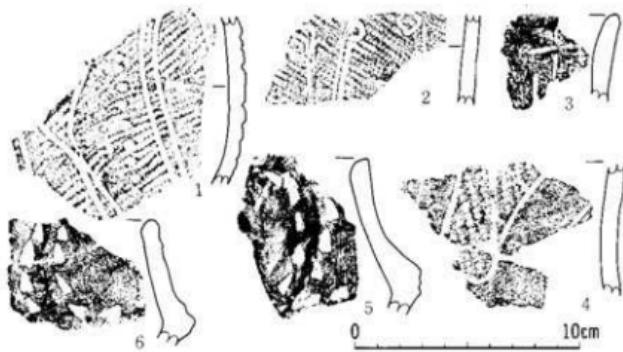
縄文時代中期後葉に編年される最花式及び大木10式土器に類似する土器を一括した。

A 類 (第25図- 1・2)

OS-10グリッドⅢ層及びOC-91グリッドⅡ層から破片が出土した。最花式に類似する土器である。



第24図 第III～第VII群土器出土グリッド(2)



第25図 第III群土器拓影図

(胎土・焼成・色調) 胎土は、ほぼ均一であるが、石英粒等も含まれている。焼成は良好で、ややかためである。色調は純い黄橙色、暗褐色である。

(器形・器厚) 器形は、胴部がやや膨らむ深鉢形土器と思われる。胴部破片のため口縁部形態は不明であるが器厚は薄く5~6mmである。

(裏面調整) 横位調整で平滑に行っているが、調整後、荒く縦位調整を行っているものもある。

(炭化物) 表面上に多少付着している。

(文様) 縄文原体L Rの単節及びR Lの単節を横位に回転させ、斜行縄文を施文した後、逆「U」字状や先端が渦巻き状になる沈線文を施文している。第25図1のように縦位に竹管状の刺突を施している例もある。

B 類

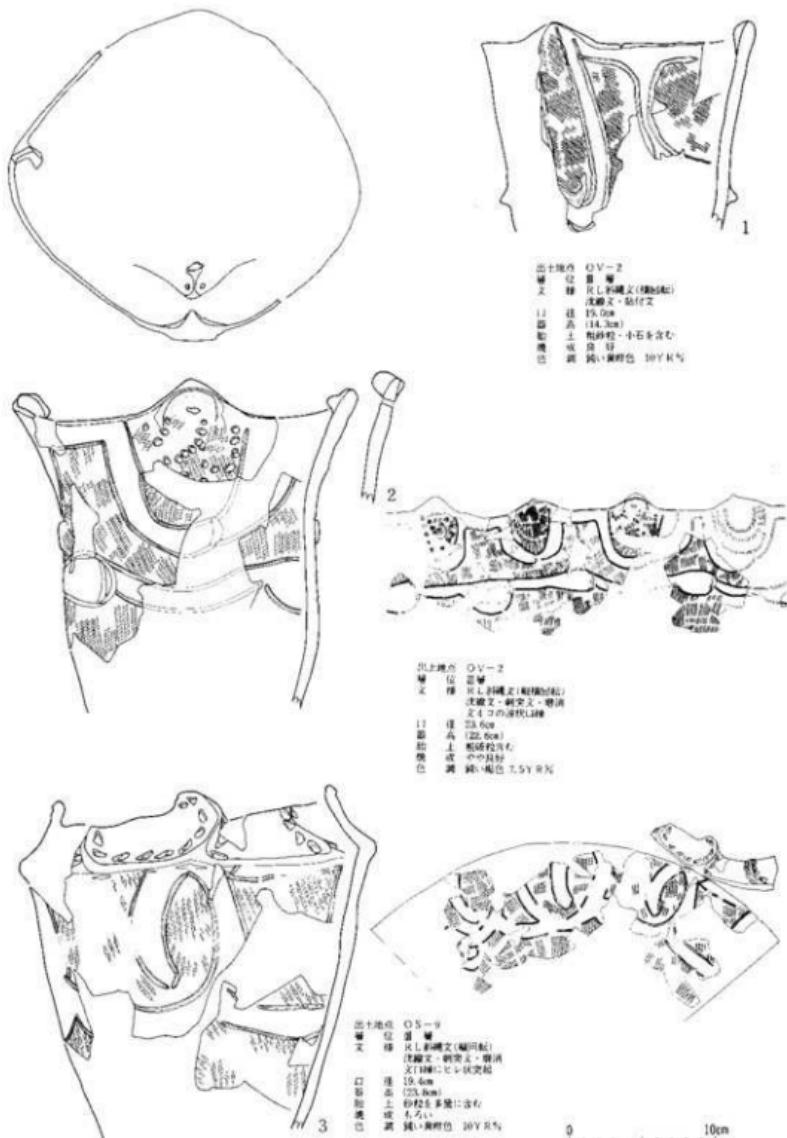
底部が欠損しているが、口縁部から胴上部あるいは胴下半部まで接合したもので、器形・文様等の相違から2種に分けた。いずれも大木10式に類似する土器である。

B類-1(第25図3・4、第26図1・2、図版6-6、図版8-1・3)

OV-2グリッドIII層及びOS-9グリッドIII層から、ある程度まとまって出土した。

(胎土・焼成・色調) 胎土はほぼ均一であるが、石英その他粗砂粒も多少含まれている。焼成は、良好なもの(第26図1)とあまり良好でなくもろいもの(第26図2)がある。色調は、純い黄橙色、褐色である。

(器形・器厚) 口縁部は外反し、波状で、胴部はやや膨らんだ鉢形である。器厚は6~7mmでやや薄めである。



第26図 第Ⅲ群土器実測図

(裏面調整) 横位及び斜位調整であるが、やや荒めで多少凹凸がある。

(炭化物) 外面・内面ともに認められない。

(文様) 繩文原体 R L を用いた横回転（部分的に縦回転もあり）で、斜行繩文に「J」字状あるいは横位（帯状）に磨消しを施し、その後に沈線で繩文部分と区画している。

第26図2のように波状の山形部分に限り竹管状工具により刺突を行っているもの、あるいは、第26図1のように粘土紐を貼付けたものもある。また、第26図2のように磨消しの末端部に粘土瘤を貼付けて、鱗状突起を配しているものもある。

なお、口縁部内側には短い粘土紐を斜位及び半月状に貼付けている。

特殊文様としては、第26図2の口唇及び口縁部に施文された人面状の突起がある。内側に向いており、目の部分は竹管状工具により深く（約7mm）刺突し、鼻の部分は高く、口の部分は竹管状工具で内面から外面へ向けて数度刺突することにより貫通孔をうがっている。この部分だけみると人面と思われるが、山形部分全体から観察すると、飛翔しているムササビのようにも見える。

B類-2（第25図5・6、第26図3、図版6-7・8、図版8-2）

OS-9グリッド第III層からまとめて出土し、4~5片を除いて接合した。

大木10式土器に類似するものである。

(胎土・焼成・色調) 胎土は、細砂粒を多量に含み、焼成は良好である。色調は、鈍い黄橙色で、やや赤みがある。

(器形・器厚) 口縁部が極度に内傾し、胴部との境界部分が最大径となる鉢形である。口縁は大きな鱗状突起により小波状を示している。器厚は7~9mmでやや厚い。

(口唇部形状) △形で、両面をヘラ状工具によりなで調整されている。

(裏面調整) 器壁がもろいため明確ではないが、横位調整の痕跡が残っており、平滑になされていることは観察できる。

(炭化物) 内面全体に炭化物が付着し、外面は胴上部に付着している。

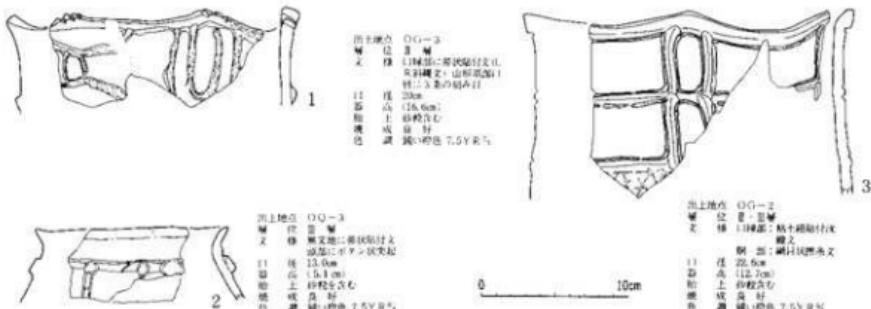
(文様) 口縁部には、粘土紐を貼付け、調整後、先端のとがった棒状工具を押しつけるようにして施文した刺突文が巡っている。

胴部は、繩文原体 R L を縦回転して施文した斜繩文を大波状に軽く磨消し、細い沈線で画している。

（成田）

（第IV群土器）

繩文時代後期初頭の粘土紐及び粘土瘤貼付を主とする土器を一括した。文様構成等により A



第27図 第IV群土器実測図

類・B類に類別した。

A 類 (第27図 1・2、第28図 1~4、図版 6~9~12)

細い粘土紐を口縁部及び胴部に横位あるいは縦位に貼付けた口縁部文様帯を構成する類である。OG-5グリッドⅢ層、OS-7グリッドⅡ層から破片で出土した。OG-3グリッドⅡ層から出土した破片は、口縁が数片接合した。OG-3グリッドⅢ層から出土したものは、胴下半が欠損している。

(胎土・焼成・色調) 胎土は、砂粒を多量に含み、表裏面にまで砂粒が露出している。焼成は、良好でもいい。色調は、概ね鈍い橙色である。

(器形・器厚) 口縁部形態は、波状で外反し胴部がやや膨るものが多い。第28図2のように口唇部分がやや内湾ぎみになるものもある。器厚は、6~7mmである。

(口唇部形状) 口唇は、範状工具で整形され、△形である。第27図1のように山形頂部の口唇に細い棒状工具により斜位に3条の刻みを入れている例もある。

(裏面調整) 第28図3は、横位及び縦位で、第27図2は横位に平滑に行っている。そのほかは、剥落のために明確でない。

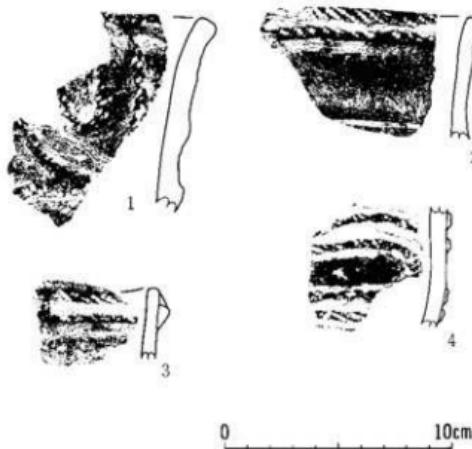
(炭化物) 第27図2は、炭化物付着していないがほかはすべて表面に付着している。

(文様) 幅の狭い帯状貼付文である。その上面には、繩文を回転して施文している。第27図2は、頸部にボタン状突起が貼付され、隆帶上面に文様は施文されてない。

B 類 (第27図3、図版 8~4)

粘土紐及び沈線により、長方形区画を基調とする口縁部文様帯を形成するものである。OG-2グリッド及びOH-0グリッドにかけてⅡ層から数片出土し、口縁から胴上部まで接合した。

(胎土・焼成・色調) 胎土に砂粒を含み、焼成は良好で硬い。色調は、鈍い橙色で部分的に



第28図 第IV群土器拓影図

黒斑がみられる。

(器形・器厚) 器形は、波状口縁の深鉢形である。口縁部は外反し胴部がやや膨む形状である。器厚は、6mmぐらいで薄い。

(口唇部形状) 口唇は、範状工具で整形され、「」形である。

(炭化物) 表面に炭化物が多量に付着している。

(文様) 粘土紐を横位及び縦位に貼付け、長方形区画を形成している。粘土紐貼付けた後にその下端に沈線を施している。この長方形区画は、波状の山形部分が縦長であり、ほかの部分は横長である。区画内は、軽く範状工具により調整されている。沈線区画内の調整は無文地になされたもので磨消でない。

胴部は、網目状撚糸文である。

〈第V群土器〉

斜行縄文に沈線文を主として施文する土器を一括した。文様構成等によりA類～D類の4類に類別した。

A 類

斜行縄文地に沈線文・磨消文・粘土紐貼付文等が施されたものをまとめた。文様構成等によ

り2種に分けられる。

A類-1(第29図1、図版6-13、図版7-1)

OS-9グリッドの第III層から出土し、口縁から胴下部まで接合した土器である。

(胎土・焼成・色調) 胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好で硬い。色調は、灰黄褐色で所々に黒斑がみられる。

(器形・器厚) 口縁部が内湾ぎみの深鉢形である。器厚は10~12mmで分厚い。

(口唇部形状) ハ形で平坦に整形している。口唇には4個の山形状突起があり、これらの形態が中期末の土器(八戸市菲窪遺跡出土)のものに類似している。向合せの山形が同じ形で、対になっている。一对は山形の中央に刻みが入り、ハ形で、もう一对は、弓形で口唇の中央に横位の溝が入っている。

(裏面調整) 口縁部は横位に、そのほかの部分は縦位に平滑に行っている。

(炭化物) 炭化物の付着はみられない。

(文様) 繩文原体LRを用いて横位に回転し、斜行繩文を施文した後口唇の山形状突起下にボタン状突起を貼付け、器表面全面に沈線文と磨消文を施文している。ボタン状突起は、縦列に2個づつ配され、いずれも中央に刺突が加えられている。口縁に沿って沈線文が一条施文され、胴部には、沈線で囲んだ部分を軽く磨消した渦巻文が縦横に施文されている。

A類-2(第29図2、図版8-5、図版9-1)

F-11グリッドからまとめて出土し、底部を除いてほとんど接合した土器である。

(胎土・焼成・色調) 胎土は多少の粗砂粒を含むものの均一で、焼成は良好である。色調は表裏とも明褐色である。

(器形・器厚) 小波状口縁で、口縁が外反し胴部の張りがあまりない小型深鉢形である。器厚は5~6mmである。

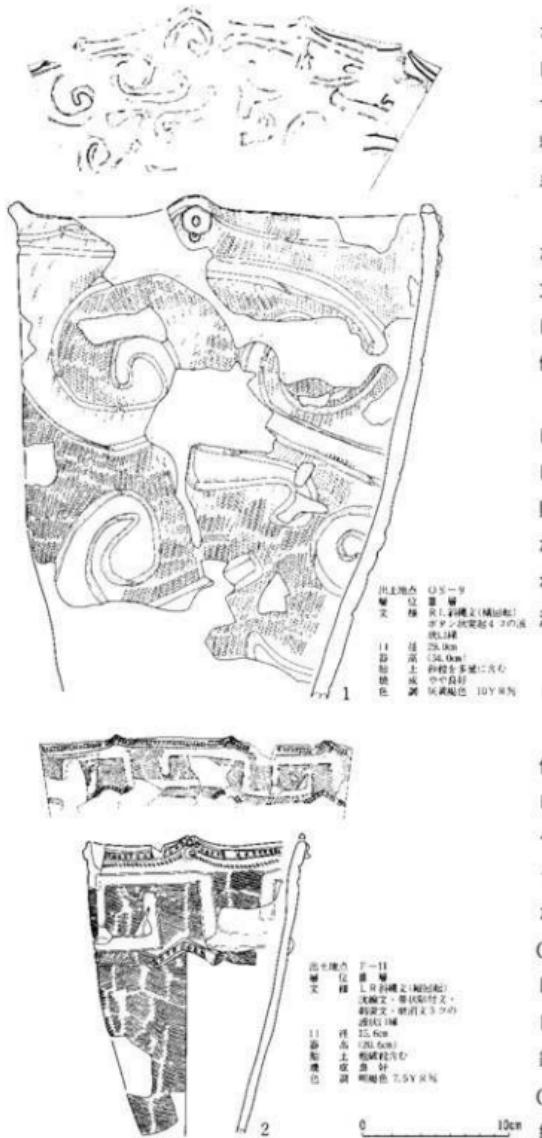
(口唇部形状) ハ形で丸みがある形状を示している。口唇には3個の山形状突起があり、頂部に表面から裏面に穿孔されている。

(裏面調整) 口縁部は、横位に調整され胴部は縦位に平滑に調整されている。

(炭化物) 表面に多量に付着している。

(文様) 口縁部から胴上部にかけて文様帶を形成していて、文様の構成要素は、粘土紐貼付・粘土瘤貼付・撚糸圧痕・刺突・沈線・LR斜繩文の磨消である。

まず口縁に沿って粘土紐を貼り付け、その表面に太さ約2mmの工具により刺突を施し、口縁側の粘土紐貼付下端に沈線を施している。山形部分には、粘土をボタン状に貼付け、中央に太



第29図 第V群A類土器実測図

さ約4mmの刺突を施している。口縁からボタン状突起の下まで無文地で、この部分には、粘土紐貼付文と並行して、燃糸が押圧されている。

燃糸が押圧されている部分からは、縦位回転のL-R斜縄文が施文されているが、□状に沈線文様が描かれ、この内側の縄文を磨消している。

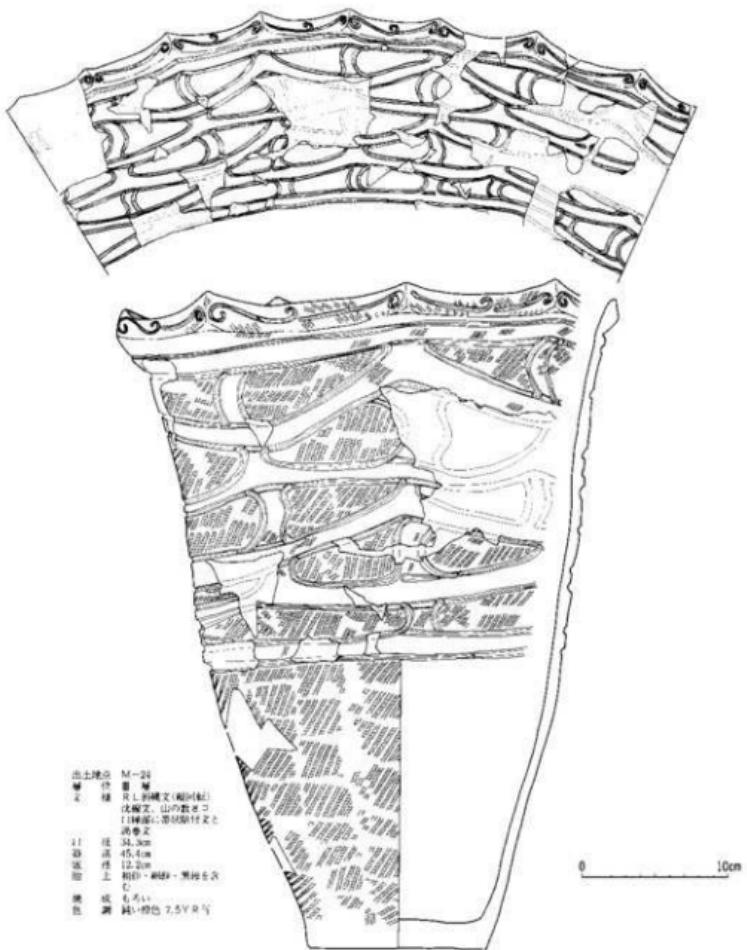
文様帶の下端には、△形に粘土紐が貼付けられ、表面に刺突が施されている。この貼付文は、口縁の山形部分、ボタン状突起の下部に施文され△形貼付文との間に弧状沈線文が施文されている。

B類 (30図、図版7-2)

渦巻状沈線文と平行沈線が併用されている土器である。M-24グリッド及びその周辺グリッドの第Ⅲ層からまとまって出土し、欠損部分はあるが、復原できた。

(胎土・焼成・色調) 胎土は、砂粒を多く含み、焼成は良好であるが、もろい。色調は鈍い橙色である。

(器形・器厚) 器形は、口縁部が若干内湾ぎみで、波伏口縁の大型深鉢土器である。



第30図 第V群B類土器実測図

器厚は薄めである。

(口唇部形状・文様) 八形であり、上面をヘラ状工具で平滑に整形している。口唇部は、波状(8個)を呈している。

(裏面調整) 下部は縦位で、上部は横位調整で平滑に行っている。

(炭化物) 表面に付着している。

(文様) 繩文原体 R L を
縦に回転させ斜行縩文を施
文した後、横位に展開する
沈線文様が施文されたもの
で、口縁部及び胴部に文様
帯がある。

口縁に粘土紐貼付後、平滑に整形し、横位渦巻文を施文し、胴部は、沈線で区画した部分に磨消文を施す文様構成である。

C類

平行沈線により区画された部分に渦巻状沈線を配する類で、文様構成等から2種に分けた。この類が、第V群中最も多いものである。

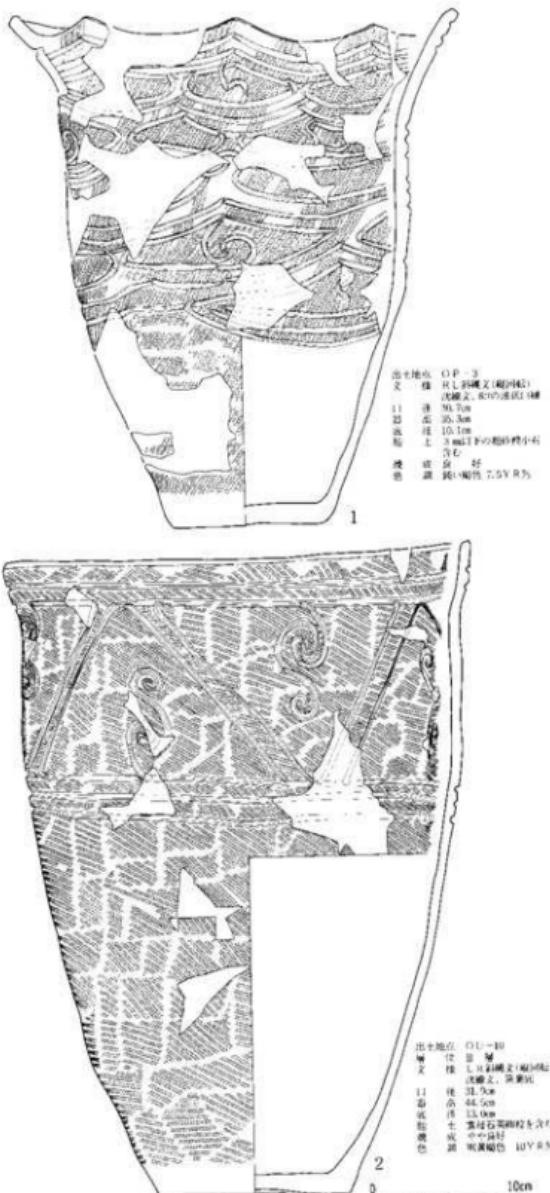
C類-1(第31図1)

圖版 7-3)

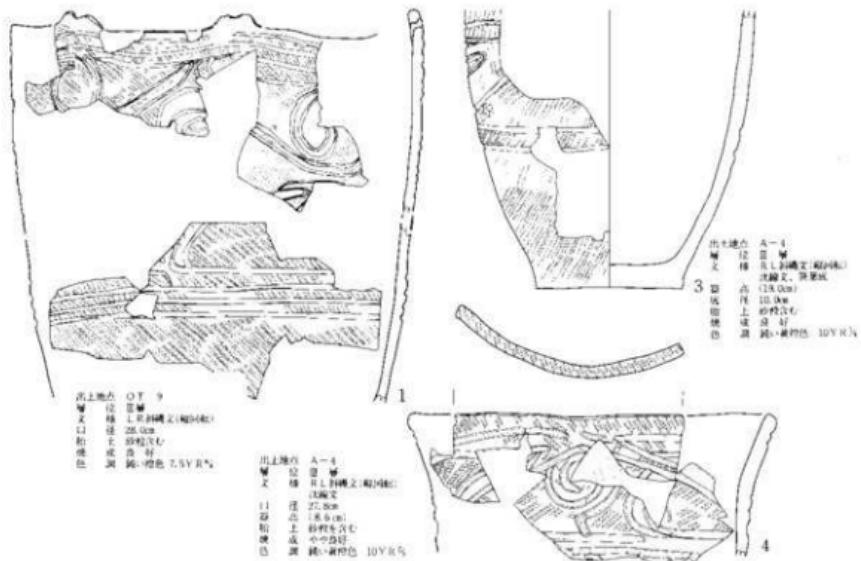
波状口縁で、胴中央部まで沈線文が施されているものである。

(胎土・焼成・色調) 胎土は、細砂粒を多く含み、焼成は不良である。色調は表面、裏面とも鈍い褐色である。

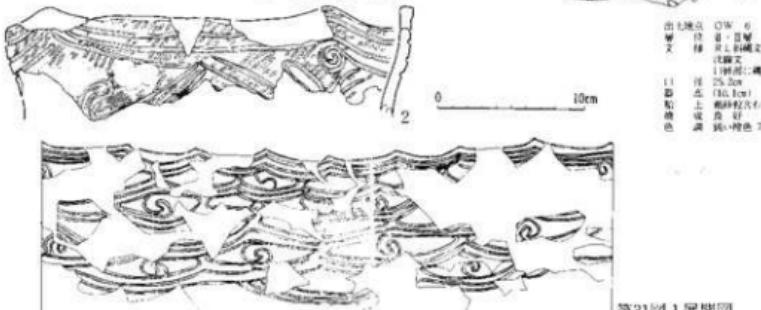
(器形・器厚) 器形は、
波状口縁(8個)で、口縁部
が外反する深鉢形土器であ



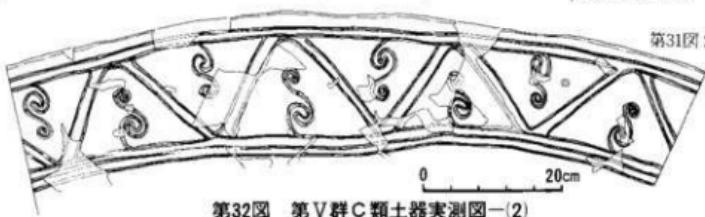
第31図 第V群C類土器実測図一(1)



第31図 1 展開図



第31図 2 展開図

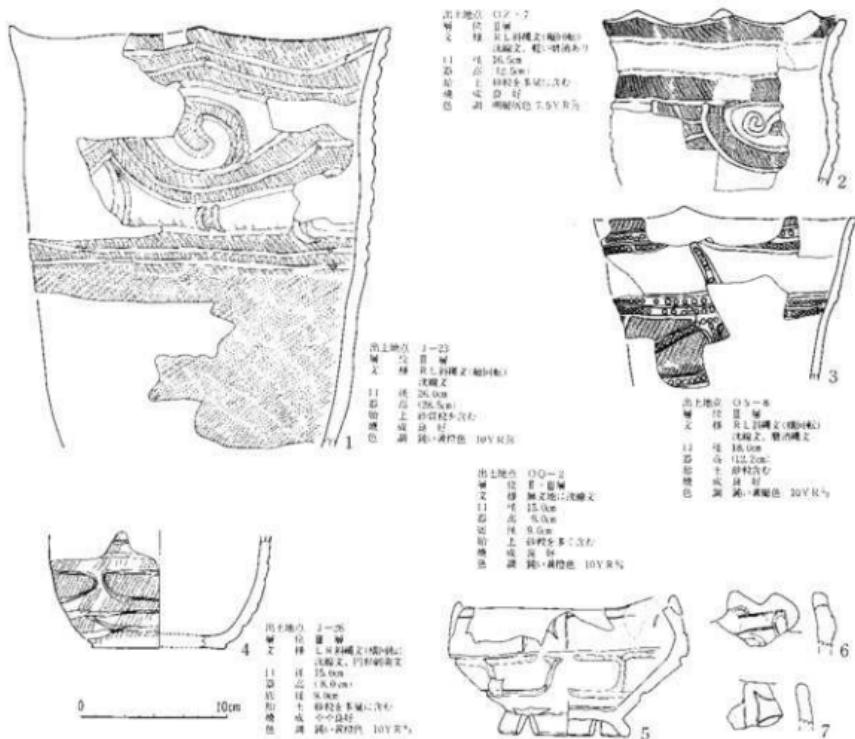


第32図 第V群C類土器実測図-(2)

る。胴中央部がやや膨み、器厚は全体的に薄い。

(口唇部形状) ハ形で先細りする形である。

(裏面調整) 横位調整で平滑に行っている。



第33図 第V群D類・E類土器実測図

(炭化物) 表面にみられる。

(文様) 織文原体 R L を縦に回転させ斜行織文を施文した後、横位に展開する平行沈線を弧状に施文し弧の中間部に渦巻状沈線文を配している。

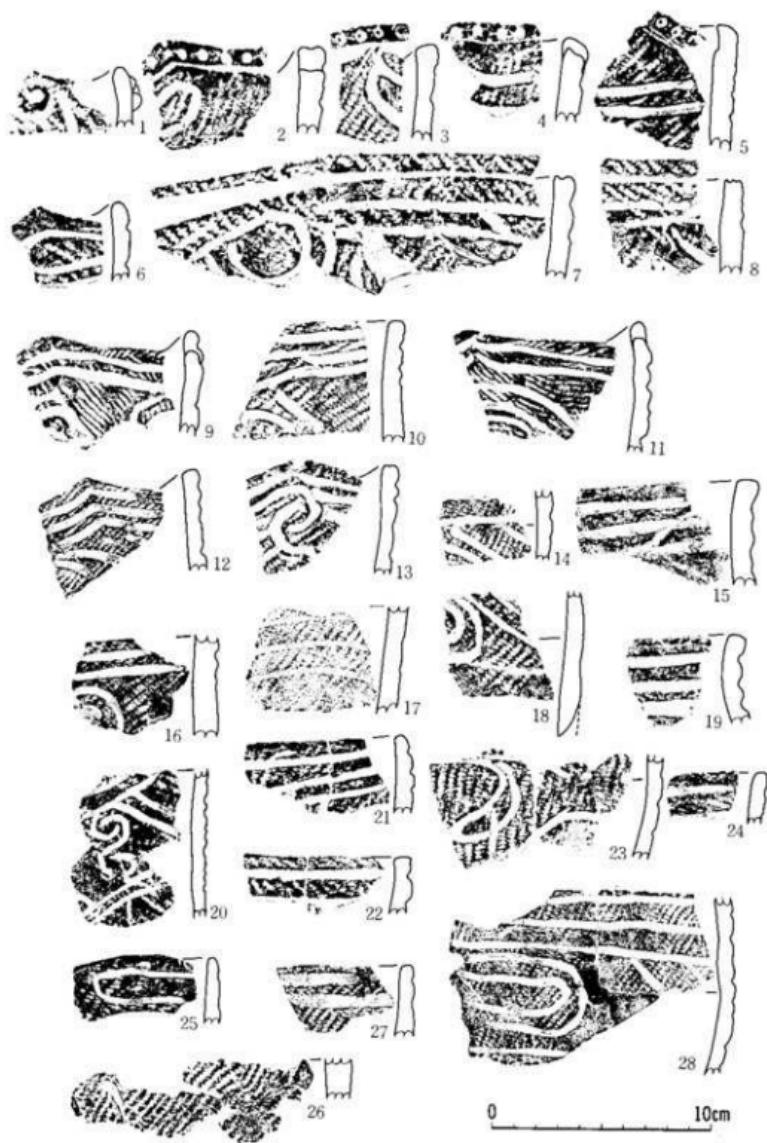
C類-2 (第31図2、第32図、第34図、第35図、図版7-5、図版9-2・3・4・5、図版10-1-22)

平行沈線により区画された中に、渦巻文が施文され、沈線文様は、胴上部にまで及ぶもの。

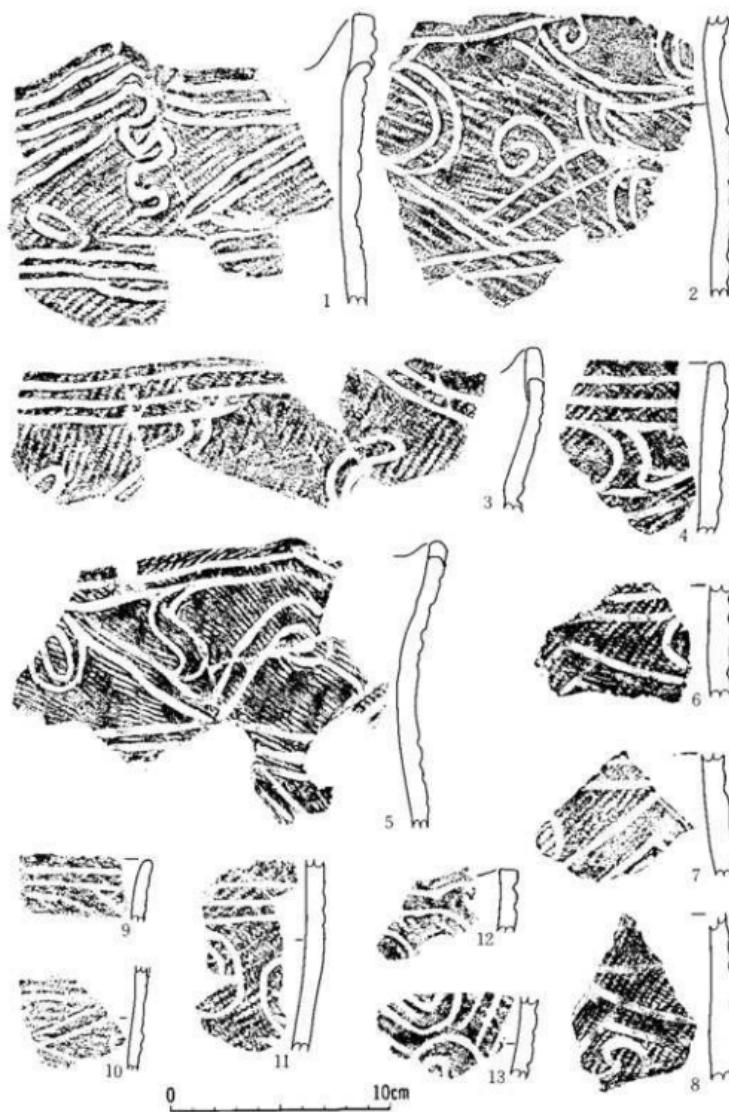
(胎土・焼成・色調) 胎土は、細砂粒が多く含み、焼成は全般に良好である。色調は、表裏面とも純い橙色、純い黄橙色である。

(器形・器厚) 器形は、平口縁・小波状口縁で、口縁がやや内湾ぎみの大型深鉢形土器が主体を占め、器厚は薄いものと厚いものがある。

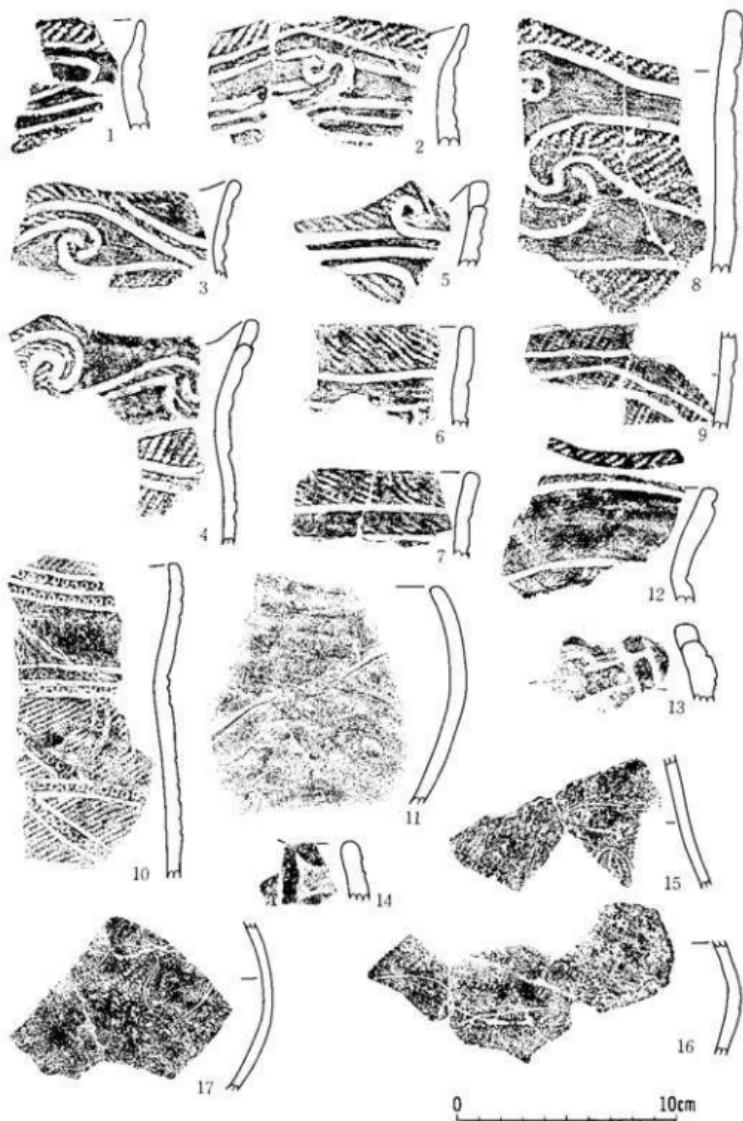
(口唇部形状・文様) △形と△形で、平べったい形が多い。口唇部の上面には、竹管状刺突



第34図 第V群土器拓影図(1)



第35図 第V群土器拓影図(2)



第36図 第V群土器拓影図一(3)

文や斜行縄文を施文するものもある。

(裏面調整) 横位調整が多く、平滑に行っている。

(炭化物) 外面に付着しているものが多い。

(文様) 平行沈線文・渦巻文が主で、斜行縄文は、R L 縱回転が多い。

D 類 (第33図1~4、第36図1~10、図版9- 6・8・9、図版10- 23~29)

沈線文で画された部分の縄文を帯状に残し、周辺を磨消するもので、この手法が口縁部に限られ、胴部は縄文と沈線文が施文される類である。

(胎土・焼成・色調) 胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、表面、裏面とも純い橙色・純い黄橙色・浅黄橙色である。

(器形) 口縁部は外反するものと若干内湾ぎみのものがあり、平口縁及び小波状口縁をもつ深鉢形土器と、第33図4のように浅鉢形と思われるものがある。

(口唇部形状) □形が多く、△形の先細りする形は少ない。

(裏面調整) 横位調整で平滑に行っている。

(炭化物) 全般に表面に薄く付着している。

(文様) 渦巻状入組文を主体としている。文様帶は、胴中央部にまでおよび、磨消文は口縁部に配されている。縄文の原体は単節L Rが多く、R L原体を使用しているものは、第33図1・2・4及び第36図3・4・9などである。

E 類 (第33図5、第36図11~17、図版9- 7、図版12- 1・2・3・6)

直線状及び曲線状に沈線文様を施文している。

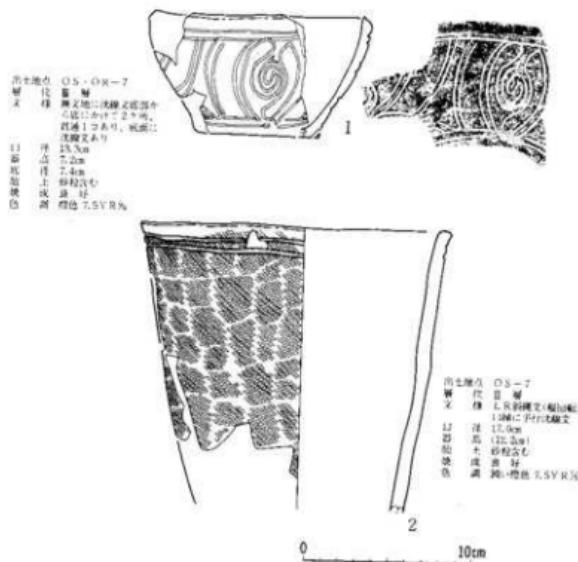
(胎土・焼成・色調) 胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好なものと不良なものがある。色調は、純い黄橙・浅黄橙・橙色である。

(器形・器厚) 器形は、口縁部が内湾し、小波状及び平口縁の鉢形・壺形土器で、器厚は薄い。

(口唇部形状・文様) □形で、口唇部の上面にL Rの縄文原体を回転させているものもある(第36図12)。

(炭化物) 表裏面ともに付着がみられない。

(文様) 文様構成は、平行沈線・「コ」状沈線・曲線状沈線である。第36図15~17の縄文原体は、R Lで縱位回転である。



第37図 第VI群土器実測図

(第VI群土器)

(第37図、第38図、図版9-12、図版12-4・5・7-20)

無文地に沈線文が施文された土器を一括した。十腰内I式土器である。

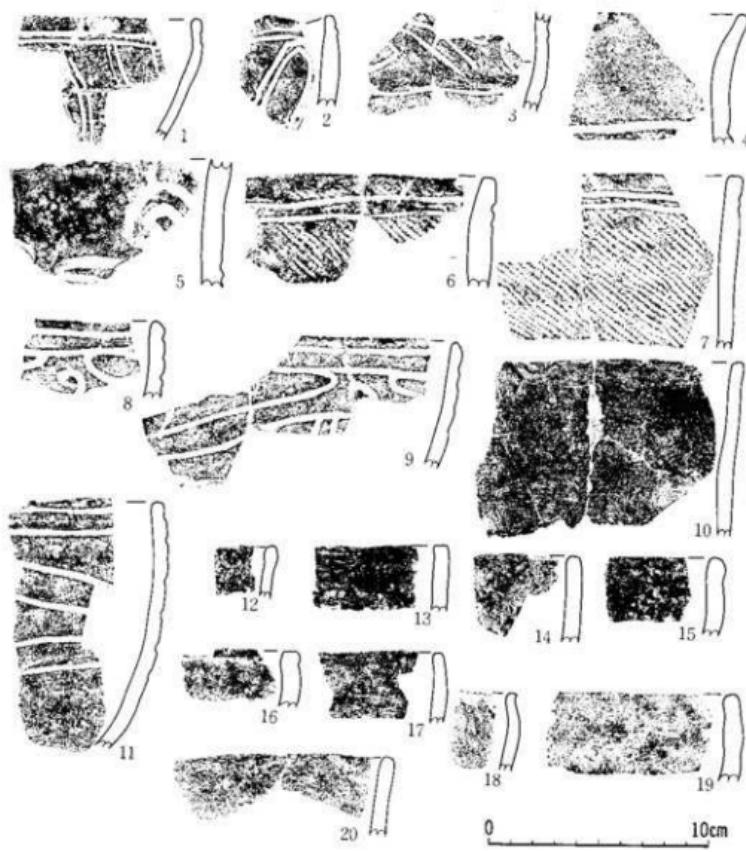
(胎土・焼成・色調) 胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は鈍い橙色、鈍い黄橙色、浅黄橙色、灰白色、灰黄褐色である。

(器形・器厚) 器形は、平口縁をもつ鉢形及び深鉢形土器で、平口縁のものが多い。壺形土器は、小形のものが主体である。深鉢形土器の口縁部は内湾するものが大半を占める。器厚は薄い。

(口唇部形状) 八形、八形で、特に、八形の土器が多い。

(裏面調整) 横位調整で平滑に行っている。

(文様) 口縁部を1~2cmの幅で無文にし、下部に、横行の沈線を巡らしている。沈線は、幅の広いものや狭いものがみられる。第38図10~20は、沈線文はないが、胎土・焼成が類似するため一括した。



第38図 第VI群土器拓影図

（第VII群土器）

斜行縄文施文土器を一括した。この群は、時期的には中期末から後期前半までを包括するものである。（第12表参照）

（第39図～第44図、図版11、図版12～21～36、図版13）

斜行縄文施文土器をまとめたが、数量的には文様施文土器の約3倍を占める。

（胎土・焼成・色調） 胎土は、細砂粒を多く含み、裏面は細砂粒が露出している。焼成は一般に不良である。色調は、表面が褐色、暗褐色で、暗褐色のものが多い。褐色のものに、一部黒斑がみられる。裏面は、褐色、暗褐色である。

（器形・器厚） 器形は、平口縁の深鉢形土器で、口縁部の形態は、緩やかに外反するもの、口唇部寄りが内反するもの、強く内反するものの3形態がみられる。器厚は薄い。

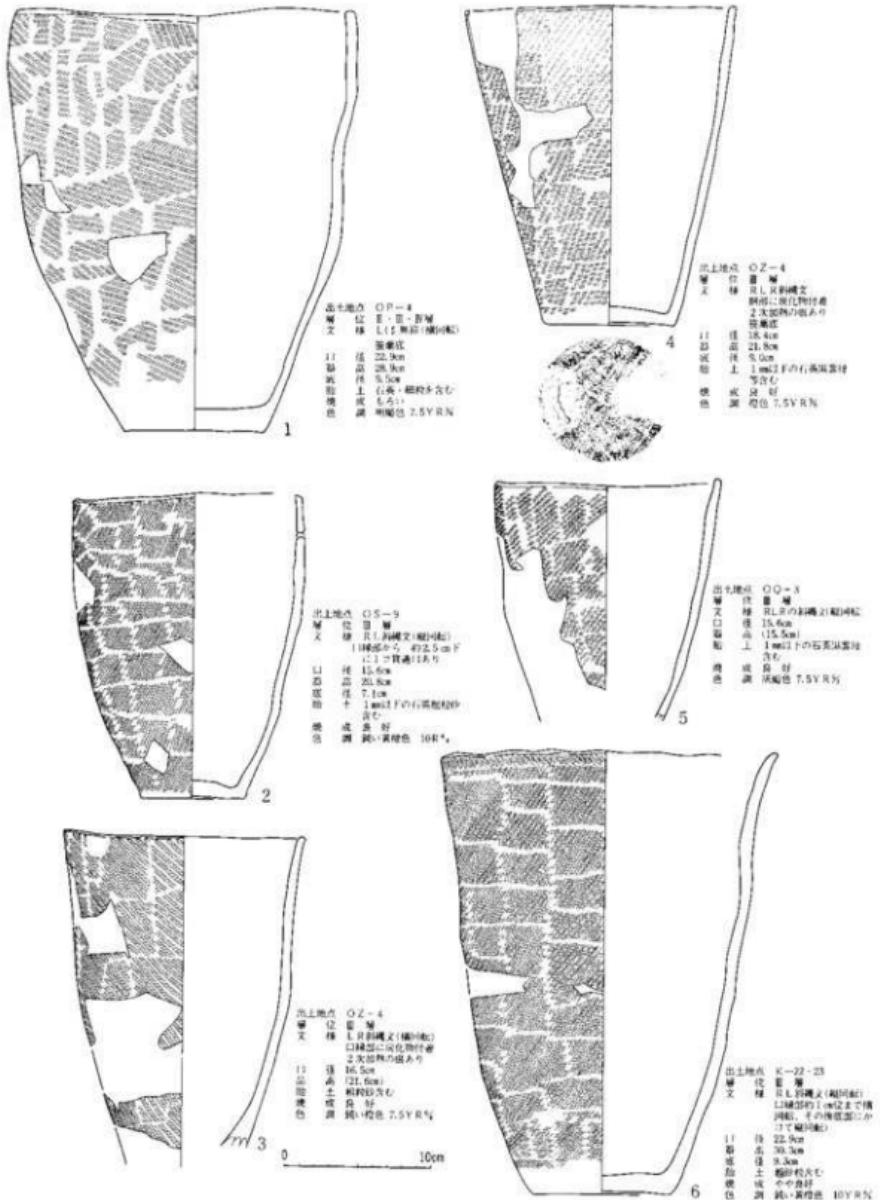
（口唇部形状） ハ形と匁形で、匁形が多い。また、口唇部の上面をヘラ状工具で平坦にしている。

（裏面調整） 横位調整が一般的に行われているが、縦位調整のものもみられる。裏面は平滑である。

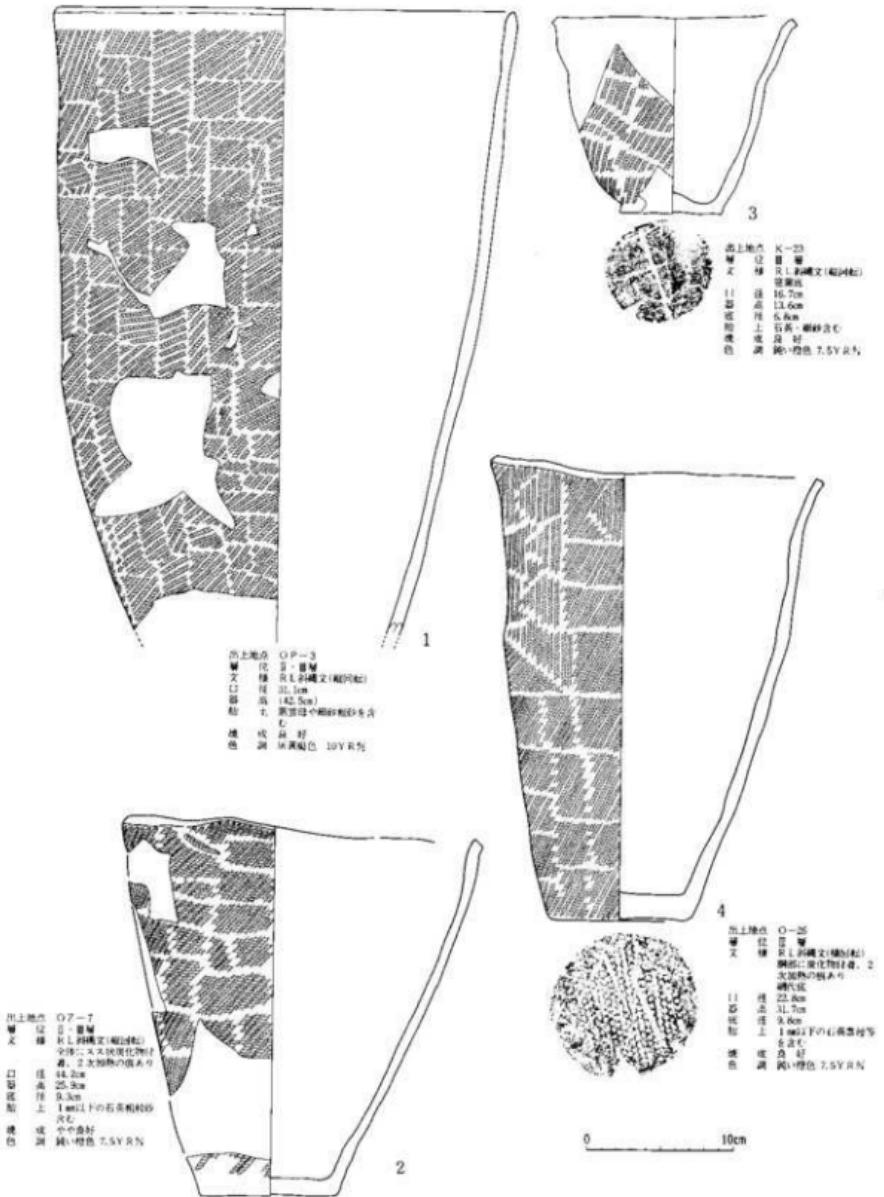
（炭化物） 表面に多くみられる。

（文様） 縄文の原体は、単節と無節を使用している。単節はRL、LRの原体を用いている。斜位方向が多く、やや横位のものや口唇部から縦位に施文しているものもみられる。無節はRを使用し、斜位に回転させているため条が横行している。十腰内1式期の縄文は単節を多く使用している。LR、RLのいずれを多く使用しているかは不明であるが、無節を使用しているものもわずかながらみられる。これらのものの条方向には横位が顕著にみられる。

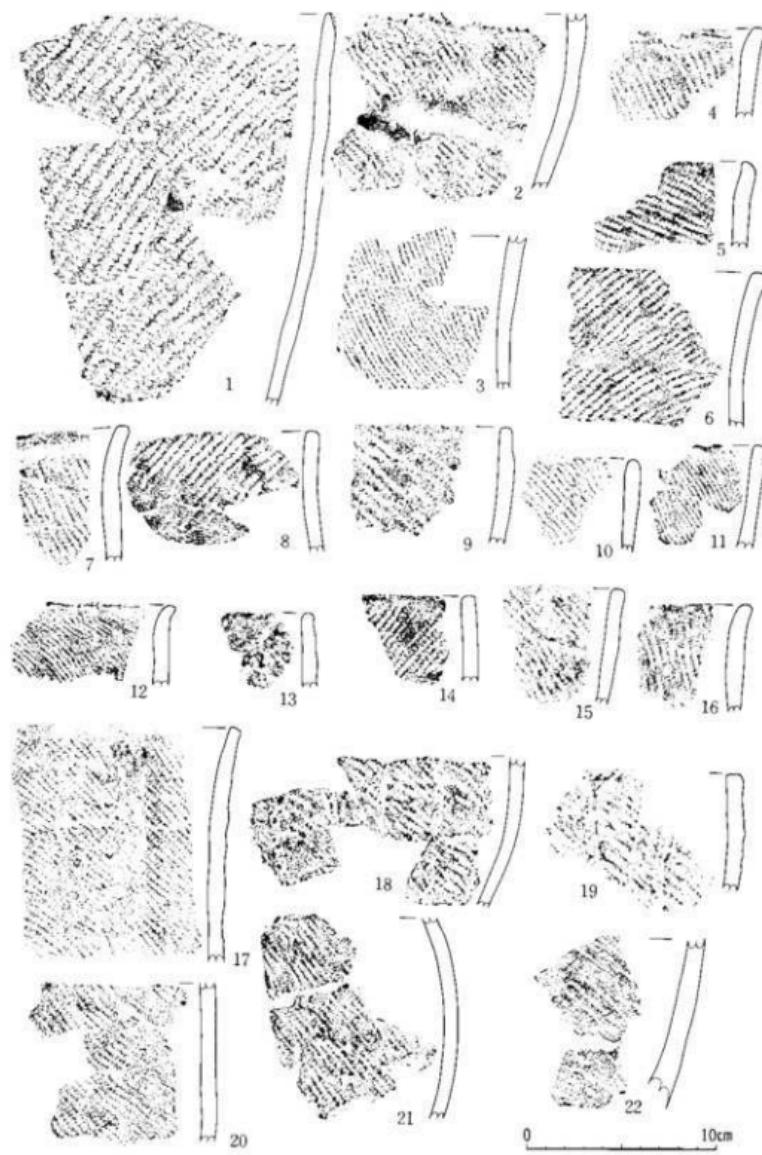
（成田）



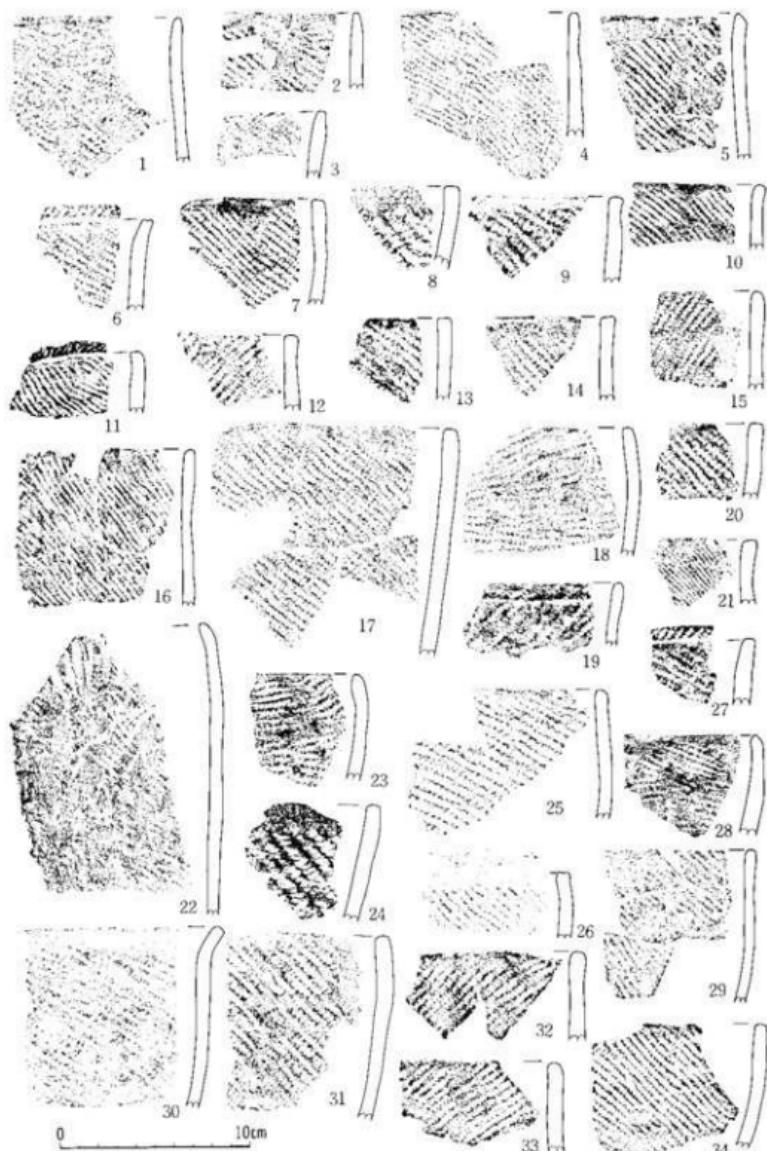
第39図 第VII群土器実測図(1)



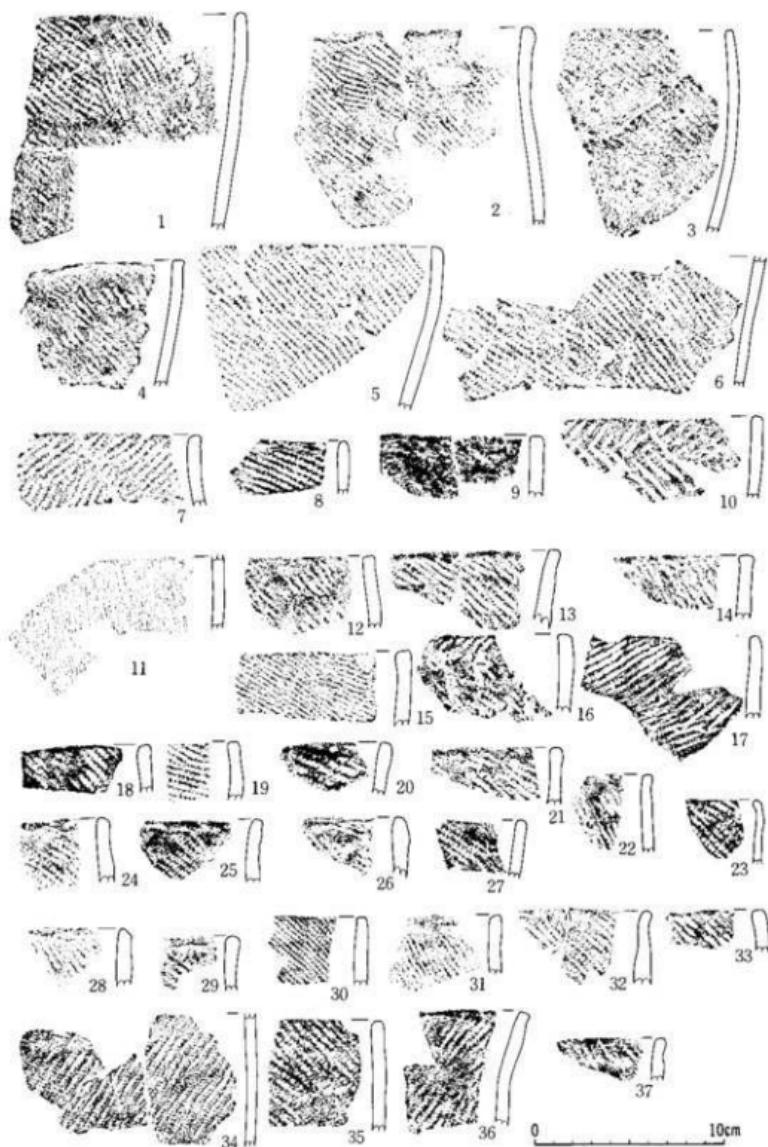
第40図 第VII群土器実測図(2)



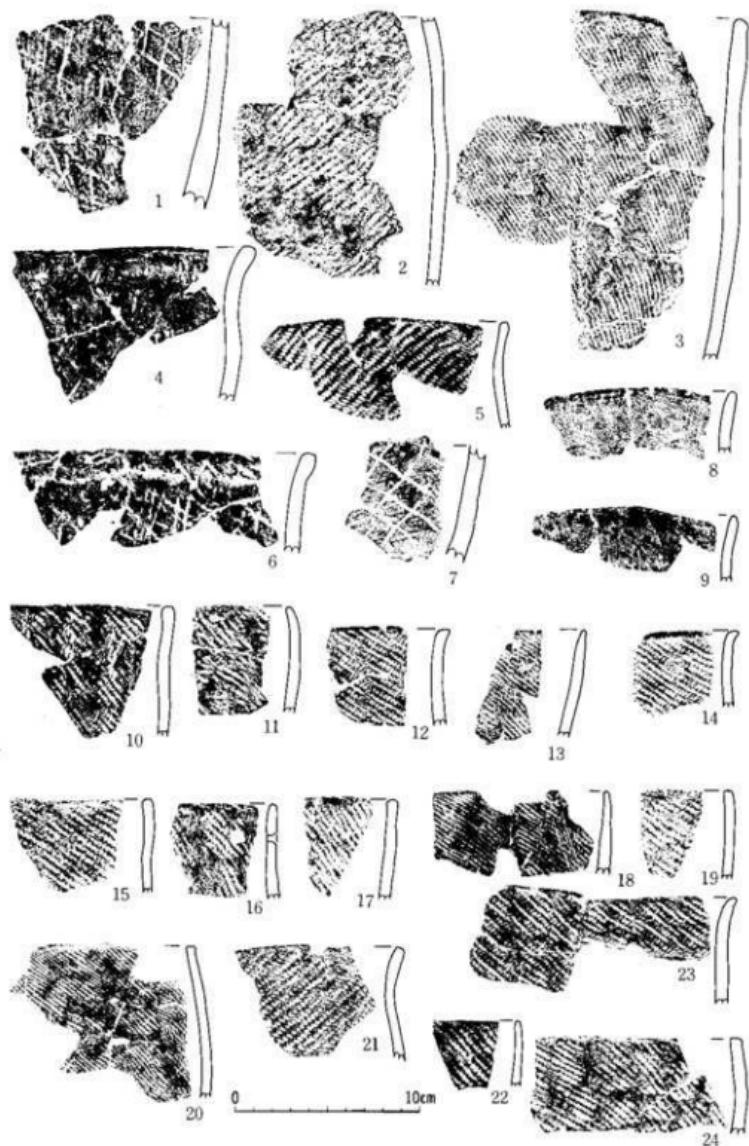
第41図 第VII群土器拓影図(1)



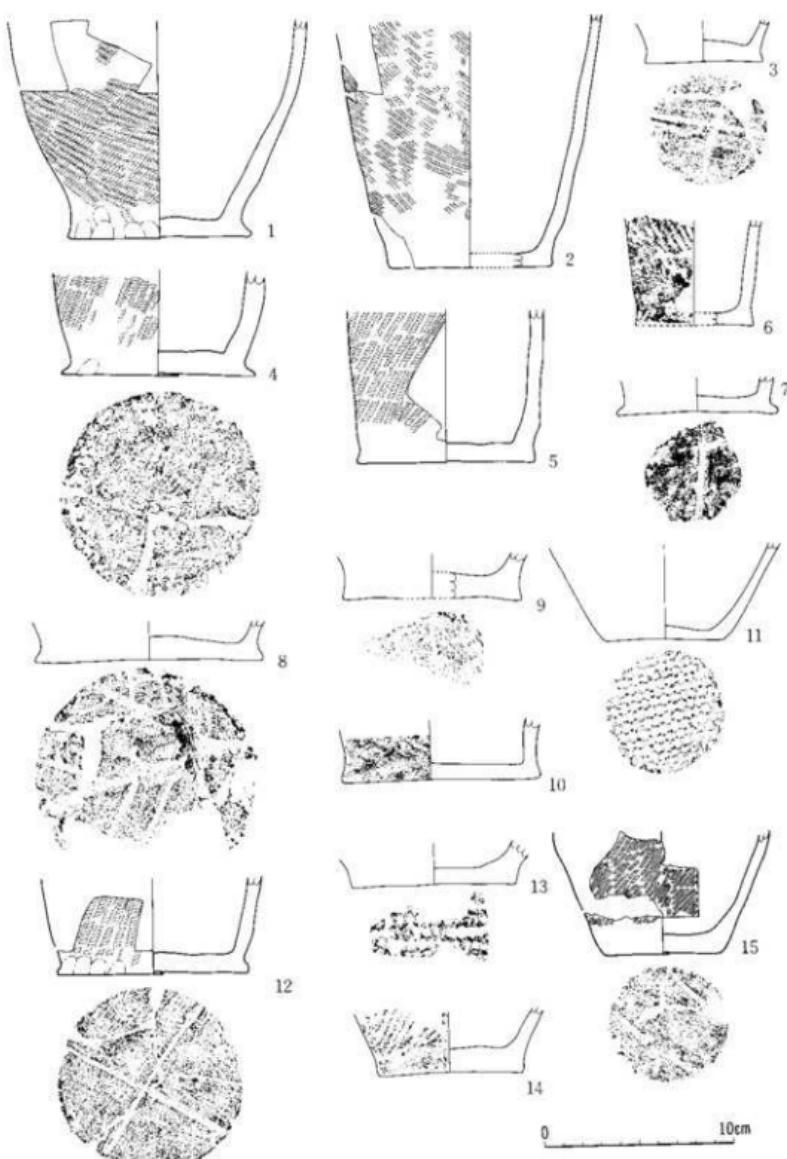
第42図 第VII群土器拓影図(2)



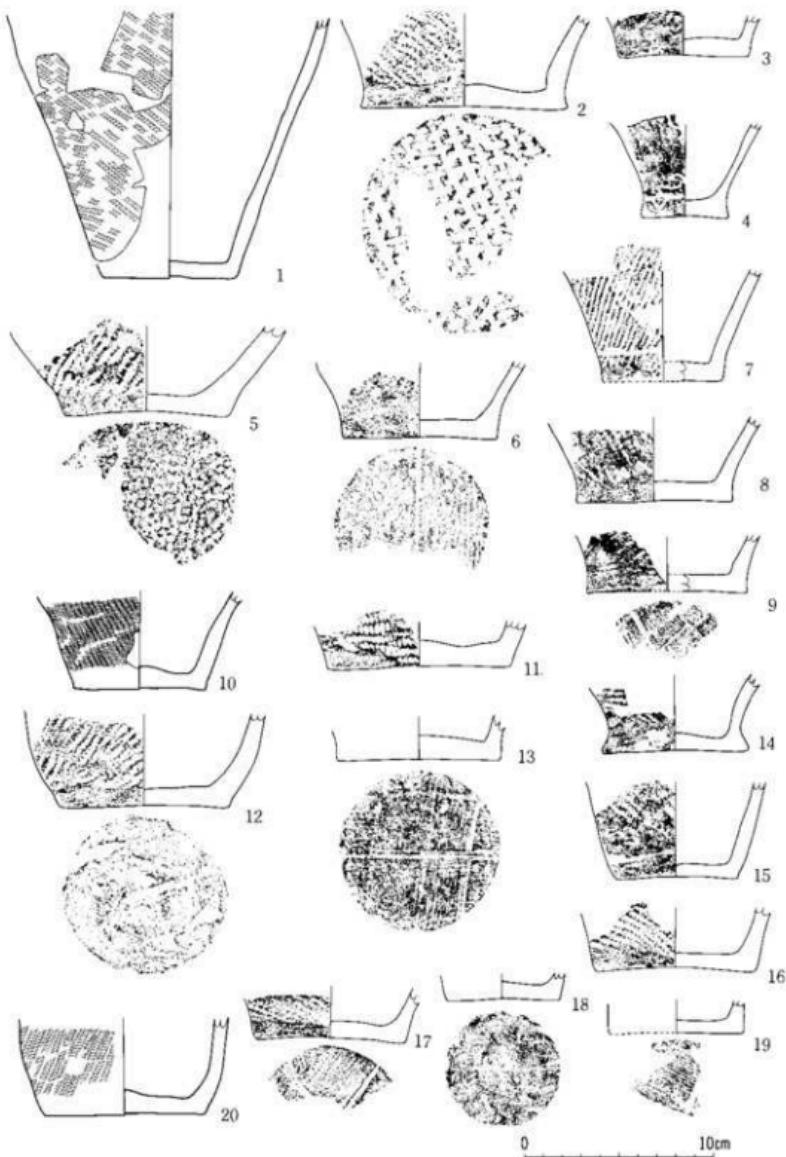
第43図 第VII群土器拓影図—(3)



第44図 第VI群土器拓影図(4)



第45図 第III～第VI群土器底部拓影実測図一(1)



第Ⅲ～第Ⅶ群土器底部拓順実測図(2)

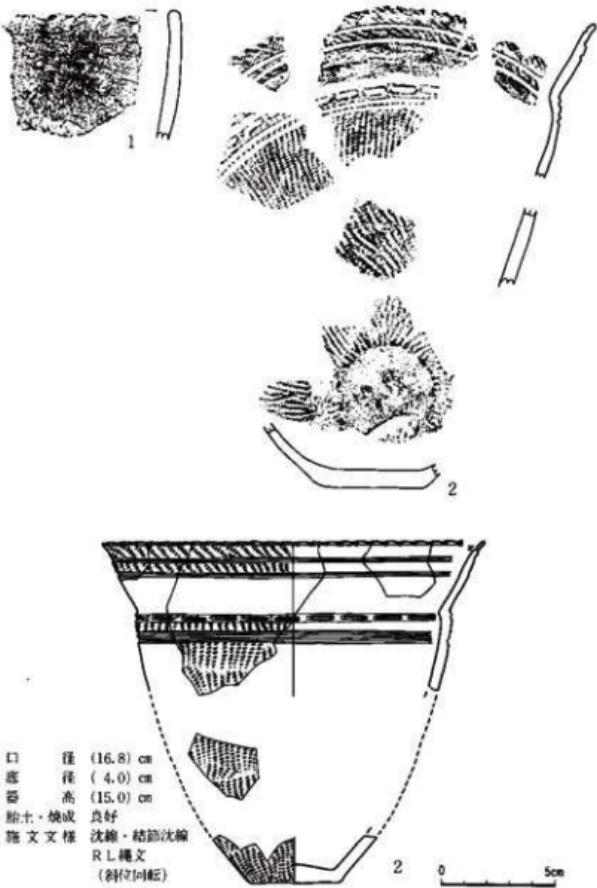
〈第VII群土器〉(第47図-1、図版6-4)

縄文時代晚期前半に比定される土器が、昭和57年度の県文化課の試掘調査の際に、M-43-45グリッドの第1層より口縁部破片が1点出土した。指頭押圧による小波状口縁の鉢形土器である。胴部は無文であるが横位のナデの痕跡がみられる。裏面には縦位のナデの整形痕がみられる。胎土には纖維を含まず細砂粒を含み、器厚4mm~6mmと薄く、焼成は良好である。色調は暗褐色である。

(岡田)

〈第IX群土器〉(第47図-2、図版6-5)

北西へ伸びる台地の頂上、E-11・12グリッドの第II層より破片で出土した。個体数は一個体である。平縁・平底の深鉢で、底部より緩やかに外反しながら立ち上がり、頸部で口縁が大きく外反する。口径(17.0)cm、底部(4.0)cm、器高(17.0)cmである。装飾・文様は、平坦な口縁に刻みを有し、口縁部外側にR \downarrow の斜縄文と2条の沈線を施文している。その下は丁寧に研磨された無文帶で、その直下には結節沈線と2条の



第47図 第VII群・IX群土器実測図及び拓影

沈線を巡らしている。更に胴部下半にはR₁ Lの縱走縄文が施文されている。裏面は横位にナデを施した後に研磨され、口縁部には1条の沈線が巡らされている。底部は中央が若干肥厚する。胎土には微細な砂粒の混入が著しく、焼成は良好である。色調は赤褐色である。口縁部直下及び頸部に赤色顔料がわずかに観察される。二次火熱・炭化物等の痕跡は認められない。類似資料として瀬野遺跡出土の第Ⅰ類aが挙げられ、二枚橋式に比定される(須藤1978)。二枚橋式土器は下北郡大畑町二枚橋遺跡出土資料をもって標準とし、同脇野沢村瀬野遺跡より該期の堅穴住居跡と膨大な量の土器・石器等が出土している(伊藤・須藤1978)。そしてその分布は下北半島を中心として八戸市周辺にも僅かながら認められる。最近、津軽半島の一部にも分布が知られるようになった。

二枚橋式土器の編年上の位置は、砂沢式に後続、五所式に併行し、字鉄Ⅱ式に先行する意見が一般である(須藤1983)。二枚橋式・五所式に先行する砂沢式は從来、縄文時代晩期末の大洞A'式のきわめて地域色の強い土器とされていたが、最近では大洞A'式に後続するものと理解されるようになつた(須藤1982、岡田他1982)。二枚橋式と五所式の関係については、五所式→二枚橋式または二枚橋式→五所式の意見もあるが、互いに分布する地域の異なる併行する土器(五所式は津軽地方、二枚橋式は下北地方)という意見が支配的である(須藤1982)。この理由として、すでに砂沢式の段階で粗製の深鉢土器には、津軽平野と太平洋岸では差違が僅かに認められ、この地域差とも呼べる差違が二枚橋式と五所式の分布図の違いに発展していくと考えられる。

今回、本遺跡で二枚橋式土器が出土したことは、その分布圏がさらに南部へ広がることを確認したことと、意義は大きく、今後の資料の増加により弥生時代の土器文化の一端が解明されることを期待したい。

なお、同村では、馬門、幸姫(3)、尾駒の各遺跡より二枚橋式土器が出土している。

(岡田)

第10表 第Ⅲ群・第Ⅳ群土器觀察表

番号	出土地点	層	形態の特徴	外 面 施 文	内面調整	胎土・焼成・色調	備 考
25-1	OS-10	Ⅲ層	(胴 部)	L Rの斜繩文(横回転) 施文	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10 YR 3/2)。	第Ⅲ群
25-2	OC-91	Ⅱ層	(胴 部)	R L斜繩文(横回転)	横 位	胎土に石英を多量に含む。 焼成やや不良。 色調は橙色(7.5 YR 4/6)。	第Ⅲ群
25-3' OU-3	OU-3	Ⅲ層	平口縁(外 反)	格子状沈線文	横 位	胎土に石英、黒雲母、その他 粗砂粒を含む。 焼成不良。 色調は橙色(7.5 YR 4/6)。	第Ⅲ群
25-4	OV-2	Ⅲ層	(胴 部)	R L斜繩文(横回転) 曲線沈線文	横 位	胎土に石英、黒雲母、その他 粗砂粒を含む。 焼成不良。 色調は橙色(7.5 YR 4/6)。	第Ⅲ群
25-5	OS-9	Ⅲ層	小波状口縁 (内傾)	無文地にヒレ状突起 (はりつけか)、 刺突文。	横 位	胎土に石英、黒雲母、細砂粒 を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 YR 5/6)。	第Ⅲ群
25-6	OS-9	Ⅲ層	小波状口縁 (内傾)	*	横 位	胎土に石英、黒雲母、細砂粒 を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 YR 5/6)。	第Ⅲ群
28-1	OG-3	Ⅲ層	波状口縁 (外 反)	隆帯貼り付け (R L繩 文押圧) L R横繩文(斜め回転)	横 位	胎土に粗砂粒含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10 YR 3/4)。	第Ⅳ群
28-2	OR-5	Ⅲ層	平口縁(外 反)	R Lの斜繩文(横回転)	横 位	胎土に多量に砂を含む。 焼成不良(もろい)。 色調は浅黄橙色(7.5 YR 5/6)。	第Ⅳ群
28-3	OD-2	Ⅲ層	(胴 部)	R L押圧の隆帯貼付 4 本	横 位	胎土に小石を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10 YR 5/6)。	第Ⅳ群
28-4	OP-3	Ⅲ層	小波状口縁 (外 反)	R Lの斜繩文(横回転)	横 位	胎土に多量に砂を含む。 焼成不良(もろい)。 色調は浅黄橙色(7.5 YR 5/6)。	第Ⅳ群 外面に炭 化物付着

第11表 第V群・第VI群土器観察表

番号・出土地点	層・形態の特徴	外面施文 内面調整	胎土・焼成・色調	備考
34-6 OP-4	I層 波状口縁(内湾)	L Rの斜繩文(横回転) 口縁部にボタン状突起	胎土に多量に小石、砂を含む。 焼成不良(もろい)。 色調は橙色(7.5Y R 3%).	第V群
34-2 OT-6	I層 波状口縁(直立)	R L 斜繩文(縦回転) 曲線沈線文 口唇部に竹管による刺突	胎土に石英、黒雲母含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5Y R %).	第V群
34-3 OU-10	II層 波状口縁(直立)	R L 斜繩文(縦回転) 曲線沈線文 口唇部に竹管による刺突	胎土に石英、黒雲母含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5Y R %).	第V群
34-4 OV-11	II層 波状口縁(外反)	R L 斜繩文(縦回転) 横位に沈線文1条 口唇部に竹管による刺突	胎土に石英、黒雲母含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5Y R %).	第V群
34-5 OS-6	III層 波状口縁(直立)	R L 斜繩文(縦回転) 横位に沈線文2条(平行沈線) 口唇部に竹管による刺突	胎土に石英、黒雲母含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5Y R %).	第V群
34-6 OQ-2	IV層 波状口縁(内湾)	L Rの斜繩文(縦回転)	胎土に小石、砂を含む。 焼成やや不良。 色調は浅黄橙色(7.5Y R %).	第V群
34-7 OW-6	II層 平口縁(直・横立)	R Lの斜繩文(縦・横回転)	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5Y R %).	第V群
34-8 OW-6	II層 平口縁(直立)	R Lの斜繩文(横回転)	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い赤褐色(5YR %).	第V群
34-9 OY-5	III層 波状口縁(内湾)	L Rの斜繩文(縦・横回転)	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10YR 3%).	第V群
34-10 I - 21	III層 平口縁(外反)	R Lの斜繩文(縦回転) 横位に沈線が3条	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10YR 3%).	第V群
34-11 OY-5	III層 波状口縁(内湾)	無記 L { Y } Y の斜繩文(縦回転)	胎土に小石、砂を含む。 焼成はややもろい。 色調は鈍い黄橙色(10YR 3%).	第V群 内面に炭化物付着
34-12 OU-8	III層 波状口縁(直立)	R Lの斜繩文(縦回転)	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10Y R %).	第V群

番号	出土地点	層	形態の特徴	外面施文	内地調整	胎土・焼成・色調	備考
34-13	N - 24 (126)	Ⅲ層	波状口縁 (直立)	R Lの斜繩文(縦回転)	横位	胎土は多量に小石、砂を含む。 焼成不良(もろい)。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群 外面に炭化物付着
34-14	O S - 6	Ⅲ層	(胴部)	R Lの斜繩文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群
34-15	O U - 9	Ⅲ層 反	平口縁(外)	横位に沈線が3条 無文	不明	胎土に多量に砂を含む。 焼成不良(もろい)。 色調は鈍い橙色(7.5Y R 3%).	第V群
34-16	O P - 2	Ⅲ層	(胴部)	R L斜繩文(縦回転) 横位に沈線文3条 曲線沈線	横位	胎土に石英、黒雲母、細砂粒 含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群
34-17	O P - 3	Ⅲ層	(胴部)	R L斜繩文(縦回転) 横位に沈線文3条(平行) R Lの斜繩文(縦回転) 斜位に沈線が2条	縦位	胎土に石英、黒雲母、粗砂粒 含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群
34-18	A - 4	Ⅲ層	(胴部)	横位に沈線が3条。沈 線間に繩文があるらし いが、磨消されていて ほとんど不明。	横位	胎土に砂を多く含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群
34-19	O U - 9	Ⅲ層 反	平口縁(外)	R L斜繩文(縦回転) 平行状線及び渦巻沈 線文。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群
34-20	O Q - 5	Ⅲ層	(胴部)	R Lの斜繩文(縦回転)	縦位の 後横位	胎土に石英を含む。 焼成不良。 色調は鈍い橙色(7.5Y R 3%).	第V群
34-21	A - 4	Ⅲ層	平口縁(内 窓)	L Rの斜繩文(縦回転)	横位	胎土に小石、砂を含む。 は 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群 外面に炭化物付着
34-22	O O - 3	Ⅲ層	平口縁(内 窓)	L Rの斜繩文(縦回転)	横位	胎土は砂を含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5Y R 3%).	第V群
35-1	J - 24	Ⅲ層	波状口縁 (11頭部外 反口唇部内 窓)	R Lの斜繩文(縦回転) 横位に沈線が平行3条。 蛇行文。沈線間に磨消 された痕があるがはっ きりしない。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R 3%).	第V群 外面に炭化物付着
35-2	M - 22	Ⅲ層	(胴部)	L Rの斜繩文(縦回転) 渦巻、沈線文。横位に 沈線が平行に2条。破 片上から約3cm以降。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(5Y R 3%).	第V群 外面に炭化物付着 2次加熱を受けて いる

番号	出土地点	層	形態の特徴	外面施文	内面調整	胎土・焼成・色調	備考
35-3	A - 4	Ⅲ層	波状口縁 (口縁部外 反口縁内湾)	R Lの斜繩文(縱回転) 横線に平行に沈線が2本	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は灰褐色(7.5 Y R 5%).	第V群
35-4	OQ-5	Ⅲ層	平口縁(直 立)	R Lの斜繩文(縱・横 回転)	横位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10 Y R 5%).	第V群
35-5	OY-5 (143)	Ⅲ層	波状口縁 (外反)	L R斜繩文(縱回転)。口 縁部0.5cm下に沈線文2条 (平行)。凸巻状沈線文。 平行沈線文。	横位	胎土に石英を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10 Y R 5%).	第V群
35-6	OP-2 (P84)	Ⅲ層	(胴 部)	R L斜繩文(縱回転)。 破片上部に沈線文2条。 山形沈線文。 曲線沈線文。	横位	胎土に石英、その他の粗粒砂 を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10 Y R 5%).	第V群
35-7	OP-2	Ⅲ層	(胴 部)	R L斜繩文(縱回転)。 破片上部に沈線文2条。 山形沈線文。 曲線沈線文。	横位	胎土に石英、その他の粗粒砂 を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10 Y R 5%).	第V群
35-8	OP-2	Ⅱ層	(胴 部)	R L斜繩文(縱回転)。 破片上部に平行沈線文 3条。山形沈線文2条。 曲線沈線文。	横位	胎土に石英、その他の粗粒砂 を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10 Y R 5%).	第V群
35-9	J - 23 (161)	Ⅲ層	平口縁(外 反)	L R斜繩文(縱回転)	横位	胎土に石英を含む。 焼成不良。 色調は橙色(7.5 Y R 5%).	第V群
35-10	J - 23 (163)	Ⅲ層	(胴 部)	L Rの斜繩文(縱回転)。 口縁部付近に平行沈線 文2条。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(7.5 Y R 5%).	第V群
35-11	A - 4	Ⅲ層	(胴 部)	R L斜繩文(縱回転)。 破片上部に平行沈線文 3条。曲線沈線文。	横位	胎土に石英を少量含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10 Y R 5%).	第V群
35-12	OP-3	Ⅲ層	波状口縁 (内湾ぎみ)	L Rの斜繩文(縱回転)	横位	胎土に砂を多量に含む。 焼成良好。 色調は純い橙色(7.5 Y R 5%).	第V群
36-2	OR-8 (62)	Ⅲ層	波状口縁 (外反)	L Rの斜繩文(横回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は純い橙色(7.5 Y R 5%).	第V群
36-3	OF-2 (107)	Ⅲ層	波状口縁 (外反)	R Lの斜繩文(縱・横 回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10 Y R 5%).	第V群

番号	出土地点	層	形態の特徴	外 面 施 文	内面調整	胎土・焼成・色調	備 考
36-4	OF-2 (109)	Ⅱ層	波状口縁 (外反)	R Lの斜櫛文(縦・横 回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10YR 5/6)。	第V群 外面に炭 化物付着
36-5	OT-2	Ⅱ層	波状口縁 (外反)	L Rの斜櫛文(縦回転)	横 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は純い橙色(7.5YR 7/6), 内部色調は橙色(10YR 5/6)。	第V群
36-6	OT-7 (22)	一括	平口縁(直 立)	L Rの斜櫛文(横回転)	横 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10YR 5/6)。	第V群 外面に炭 化物付着
36-7	OT-7 (21)	Ⅱ層	平口縁(外 反)	L Rの斜櫛文(縦回転)	横 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10YR 5/6)。	第V群
36-8	I - 25	Ⅲ層	波状口縁 (外反)	L Rの斜櫛文(横回転)	横 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10YR 5/6)。	第V群
36-9	OY-6	Ⅲ層 (胴 部)		R Lの斜櫛文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は灰黄褐色(10YR 5/6)。	第V群 外面に炭 化物付着
36-10	J - 25	Ⅲ層	平口縁(口 頭部外反) 縫部内窓)	L Rの斜櫛文(横回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は灰白色(7.5YR 5/6)。	第V群
36-11	OV-9	Ⅲ層	平口縁(内 窓)	無文 表面が磨かれている。	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5YR 5/6)。	第V群
38-1	OR-7 (137)	Ⅲ層	平口縁(内 窓)	無文地に横位に沈線2 条。	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10YR 5/6)。	第VI群
38-2	OR-8 (P-49)	Ⅲ層	平口縁(直 立)	無文地に横位に沈線が 2条。並線文。	横 位	胎土に多量に砂を含む。 焼成やや不良(若干もろい)。 色調は純い橙色(7.5YR 7/6)。	第VI群
38-3	OF-2 (108)	Ⅲ層	(胴 部)	無文地に細めの沈線文。	縦 位	胎土に石英、黒雲母、その他 の粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5YR 5/6)。	第VI群
38-4	OT-9 (P-2)	Ⅲ層	平口縁(外 反)	無文地に横位に沈線が 1条。	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は純い橙色(7.5YR 5/6)。	第VI群

番号	出土地点	層形	特徴	外施文	内面調整	胎土・焼成・色調	備考
38-5	OQ-10 (124)	Ⅲ層	(胴部)	無文地にうず巻状沈線文。	斜位及び横位	胎土に石英、黒雲母、粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は純い橙色(7.5Y R 4%).	第VI群
38-6	OT-7 (P-1)	Ⅲ層	平口縁(外反)	R L 斜繩文(様回転)。 口縁1cm下に平行沈線2条。	横位	胎土に石英、黒雲母を少許含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10Y R 4%).	第VI群
38-7	OX-11 (68)	Ⅲ層	平口縁(直立)	L R 斜繩文(様回転) 平行沈線文2条	縱位	胎土に石英を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10Y R 4%).	第VI群
38-8	OT-6 (P-8)	Ⅲ層	平口縁(直湾)	横位に沈線が2条。沈線によるうず巻。	横位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は灰黃褐色(10Y R 4%).	第VI群
38-9	OS-8 (85)	Ⅲ層	平口縁(内湾)	横位に沈線が3条。曲線文。	横位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は灰白色(10Y R 4%).	第VI群
38-10	OS-10 (P-74)	Ⅲ層	平口縁(外反)	無文	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10Y R 4%).	第VI群
38-11	OU-6 (156)	Ⅲ層	平口縁(内湾)	無文地に横位に沈線が8条。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は純い黄橙色(10Y R 4%).	第VI群

第12表 第VII群土器觀察表

番号	出土地点	層	形態の特徴	外 面 施 文	内面調整	胎土・焼成・色調	備 考
41-1	OU-9	Ⅲ層	(胴 部)	L R の斜繩文(横回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成不良。 色調は浅黄褐色(10 YR 5%)。	
41-2	OT-8	Ⅲ層	(胴 部)	L R の斜繩文(縱回転)	不 明	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 YR 7%)。	
41-3	OS-10	Ⅲ層	(胴 部)	L R 斜繩文(縱回転)	縱 位	胎土に小石、粗砂粒等を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄褐色(10 YR 7%)。	
41-4	OD-5	Ⅲ層	平口縁(外反)	R L の斜繩文(横回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(7.5 YR 5%)。	
41-5	OS-11	表様	平口縁(口唇内溝)	L R の斜繩文(縱回転) 口唇部に構文押圧	横 位	胎土に粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄褐色(10 YR 5%)。	
41-6	OV-2	Ⅲ層	平口縁(外反)	R L 斜繩文(縱回転)	横 位	胎土に大つぶの石英、黒雲母を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 YR 7%)。	
41-7	OP-5	Ⅲ層	平口縁(外反)	R L の斜繩文(横回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄褐色(10 YR 5%)。	
41-8	OV-2	Ⅲ層	平口縁(外反)	L R の斜繩文(横回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い黄褐色(10 YR 5%)。	外面に炭化物付着
41-9	OT-6	Ⅲ層	平口縁(直立)	L R の斜繩文(縱回転)	不 明	胎土に多量に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は鈍い浅黄褐色(10 YR 5%)。	外面に炭化物付着
41-10	OQ-2	Ⅲ層	平口縁(直立)	L $\begin{cases} Y \\ Y \end{cases}$ の斜繩文(縱回転) 口唇部にL $\begin{cases} Y \\ Y \end{cases}$ (横回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は明褐灰色(7.5 YR 7%)。	
41-11	F-10	Ⅲ層	平口縁(直立)	L R の斜繩文(縱回転)	横 位	胎土に粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は灰黄褐色(10 YR 5%)。	
41-12	OO-2	Ⅲ層	平口縁(くの字状に外反)	L R の斜繩文(縱回転)	横 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄褐色(10 YR 5%)。	外面に炭化物付着

番号	出土地点	層	形態の特徴	外 面 施 文	内面調整	胎土・焼成・色調	備 考
41-13	OV-4	Ⅲ層	平口縁(直立)	不明(L.Rの斜繩文(縦回転))	不 明	胎土に多量に砂を含む。 焼成不良。 色調は浅黄橙色(10YR 5/4)。	
41-14	OP-4	Ⅲ層	平口縁(直立)	R.Lの斜繩文(横回転)	不 明	胎土に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は浅黄橙色(10YR 5/4)。	
41-15	OS-9	Ⅲ層	平口縁(外反)	L.Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10YR 3/4)。	
41-16	OP-5	Ⅱ層	平口縁(外反)	R.Lの斜繩文(横回転)	縦 位	胎土に石英を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10YR 5/4)。	
41-17	OS-9	Ⅲ層	平口縁(外反)	L.Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙(7.5YR 3/4)。	
41-18	OO-6	Ⅱ層	(胴 部)	L.Rの斜繩文(縦回転)	斜 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(7.5YR 3/4)。	
41-19	OO-4	Ⅲ層	平口縁(直立)	L.Rの斜繩文(横回転) L.Rの結節、口縁部上から0.7cm位まで。	横 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(7.5YR 3/4)。	
41-20	OS-9	Ⅲ層	(胴 部)	L.Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(5YR 3/4)。	
41-21	OS-9	Ⅲ層	(胴 部)	L.Rの斜繩文(縦回転)	斜 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5YR 3/4)。	
41-22	M-22	Ⅲ層	(胴 部)	L.Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5YR 3/4)。	内外面に 炭化物付 着
42-1	OW-11	Ⅲ層	平口縁(外反)	L.Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を多く含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5YR 3/4)。	
42-2	OP-3	Ⅲ層	平口縁(直立)	R.Lの斜繩文(横回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(7.5YR 3/4)。	

番号	出土地点	層	形態の特徴	外面施文	内面調整	胎土・焼成・色調	備考
42-3	OP-3	Ⅲ層	平口縁(外反)	L Rの斜縦文(縦回転)	斜位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い褐色(7.5 YR %)。	
42-4	OP-3	Ⅱ層	平口縁(直立)	L Rの斜縦文(縦回転)	縦位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 YR %)。	
42-5	OT-6	Ⅲ層	平口縁(外反)	L Rの斜縦文(縦回転)	斜位	胎土に小石、砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い黄橙色(10 YR %)。	
42-6	OO-3	Ⅲ層	平口縁(外反) 口唇部にもL R斜縦文(横回転)。	L Rの斜縦文(縦回転) 口唇部にもL R斜縦文(横回転)。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙(7.5 YR %)。	
42-7	OT-7	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜縦文(縦回転)	斜位	胎土に石英、黒雲母、細砂粒含む。 焼成良好。 色調は橙色(5 YR %)。	
42-8	OR-3	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜縦文(縦回転)	不明	胎土に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は鈍い黄橙色(10 YR %)。	
42-9	OQ-5	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜縦文(縦回転)	横位	胎土に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は鈍い黄橙(10 YR %)。	
42-10	OO-6	Ⅲ層	平口縁(外反)	L Rの斜縦文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 YR %)。	
42-11	OQ-2	Ⅲ層	平口縁(内湾)	L Rの斜縦文(縦回転) 口唇部に縦文を押圧。	横位	胎土に細砂粒を含む。 焼成良好。 色調は鈍い褐色(7.5 YR %)。	
42-12	OU-2	Ⅲ層	平口縁(直立)	R Lの斜縦文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は明黄褐(10 YR %)。	
42-13	OQ-2	Ⅱ層	平口縁(直立)	L Rの斜縦文(縦回転)	横位	胎土に多量の小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は橙色(7.5 YR %)。	
42-14	OS-7	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜縦文(縦回転)	不明	胎土に砂を多く含む。 焼成不良。 色調は浅黄橙色(7.5 YR %)。	

番号	出土地点	層	形態の特徴	外 面 施 文	内面調整	胎土・焼成・色調	備 考
42-15	OQ-2	Ⅲ層	平口縁(直立)	R Lの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に多量に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(7.5Y R ¾)。	外面に炭化物付着
42-16	OQ-8	Ⅲ層	平口縁(直立)	R Lの斜繩文(縦回転)	縦 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10Y R ¾)。	
42-17	OS-8	Ⅱ層	平口縁(直立)	L Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10Y R ¾)。	
42-18	OU-6	Ⅲ層	平口縁(内湾)	L Rの斜繩文(斜め回転)	横 位	胎土に多量の砂を含む。 焼成やや不良。 色調は浅黄橙色(10Y R ¾)。	外面に炭化物付着
42-19	OS-10	Ⅲ層	折返し口縁(外反)	R Lの斜繩文(縦回転)	縦 位	胎土に石英、黒雲母等粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10Y R ¾)。	
42-20	OS-8	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に石英、黒雲母、細砂粒を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5Y R ¾)。	
42-21	OD-2	Ⅲ層	平口縁(外反)	R Lの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は浅黄橙(7.5Y R ¾)。	
42-22	OQ-4	Ⅲ層	平口縁(内湾)	L Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は鈍い橙色(5Y R ¾)。	外面に炭化物付着
43-1	OP-3	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5Y R ¾)。	
43-2	OO-6	Ⅲ層	平口縁(口唇部外反)	L Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(10Y R ¾)。	外面に炭化物付着
43-3	OS-7	Ⅲ層	平口縁(内湾)	L Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に多量に小石、砂を含む。 焼成不良(もろい)。 色調は鈍い橙色(7.5Y R ¾)。	
43-4	OP-9	Ⅲ層	平口縁(口唇部外反)	L Rの斜繩文(縦回転)	横 位	胎土に石英、黒雲母等を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙色(10Y R ¾)。	

番号	出土地点	層	形態の特徴	外 面 施 文	内面調整	胎土・焼成・色調	備 考
43-5	OT-7	Ⅲ層	平口縁(外反)	L R の斜櫛文(縦回転)	斜位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は橙色(5 Y R %)。	
43-6	OS-7	Ⅲ層	(胴部) L R の斜櫛文(縦回転)		不 明	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は淡黄橙色(7.5 Y R %)。	
43-7	OW-5	Ⅲ層	平口縁(外反)	L R の斜櫛文(横回転)	不 明	胎土に多量の小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は橙色(7.5 Y R %)。	
43-8	OS-10	Ⅲ層	平口縁(直立)	L R の斜櫛文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は淡黄橙(7.5 Y R %)。	
43-9	OY-9	Ⅲ層	平口縁(直立)	L R の斜櫛文(縦回転)	縦位	胎土に石英等、粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。	
43-10	OT-7	Ⅲ層	平口縁(直立)	L R の斜櫛文(縦回転)	不 明	胎土に小石、砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。	
43-11	OQ-4	Ⅱ層	(胴部) 条線		横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は灰白色(10 Y R %)。	
43-12	OV-9	Ⅲ層	平口縁(直立)	L {Y Y} の斜櫛文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は淡黄橙色(10 Y R %)。	
43-13	OT-7	Ⅲ層	平口縁(外反)	L R の斜櫛文(縦回転)	不 明	胎土に多量の小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は淡黄橙色(10 Y R %)。	外面に炭化物付着
43-14	OP-2	Ⅱ層	平口縁(直立)	L R の斜櫛文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は明赤褐(5 Y R %)。	外面に炭化物付着
43-15	OU-7	Ⅲ層	平口縁(直立)	L {Y Y} の斜櫛文(縦回転)	横位	胎土に砂を多く含む。 焼成不良。 色調は灰白色(10 Y R %)。	
43-16	OO-6	Ⅱ層	平口縁(直立)	L R の斜櫛文(横・縦回転)	横位	胎土に粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。	

番号	出土地点	層	形態の特徴	外面施文	内面調整	胎土・焼成・色調	備考
43-17	OO-5	Ⅱ層	平口縁(直立)	L Rの斜繩文(縦回転)	不明	胎土に多量に砂を含む。 焼成不良(もろい)。 色調は鈍い黄橙色(10YR 7/4)。	
43-18	OZ-4	Ⅲ層	平口縁(直立)	R Lの斜繩文(横回転)	不明	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5YR 7/4)。	
43-19	O-29	Ⅲ層	平口縁(内済)	L Rの斜繩文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は黄褐(10YR 5/4)。	
43-20	OY-9	Ⅲ層	平口縁(外反)	L Rの斜繩文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は浅黄橙(10YR 5/4)。	
43-21	I-25	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜繩文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は橙色(7.5YR 7/4)。	
43-22	OQ-7	Ⅲ層	平口縁(直立)	L Rの斜繩文(縦回転)	縦位	胎土に石英等細砂粒を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5YR 7/4)。	
44-1	OO-3	Ⅲ層	(胴部)	網目状然糸文	縦位	胎土に石英、黒雲母を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い黄橙色(10YR 7/4)。	
44-2	OW-4	Ⅱ層	(胴部)	R Lの斜繩文(縦回転)	不明	胎土に多量に砂を含む。 焼成不良。 色調は浅黄橙色(10YR 5/4)。	内外面に 炭化物付着
44-3	F-11	Ⅱ層	平口縁(直立)	L Rの結節	横位	胎土に小石、砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い黄橙色(10YR 7/4)。	
44-4	OO-3	Ⅲ層	平口縁(外反)	結柔体、口縁、折り返し痕あり。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5YR 7/4)。	
44-5	OP-5	Ⅱ層	平口縁(外反)	R Lの斜繩文(縦回転)	縦位	胎土に石英、細砂粒を含む。 焼成不良。 色調は鈍い黄橙色(10YR 7/4)。	
44-6	OP-3	Ⅱ層	平口縁(外反)	結柔体、口縁、折り返し痕あり。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5YR 7/4)。	

番号	出土地点	層	形態の特徴	内面施文	内面調整	胎土・焼成・色調	備考
44-7	LM-23	Ⅲ層	(刷部)	L Rの撚糸による網目 状燃系文	横位	胎土に細砂粒を含む。 焼成不良。 色調は褐色(7.5 YR 3/4)。	
44-8	L - 23	Ⅲ層	平口縁(外反)	L { Y の斜橺文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 YR 3/4)。	
44-9	M - 23	Ⅲ層	平口縁(外反)	L { Y の斜橺文(縦、横回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(5 YR 3/4)。	
44-10	OQ-2	Ⅲ層	半口縁(直立)	L Rの斜橺文(縦回転)	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(5 YR 3/4)。	
44-11	OO-3	Ⅲ層	平口縁(内湾)	L Rの斜橺文(縦回転)	横位	胎土に細砂粒を含む。 焼成不良。 色調は鈍い橙色(7.5 YR 3/4)。	

第13表 第III群～第VII群土器底部観察表

番号	出土地点	層	形態の特徴	外面施文	内面調整	胎土・焼成・色調
45-1	O P - 3 (No. 4)	Ⅲ層	平底	脚下部に整形痕あり。 R L の斜縞文(横・斜め回転)。	縱位	胎土に石英、砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(7.5 Y R %)。
45-2	O Q - 5 (No. 1)	Ⅲ層	平底	R L の斜縞文(縦回転)	縱位	胎土に石英、粗砂粒を含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 Y R %)。
45-3	O T - 8 (No. 2)	Ⅲ層	平底	笠葉底	横位	胎土に多量に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は浅黄橙色(10 Y R %)。
45-4	E - 11. 12. (No. 1)	Ⅱ層	平底	R L 斜縞文(縦回転)。 網代底。	縱位及び斜位	胎土に石英、黒雲母、小石を含む。 焼成やや不良。 色調は橙色(7.5 Y R %)。
45-5	I - 24 (No. 1)	Ⅲ層	平底	R L 斜縞文(縦回転)	縱位	胎土に石英、小石を多量に含む。 焼成良好。 色調は鈍い橙色(7.5 Y R %)。
45-6	O T - 8 (No. 1)	Ⅲ層	平底	R L 斜縞文(横回転)	縱位	胎土に小石を含む。 焼成不良。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。
45-7	O U - 4	Ⅲ層	平底	笠葉底	不明	胎土に多量に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は浅黄橙色(10 Y R %)。
45-8	O S - 8	Ⅲ層	平底	木葉底	不明	胎土に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は鈍い橙色(7.5 Y R %)。
45-9	O P - 5 (No. 2)	Ⅱ層	平底	木葉底	不明	胎土に多量に砂を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い橙色(7.5 Y R %)。
45-10	O P - 2	Ⅲ層	平底	R L 斜縞文(縦回転)	縱位	胎土に粗砂粒(石英も)含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。
45-11	O E - 1 (147)	Ⅱ層	平底	無文。 網代底。	横位	胎土に砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。
45-12	O R - 6 (No. 1)	Ⅲ層	平底	R L 斜縞文(縦回転)。脚下部に整形痕あり。笠葉底。	斜位	胎土に石英、黒雲母を含む。 焼成やや不良。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。
45-13	O U - 1	Ⅲ層	平底	網代底	不明	胎土に多量に小石、砂を含む。 焼成不良。 色調は鈍い黄橙色(10 Y R %)。
45-14	O T - 8	Ⅲ層	平底	R L の斜縞文(縦回転)	不明	胎土に小石、砂を含む。 焼成やや不良。 色調は浅黄橙色(7.5 Y R %)。
45-15	O Z - 7 (No. 3)	Ⅲ層	平底	R L 斜縞文(縦回転)。 笠葉底。	縱位	胎土に小石、粗粒砂を含む。 焼成良好。 色調は鈍い褐色(7.5 Y R %)。

2. 石器

遺構外から出土した石器はフレイクを含めて91点である。その器種によって、次のように分類される。共伴する土器がないため、時期を明確にし得ないが形態より推定して、縄文時代中期末～後期初頭のものと考えられる。

1) 石鎌(第48図-1～4、図版14-1～4)

4点出土した。完形品は1点のみで、他は欠損している。破損状況は、鎌先が欠損しているものが2点、基部が欠損しているものが3点、鎌先・基部ともに欠損しているものが2点ある。基部の形態により、①有茎で闊と茎がT字状をなすもの-T字有茎(第48図-1～3、図版14-1～3)②凹基無茎のもの(第48図-4、図版14-4)に分類される。

第14表 石鎌計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第48図-1	石鎌	OV-6-II	(35.5)	13.7	6.0	2.2	頁岩	鎌先欠損
タ-2	*	OX-9-III	(24.2)	12.0	5.0	1.8	*	鎌先欠損
タ-3	*	OQ-4-II	12.6	13.5	5.2	1.0	*	基部にアスファルト付着
タ-4	*	OO-4-II	19.3	13.8	2.0	1.2	*	

2) 石匙(第48図-5～7、図版14-5～7)

3点出土した。いずれも完形品で、腹面に主要剥離面を残す片面加工の縦型石匙である。(第48図-5～7、図版14-5～7)は両面に調整剥離が加えられているが、(第48図-6、図版14-6)は背面のみに調整剥離が加えられている。

第15表 石匙計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第48図5	石匙	X-26-II	61.0	25.0	10.0		頁岩	
タ-6	*	C-13-III	86.4	25.5	10.4		*	
タ-7	*	OQ-3-IV	62.8	46.0	7.5		*	

3) スクレイパー(第48図-8・9、図版14-8・9)

完形品が2点出土した。いずれも縦長の剥片を用い、腹面に主要剥離面を残す片面加工のものである。背面に調整剥離を加えている。調整剥離が辺縁の1/4以上に加えられているものをスクレイパー、それ未満のものをR・フレイクとした。

第16表 スクレイバー計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第48図8	スクレイバー	OP-4・IV	60.6	40.4	6.2		頁岩	
タ9	タ	OQ-6・III	68.7	37.0	9.5		タ	
タ10	タ	J-26・III	87.4	34.7	13.5		タ	

4) R・フレイク(第48図-10~14、第49図-15、図版14-10~12)

4点出土した。すべて縦長の剥片で、辺縁に調整剥離を加えて刃部を作出しているのを一括した。調整剥離は、腹面に施されるものと背面に施されるものがある。

第17表 R・フレイク計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第48図11	R・フレイク	OQ-7・III	30.7	17.4	6.8		頁岩	
タ12	タ	OV-2・III	25.0	22.0	4.0		タ	
タ13	タ	OU-7・III	65.0	25.0	5.0		タ	
タ14	タ	E-11・III	38.0	21.5	12.0		タ	
タ15	タ	E-11・III	24.3	21.2	8.2		タ	

5) U・フレイク(第49図-16・17、図版14-13~15)

3点出土した。剥片の鋭利な周縁部に、刃こぼれ状の微細な剥離痕(マイクロ・フレイキング)が観察されるのを一括した。

第18表 U・フレイク計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第49図15	U・フレイク	OQ-7・III	25.0	26.4	7.2		頁岩	
タ16	タ	OV-2・III	30.0	25.0	9.0		タ	
タ17a	タ	OV-2・III	34.5	35.0	9.0		タ	
タ17b	タ	OV-2・III	50.0	33.0	8.0		タ	接合

6) その他(第49図-18・19、図版14-16・17)

剥片が46点出土した。縦長のものと横長のものとの比率は、ほぼ同じである。自然面を打面とするものは少なく、先行する剥離面を打面とするものが大部分である。注目されるのは、両極打法によって作出されたと思われる剥片が2点みられた。

第19表 フレイク計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第49図18	剥片	OP-6・II	23.0	19.0	7.0		頁岩	両極打法
※ 19	※	OP-6・II	25.0	24.0	7.0		※	※

7) 磨製石斧 (第50図、図版15-20-27)

13点出土した。完形品が4点で、他は刃部を欠損するもの2点、基部を欠損するものが7点ある。また、未製品と思われるものが1点出土している。

いわゆる定角式磨製石斧と呼ばれるもので、平面形は撥状で、基部側縁に稜をもち、断面が隅丸長方形のものと、稜をもたず断面が横円形のものがある。刃部の形状は、両刃・円刃のものが大部分で、偏刃のものが2点である。刃部の形状より、大型のものは縦斧、小型のものは横斧として使用されたと考えられる。しかし、小型のものは、大型のものが破損した後に再利用された可能性も考えられる。(第50図-23)は、基部に敲打の痕跡が著しいところから『ノミ』として使用されたものと思われる。

第20表 磨製石斧計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第50図20	磨製石斧	OO-7・II	171.0	54	39.4	420	閃緑岩	
※ 21	※	F-12・III	133.0	42.2	18.2	200	綠色頁岩	
※ 22	※	OO-7・II	98.3	40.0	19.2	220	閃緑岩	
※ 23	※	OQ-9・II	66.4	40.8	25.4	140	※	
※ 24	※	OP-10・III	40.0	32.0	20.6		綠色凝灰岩	基部
※ 25	※	OT-8・II	48.3	30.2	19.4		閃緑岩	※
※ 26	※	C-10・II	22.8	42.0	18.2		※	刃部
※ 27	※	OT-6・III	21.0	29.0	10.2		※	※
※ 28	※	A-47・II	24.5	40.0	15.5		※	※
※ 29	※	OU-6・III	16.5	20.5	6.5		※	※
※ 30	※	OS-9・III	80.1	10.9	10.0		粘板岩	未製品(?)

8) 敲石 (第51図、図版15-35-40、図版16-41-43)

縫面又は側縁に敲打痕が認められるものを一括した。敲打痕の箇所数により次のように区分した。

・(a) 敲打痕が1か所に認められるもの 7点 (第51図-31-36、40)

・(b) 敲打痕が2か所に認められるもの 2点 (第51図-37-38)

いずれも、素材の大きさ・重さとも片手で操作できる範囲のものである。

第21表 敷石計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第51図40	敲石	OQ-6・Ⅲ	95.0	69.0	36.0		安山岩	
タ	タ	OS-8・Ⅱ	70.1	66.3	40.6		チャート	
タ	タ	OR-4・Ⅱ	60.2	68.2	49.0		凝灰岩	
タ	タ	OT-7・Ⅱ	66.6	63.6	37.6		チャート	
タ	タ	OP-4・Ⅱ	74.4	60.3	53.4		タ	
タ	タ	OQ-4・Ⅱ	76.2	56.6	43.0		タ	
タ	タ	OQ-3・Ⅲ	59.6	65.3	40.8		タ	
タ	タ	OX-1・Ⅲ	63.0	50.2	21.6		タ	
タ	タ	I-24・Ⅲ	196.0	89.2	80.0		安山岩	
タ	タ	OS-10・Ⅱ	82.5	58.0	32.0		砂岩	

9) 磨石(第52図、図版15-28-34)

礫面又は側縁に擦痕があり、機能面からとらえることのできるものを一括した。機能面数により次のように区分した。

- ・(a) 擦痕が1面のみ 5点 (第52図-41-44、49)
- ・(b) 擦面が2面のみ 3点 (第52図-45-47)
- ・(c) 球状磨石 4点 (第52図-48)

(a)の中には、礫を打ち欠き、整形して作出した面を機能面とするものや、抉入りのものなどがある。

第22表 磨石計測表

番号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石種	備考
第52図31	磨石	OQ-3・Ⅲ	117.0	48.0	56.0		安山岩	
タ	タ	OQ-6・Ⅱ	67.8	68.6	41.6		タ	
タ	タ	OO-4・Ⅱ	82.0	67.0	18.7		砂岩	
タ	タ	OI-3・Ⅱ	106.0	82.0	36.0		安山岩	
タ	タ	I-25・Ⅲ	103.2	52.6	33.5		タ	
タ	タ	OP-6・Ⅱ	94.0	95.0	39.0		チャート	
タ	タ	OT-6・Ⅲ	58.0	47.8	24.0		チャート	
タ	タ	OS-6・Ⅲ	72.6	62.5	55.7		安山岩	
タ	タ	I-24・Ⅲ	58.4	60.5	26.0		タ	

10) 石皿(第53図、第54図54-56、図版16-44-50)

9点出土した。うち、完形品4点、破損しているもの5点である。自然石の平坦面を利用し

機能面としているものと、敲打を加え整形して機能面を作出しているものがある。底面積が小さく、また、上面と下面が平行にならず、すわりの悪いものが多いため、機能面が平坦になるように固定して使用したものと考えられる。機能面には、敲打作業を行ったと思われるざらざらした凹凸の面と、磨擦作業を行ったと思われる滑らかで平坦な面があり、風化の著しいものを除いて、大部分の石皿の機能面は両方の特徴がみられる。

第23表 石皿計測表

番 号	器種	出土地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 种	備 考
第53図50	石皿	OQ-3・II	151.0	175.0	89.0		安 山 岩	
タ	タ	K-23・III	127.3	93.8	37.9		石英ホルンフェルス	
タ	タ	OO-3・II	130.0	140.0	45.0		タ	
タ	タ	OU-8・III	145.8	143.0	66.0		流 紋 岩	
第54図54	タ	OT-7・III	102.0	149.0	103.5		安 山 岩	
タ	タ	OQ-2・III	79.0	123.0	105.0		タ	
タ	タ	OS-7・III	126.0	95.0	69.8		タ	

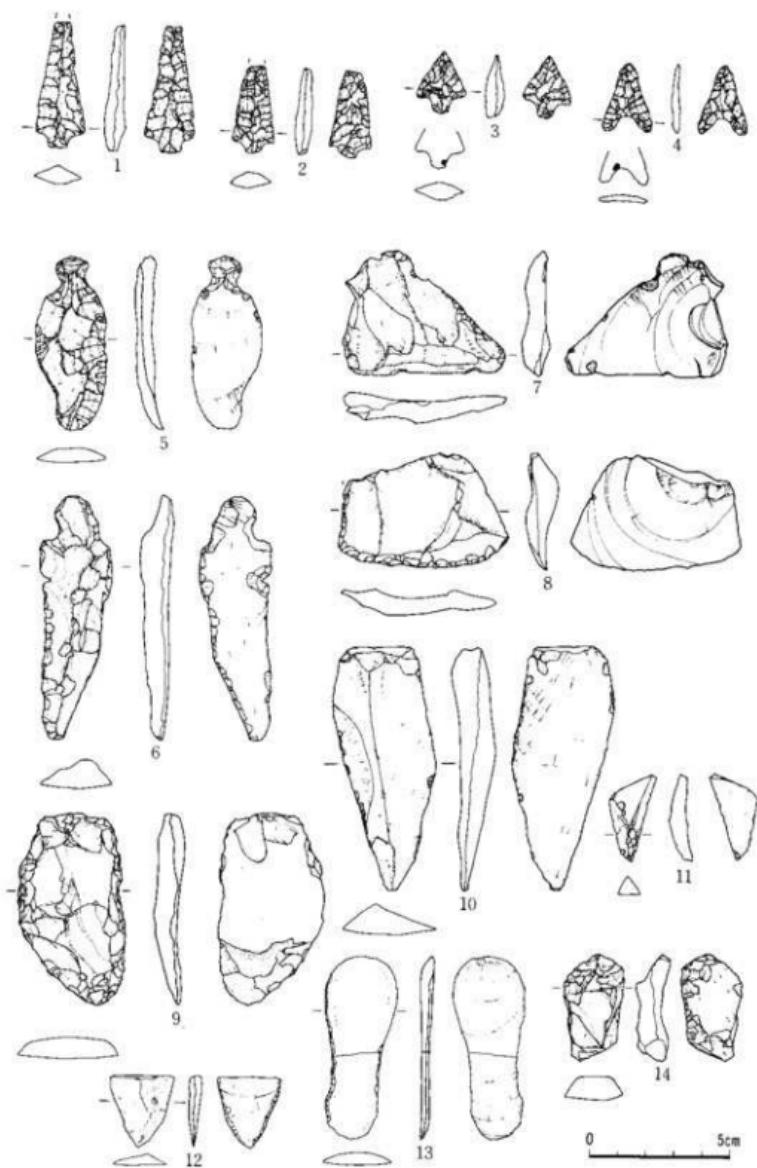
3. その他の遺物

1) 土器片円盤(第54図- 57、図版14- 18)

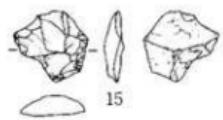
北西に伸びる台地の南側斜面、O P- 3 グリッドの第II層より1点出土した。土器片を再利用し、辺縁を打ち欠いて円形に整形したものである。大きさは2.8cm× 2.7cm、厚さ0.8cm- 1.1cm、重さ10gである。胎土には微細な砂粒・鉱物を多量に含み、焼成は良好である。器表には擦痕がみられ、裏面は磨滅が激しい。時期は不明である。

2) 岩 版(第54図- 58、図版14- 19)

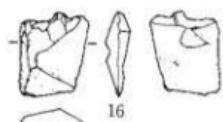
北西に伸びる台地の南側斜面、OO- 4 グリッドの第II層より出土した。辺縁を磨きにより整形し、表裏面ともに一定方向の擦痕がみられる。形状は菱形と思われるが定かではない。大きさは2.8cm× 2.2cmで厚さ0.3cm、重さ6gである。時期は不明である
(岡田)



第48図 遺構外出土遺物-(1)



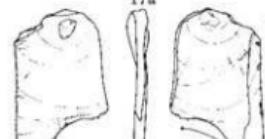
15



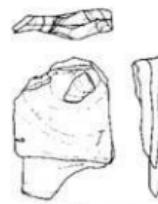
16



17a



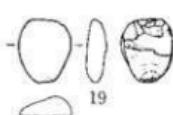
17b



17a+b (接合)

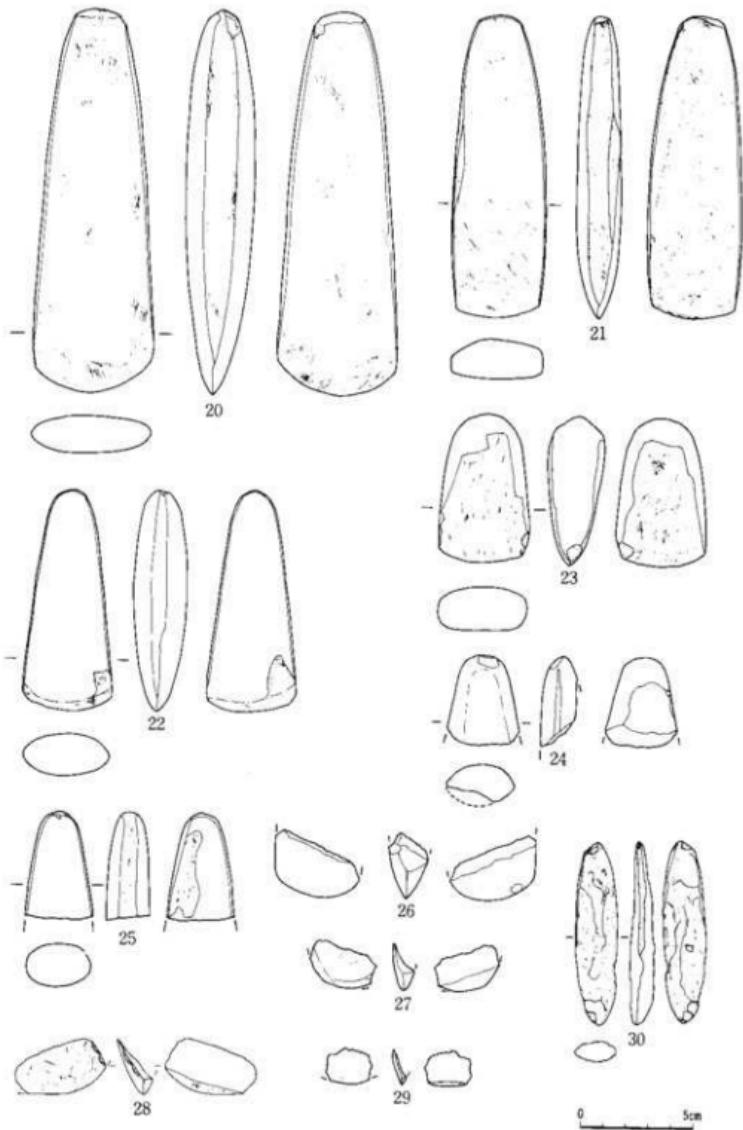


18

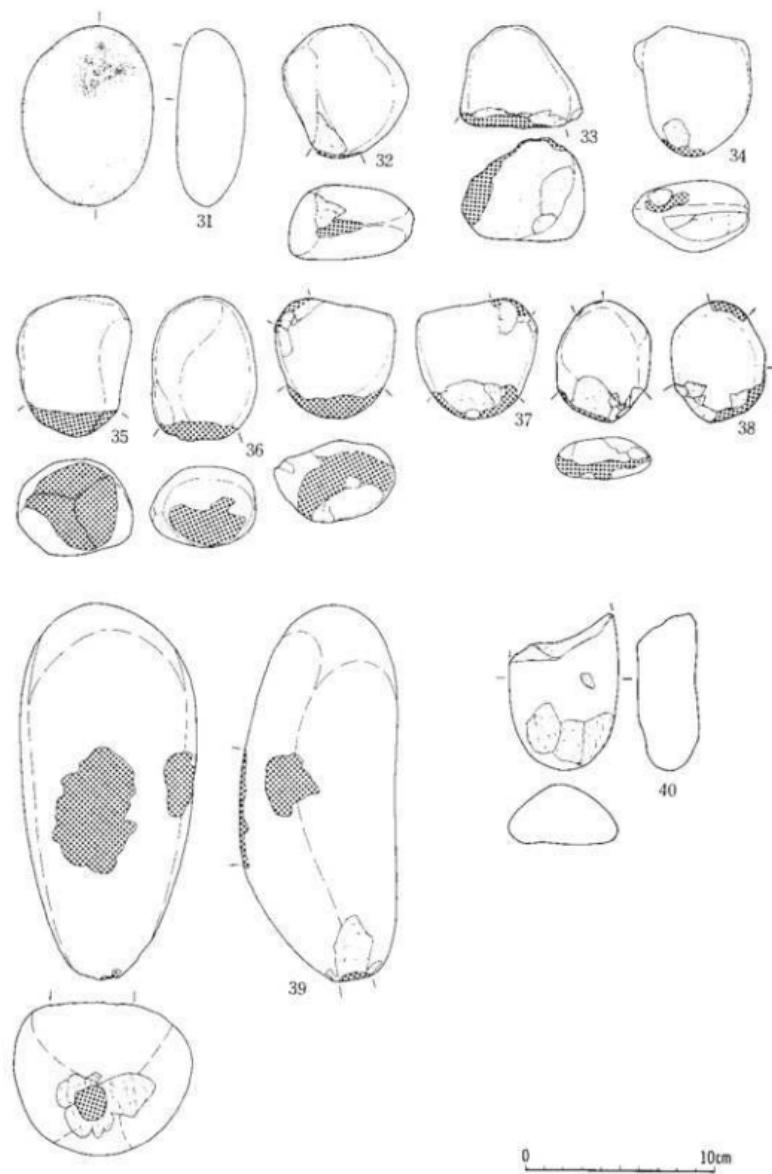


19

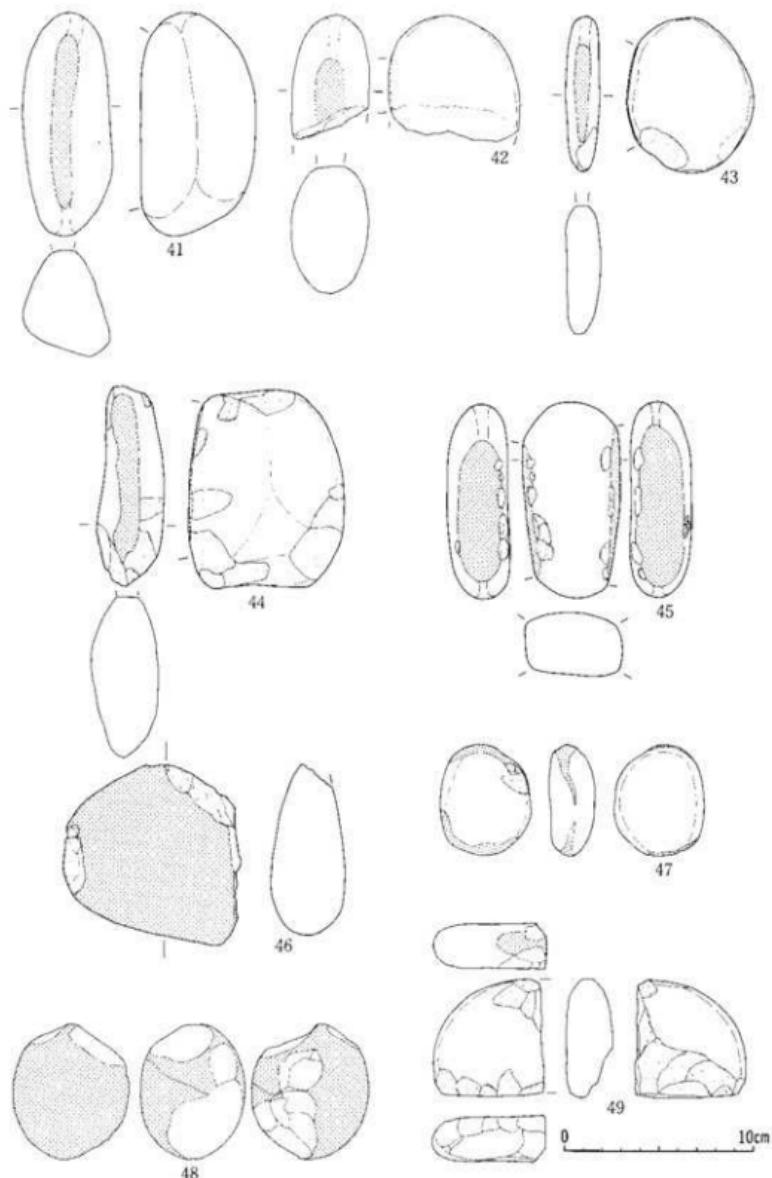
0 5cm



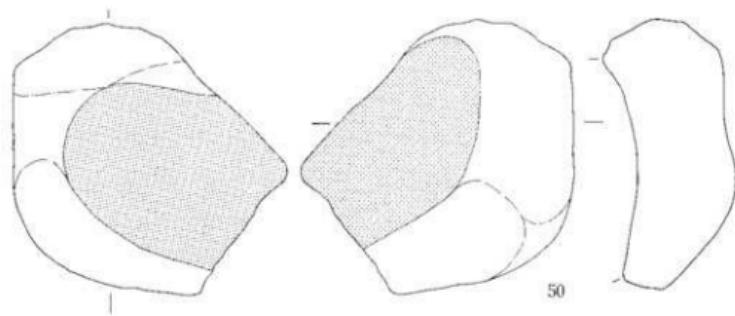
第50図 遺構外出土遺物一(3)



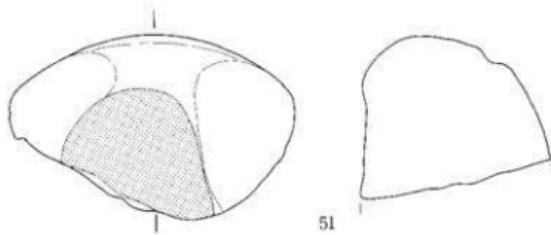
第51図 遺構外出土遺物-(4)



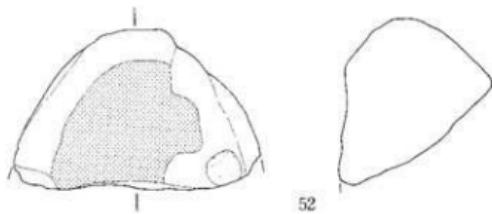
第52図 遺構外出土遺物(5)



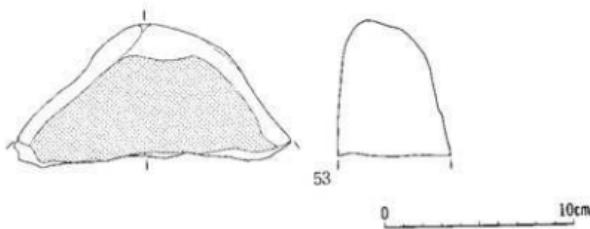
50



51

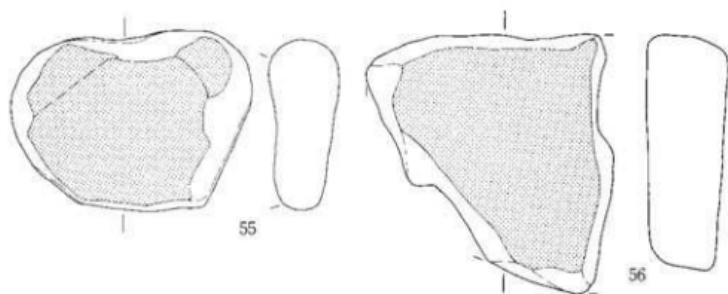
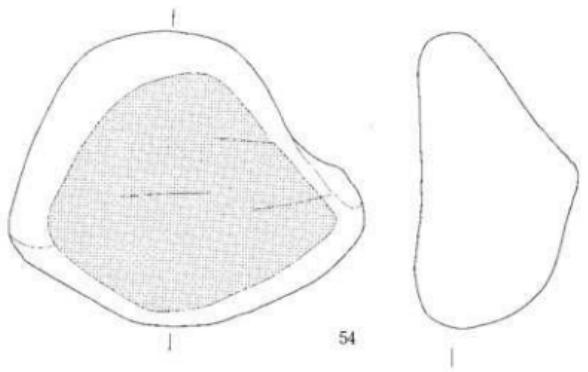


52

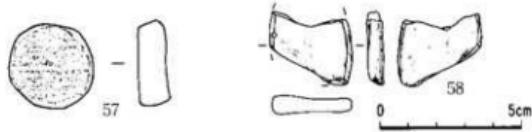


0 10cm

第53図 遺構外出土遺物-(6)



0 10cm



第54図 遺構外出土遺物一(7)

第5章 考察とまとめ

第1節 住居跡について

検出された竪穴住居跡は1軒のみで、構築時期は遺構内より出土した土器片から推定して、繩文時代中期～後期初頭に位置づけられるものと思われる。これまで、県内で中期末～後期初頭にかけての住居跡が検出された遺跡は次のとおりであるが、ここで本遺跡のものと若干の比較をしてみたい。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ①西津軽郡鰐ヶ沢町大曲1号遺跡 | ⑦上北郡六ヶ所村原々種農場遺跡 |
| ②北津軽郡金木町妻の神遺跡 | ⑧三戸郡五戸町中ノ沢西張遺跡 |
| ③南津軽郡平賀町井沢遺跡 | ⑨八戸市鶴窪遺跡 |
| ④青森市三内遺跡 | ⑩八戸市葦窪遺跡 |
| ⑤青森市孫内遺跡 | ⑪八戸市牛ケ沢(3)遺跡 |
| ⑥青森市螢沢遺跡 | |

この中で、本遺跡と同様に地床炉を有する住居跡は、三内遺跡・螢沢遺跡から検出されている。他遺跡の住居跡は石囲い炉・土器囲い炉である。三内遺跡では、地床炉を有する住居跡が3軒検出され、住居跡の平面形は方形ないしは梢円形で、壁柱穴を配するものである。また、螢沢遺跡では、平面形は梢円形で、やはり壁柱穴を配するものである。大きさ・面積とも、いずれの場合も本遺跡より大きい。また、本遺跡の住居跡は南東向きに入口を持つ可能性が強いが、他の遺跡で入口の施設と明確に思われるものは、井沢遺跡・鶴窪遺跡より検出されている。井沢遺跡第5号住居跡は、床面に甕を埋め込み、この甕の間がかたく踏み締められているところから入口としている。向きは北北東である。また、鶴窪遺跡第1号住居跡では、対になる長円形のビットを入口等の施設痕としている。向きは北西である。他の住居跡については入口の施設と思われるものは検出されていない。

(岡田)

第2節 出土土器について

（第II群土器について）

6片出土したが、すべて接合した。この土器は、今までのところ県内では類例のみられないものである。まず、この土器の特徴を列記してみる。

- 胎土に砂粒と纖維を含む。

- 焼成は比較的よい。
- 口唇部がわずかに膨らみ、上面はやや平らにされている。
- 器内面には縁い凹凸がある。
- 口唇上面に縄の末端の圧痕がある。
- 器外面の文様は、縄の末端の圧痕と、それに続く数条の組紐圧痕が単位となり、それらが縱方向に、弧状に入り組む構成となっている。

これらの特徴から考えると、口唇部の形態、口唇上面の縄端圧痕、内面の凹凸の状態、組紐文様、縱方向の文様構成等の諸点で、早稲田5類土器（佐藤他、1960）と共に通する。また、平組紐の圧痕は、東鈴路III~IV式（沢他、1962）に相当するとされる表館遺跡第I群7類（畠山他、1981）にみられる文様である。器表面の縄の末端刺突や縄文原体の側面圧痕による曲線的な文様構成は、長七谷地貝塚第III群土器（大湯他、1980）に類似するものと思われる。しかし、胎土が粗く焼成のかたい点では、脆弱といわれる早稲田5類の諸例とは異なる。また、同じ組紐の圧痕による文様でも表館遺跡の例とは文様構成がかなり違っている。更に、凹凸のある内面の状態からは、長七谷地貝塚第III群とは異質の感じを受ける。

このように、縄文時代早期末とされる早稲田5類土器をはじめとする諸例とは、共通する要素も多いが平組紐による独特の文様展開をするなど非常に特異な様相を示す土器である。

（坂 本）

〈第II群土器について〉（第4章参照）

A類は、沈線文及び竹管状刺突文、胴部の張り具合等から判断して最花式に比定できる。口頸部が無文で内傾し、巻状及び逆「U」字状の沈線が施文され、これらがこの型式の特徴になっている。周辺の遺跡では富ノ沢遺跡から出土している。

B類は、磨消文、それに付随する鱗状突起、及び細い沈線文が特徴で、平賀町井沢遺跡、三厩村宇鉄遺跡、今別町山崎遺跡等から出土している土器で、これらは、大木10式に併行し、中期終末期に位置づけられている。

（成 田）

〈第IV群・V群・VI群土器について〉

第IV土器と第V群土器は、十腰内I式以前、第VI群土器は十腰内I式土器に相当する。

第IV群土器は、隆帯をもつ土器であり、幅が狭く、隆起も高くないのが特徴である。螢沢遺跡の第5群土器に類似しているが、破片が少ないため明確な時期を判断することができない。

隆帯をもつ土器は、泉山遺跡（古市豊司他、1977）千歳遺跡（13）（成田誠治他、1976）等で出土しており、最近の発掘調査でもその出土例が増加しているが、これらの土器は、文様構成、

形状等から考えて從来の十腰内 I 式と切り離して考えるべきものと思われる。

第 V 群土器は、地文の文様に沈線を施文している群で、螢沢遺跡（葛西勲、1979）の第 1 群土器に対比できると思われる。第 1 群土器では、逆 S 字文の「の」の字文、渦巻文等を施文し、本類と同様の文様をもっている。ほかに、類例遺跡として黄金山遺跡（渡辺兼庸、1968）、家の上遺跡（A 類土器）、外崎沢 1 遺跡第 3 群土器 1・2 類土器（葛西・高橋、1979）などがある。

十腰内 I 式は、昭和 43 年に十腰内遺跡（今井・磯崎、1968）を標式として発表されている。その後、十腰内 I 式の文様構成の多様性から、形式の枠をこえてとらえ続けてきたため、十腰内 I 式の文様要素が拡大して解釈されている。本遺跡では十腰内 I 式の文様の要素をもつ、無文地に変形した渦巻状沈線及び平行沈線の土器が出土している。
(成田)

—— ま と め ——

本遺跡は、縄文時代中期末から後期前半にかけての遺跡が多い地域に位置し、今回の発掘調査でも、この時期に相当する竪穴住居跡が 1 軒検出された。この住居跡は、ほぼ円形 (3.5×3.4m) で、地床炉をもち、16 個の壁柱穴が巡っている。床面直上から刻線のある石製品と石皿が出土しているが、土器の出土はわずかである。

土壤は 4 基検出されたが、年代を確定できる出土遺物はなく、また用途も不明である。埋設土器は、00 ライン上から検出されたが、その場所が調査区外との境界部分にかかったため、関連する遺構の存在、あるいは用途等明確に把握し得なかった。

集石のあった遺構は、52 年の試掘調査の際に検出された配石遺構とは、石の形状及びその配列規模等共通する点はなく、用途などは異なるものと思われる。

石器では、すり石と磨製石斧の数が多く、この調査区の特徴ともなっている。

土器は、縄文時代早期・中期・後期・晚期、弥生時代とその出土状況は多岐にわたっているが、このうち多数を占めたのは、縄文時代後期前半のもので、次いで中期末である。

中期の土器は、第 III 群として類別したものであるが、1 類は最花式に類似するもので、2 類・3 類は、大木 10 式に類似する土器である。

後期初頭の土器については、最近県内各地域で出土例が多くなり、本遺跡でも第 IV 群、第 V 群土器としてまとめたものがこれにあたる。

本遺跡では、南側へ緩傾斜する場所から多数出土したが、その包含層は薄く、層位的に把握することはできなかった。

後期初頭の土器群のうち第 V 群土器は多数出土し、本遺跡を代表する土器群といえよう。

県内においてこの類がまとめて出土した遺跡は、青森市螢沢遺跡であるが、この報告書には、第 1 群の土器としてまとめられている。ただ、すべて斜行縄文に沈線文を施文したものば

かりでなく、磨消手法をもつものも含まれているので、第2群の土器もまとめられたかも知れない。これは、本遺跡の土器の場合、文様構成及び器形に差がなくとも磨消手法が加えられており、二つの群に峻別できなかつたためである。

この種の土器は、断片的には県内各地域から出土しているが、ある程度まとめて出土した遺跡は少なかった。後期前半の土器編年のワンステップとして、ここでは、十腰内I式土器の前段階に位置するものとして、弥栄平出土の土器群としてあきたい。後期初頭から弥栄平出土の土器群までは数型式設定されると思われるが、今後さらに検討される余地があるものと思われる。

本遺跡では、2か年にわたり発掘調査が実施されたが、遺跡の主体となる部分の存在が把握でき難かった。しかし、第2次調査の結果、南側に当たる斜面及び、最も鷹架沼沿いの地点に縄文時代中期末から後期前半の遺物及び遺構が集中していることを突き止めることができ、貴重な資料を得た。

(成田)

引用・参考文献

1. 田 村 誠一 「大曲I号遺跡」『岩木山』岩木山刊行会 1968
2. 青森県教育委員会 「白山堂・妻の神遺跡発掘調査報告書」
青森県埋蔵文化財調査報告書第30集 1976
3. 青森県教育委員会 「三内遺跡」
青森県埋蔵文化財調査報告書第37集 1978
4. 平賀町教育委員会 「井沢遺跡」 1976
5. 青森市教育委員会 「孫内遺跡発掘調査報告書」青森市の文化財8 1973
6. 青森市豊沢遺跡発掘調査団 「豊沢遺跡」 1979
7. 青森市教育委員会 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」
青森県埋蔵文化財調査報告書第3集 1973
8. 青森県教育委員会 「五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根」
青森県埋蔵文化財調査報告書第29集 1976
9. 青森県教育委員会 「鶴窪遺跡」
青森県埋蔵文化財調査報告書第76集 1983
10. 青森県教育委員会 「莊窪遺跡」 1984.3 刊行予定
11. 青森県教育委員会 「牛ヶ沢(3)遺跡」 1984.3 刊行予定
12. 須藤 隆 「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」
『考古学雑誌56-2』 1970
13. 伊東 信雄・須藤 隆 「瀬野遺跡」 1982
14. 青森県教育委員会 「山崎遺跡」 1982
15. 須藤 隆 「弥生文化の伝播と惠山文化の成立」
『考古学論叢I』 1983
16. 岡田・菊地・平野・中谷 「牧野II号遺跡出土遺物について(1)」
『弘前大学考古学研究I』 1980
17. 青森県教育委員会 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」
青森県埋蔵文化財調査報告書第48集 1979
18. 青森県教育委員会 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書」
青森県埋蔵文化財調査報告書第57集 1980
19. 青森県教育委員会 「表館遺跡」
青森県埋蔵文化財調査報告書第61集 1981
20. 河野 広道・沢 四郎 「東鉄路貝塚発掘調査報告書」 1962
21. 二本柳 正一・佐藤 達夫 「早稻田貝塚」
『上北考古会誌I』
22. 今井 碩崎 「十腰内遺跡」『岩木山』岩木山刊行会 1968
23. 北上市教育委員会 「八天遺跡」文化財調査報告書24集 1979
24. 大迫町教育委員会 「立石遺跡」大迫町埋蔵文化財報告書第3集 1979

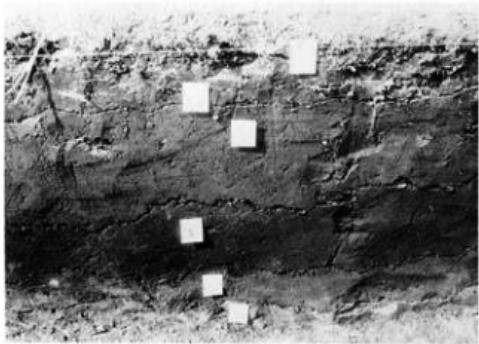
写 真 図 版



1. 遺跡の全景
(第2次調査地域)



2. 西側地区近景



図版1 遺跡全景及び基本層序



第1号竖穴住居跡



第2号土塙

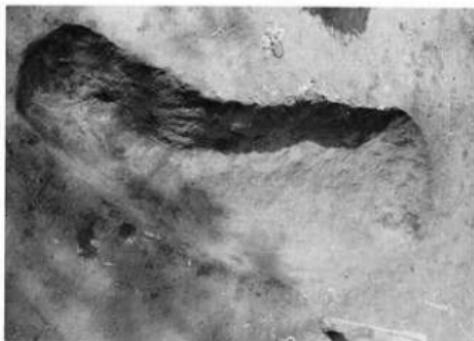
圖版2 第1号竖穴住居跡遺物出土狀態・完掘，第2号土塙完掘



第3号土块



第4号土块



第5号土块

图版3 第3号土块·第4号土块·第5号土块完掘



埋設土器遺構

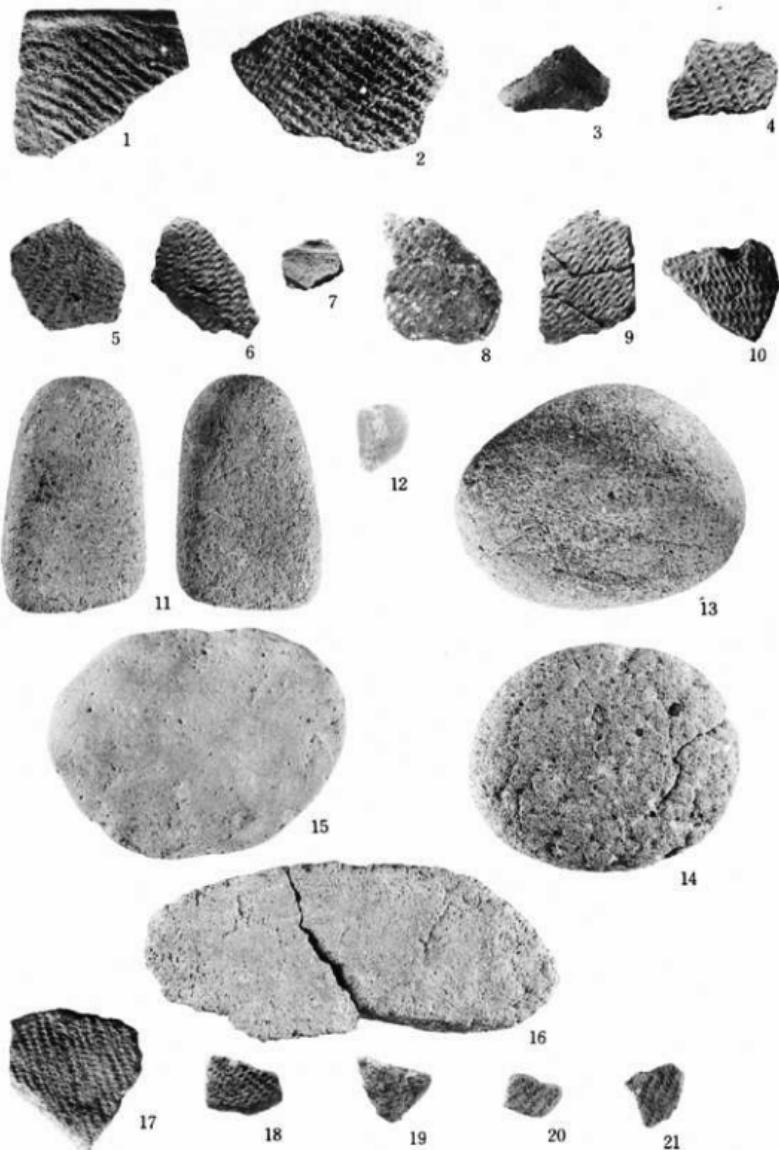


集石遺構
(西から)

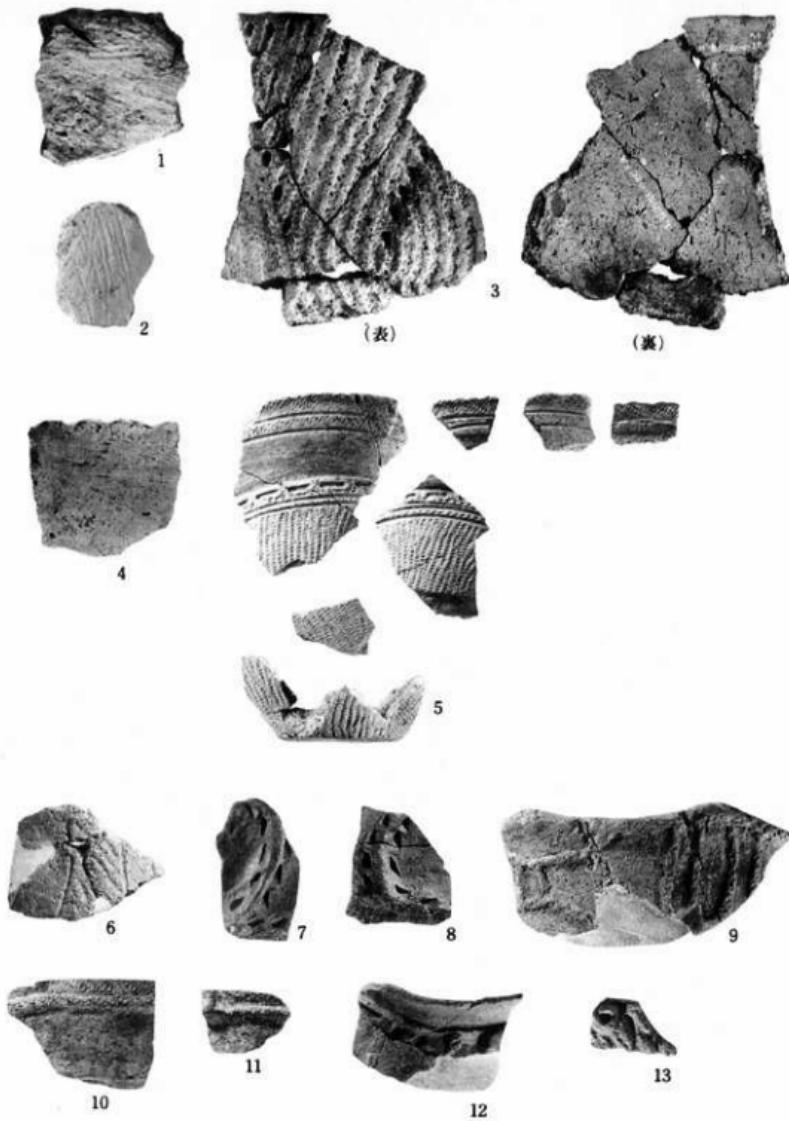


集石遺構
(北から)

図版4 埋設土器遺構, 集石遺構



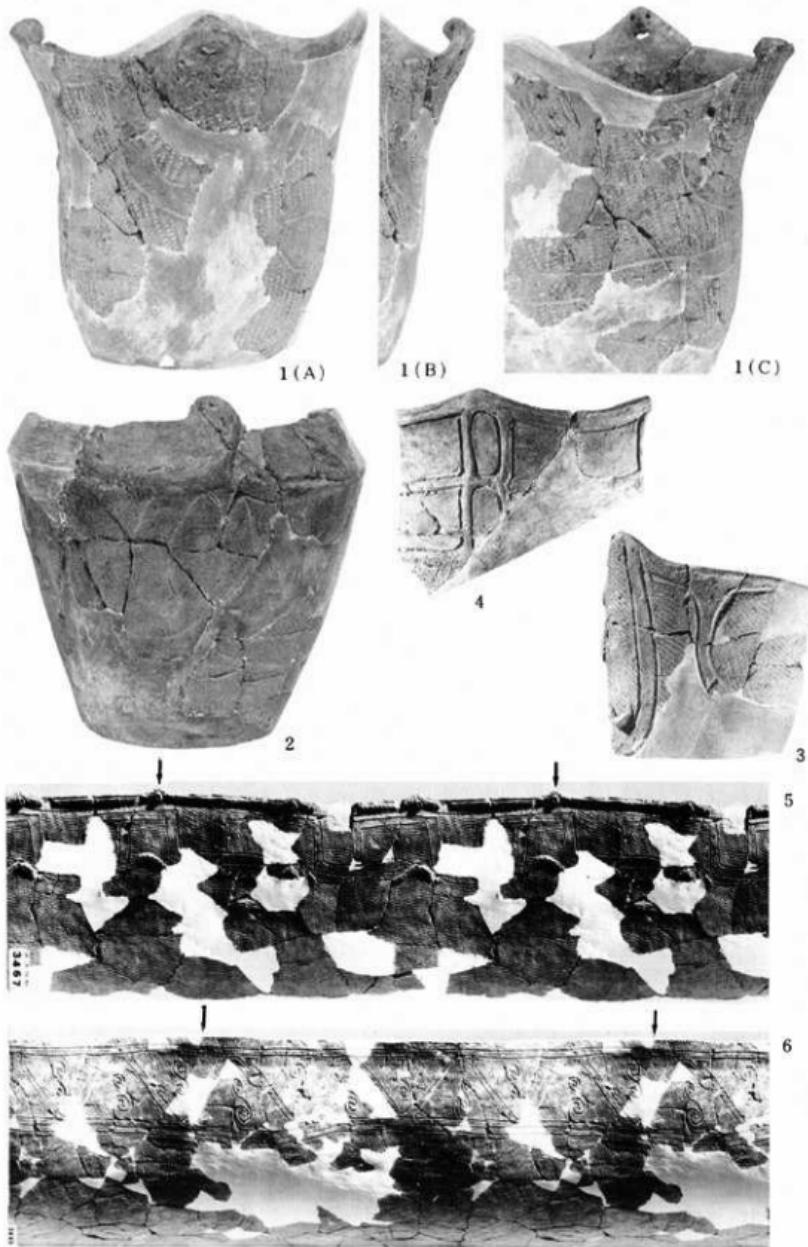
圖版 5 第1号竪穴住居跡出土遺物(1~16), 第3号土塙出土遺物(17~21)



図版 6 遺構外出土土器(1)

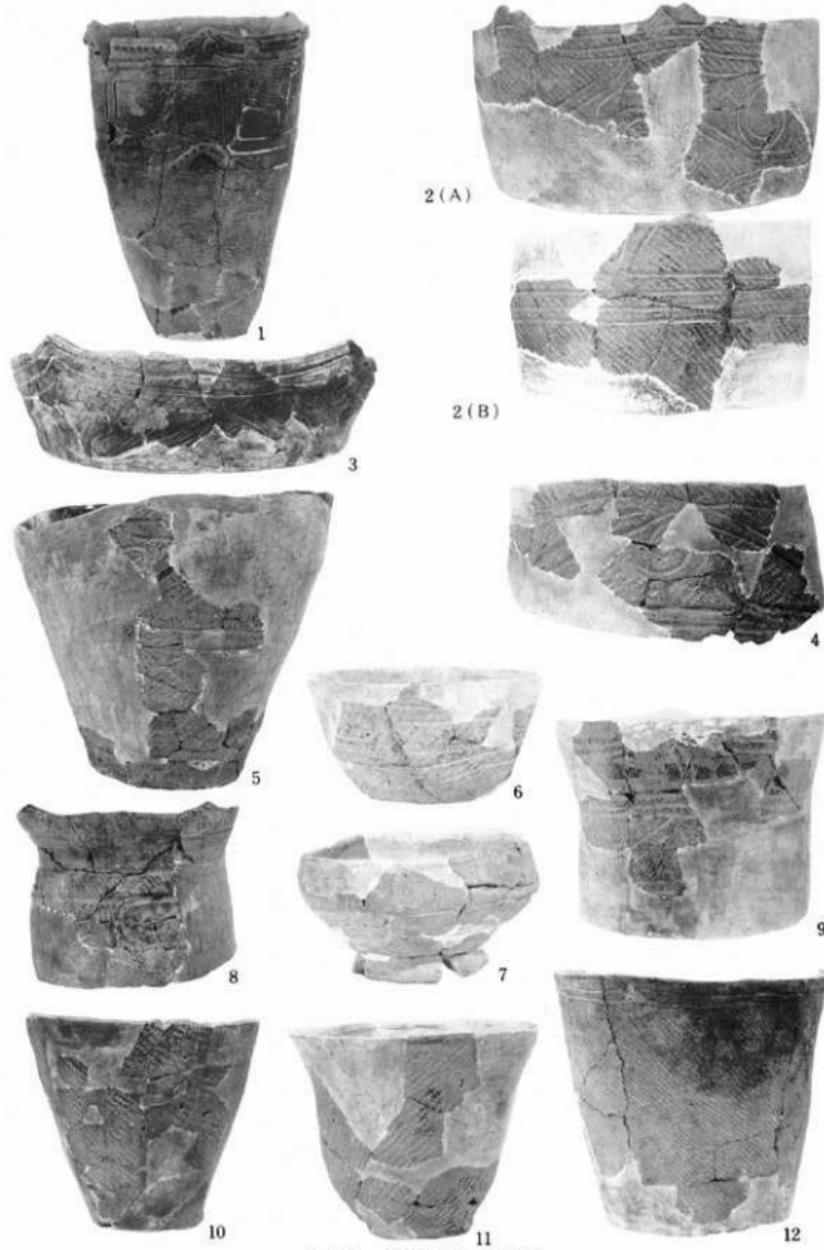


圖版 7 遺構外出土土器(2)

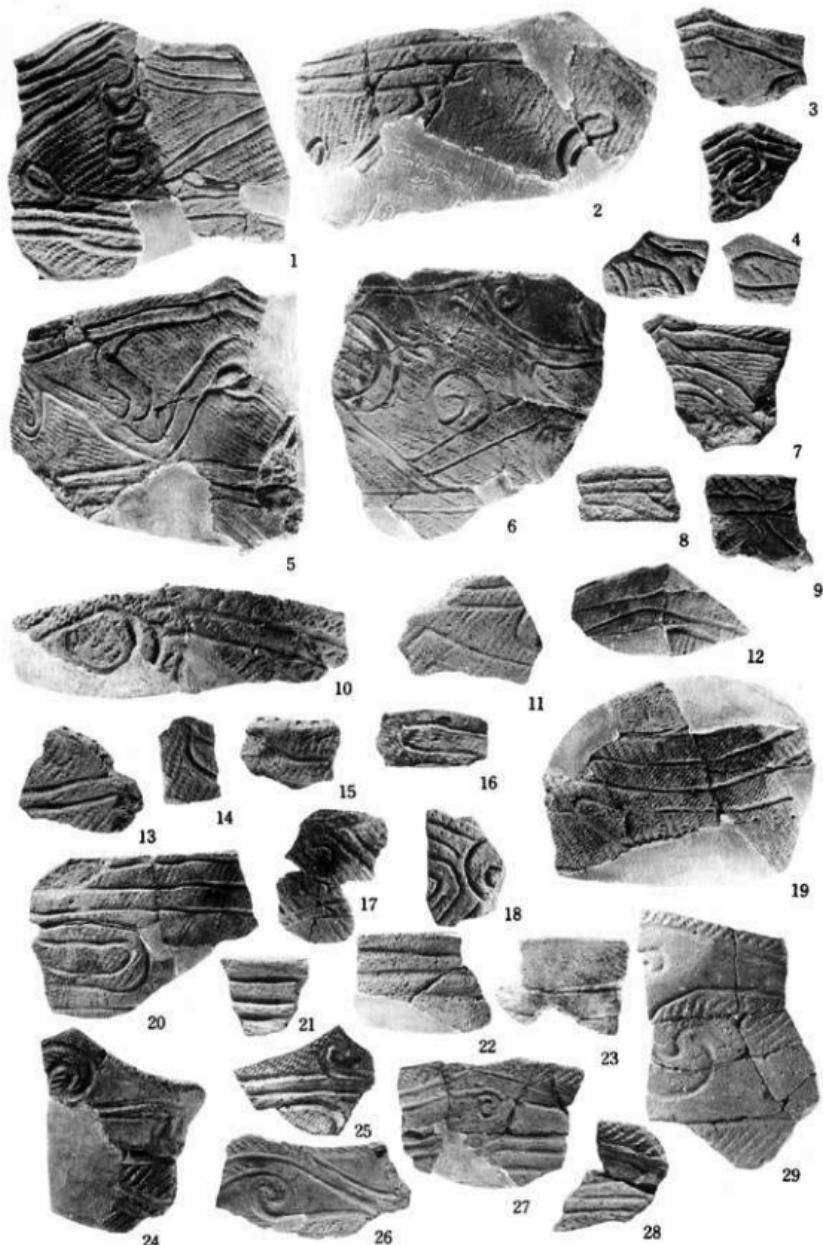


図版8 遺構外出土土器(3)

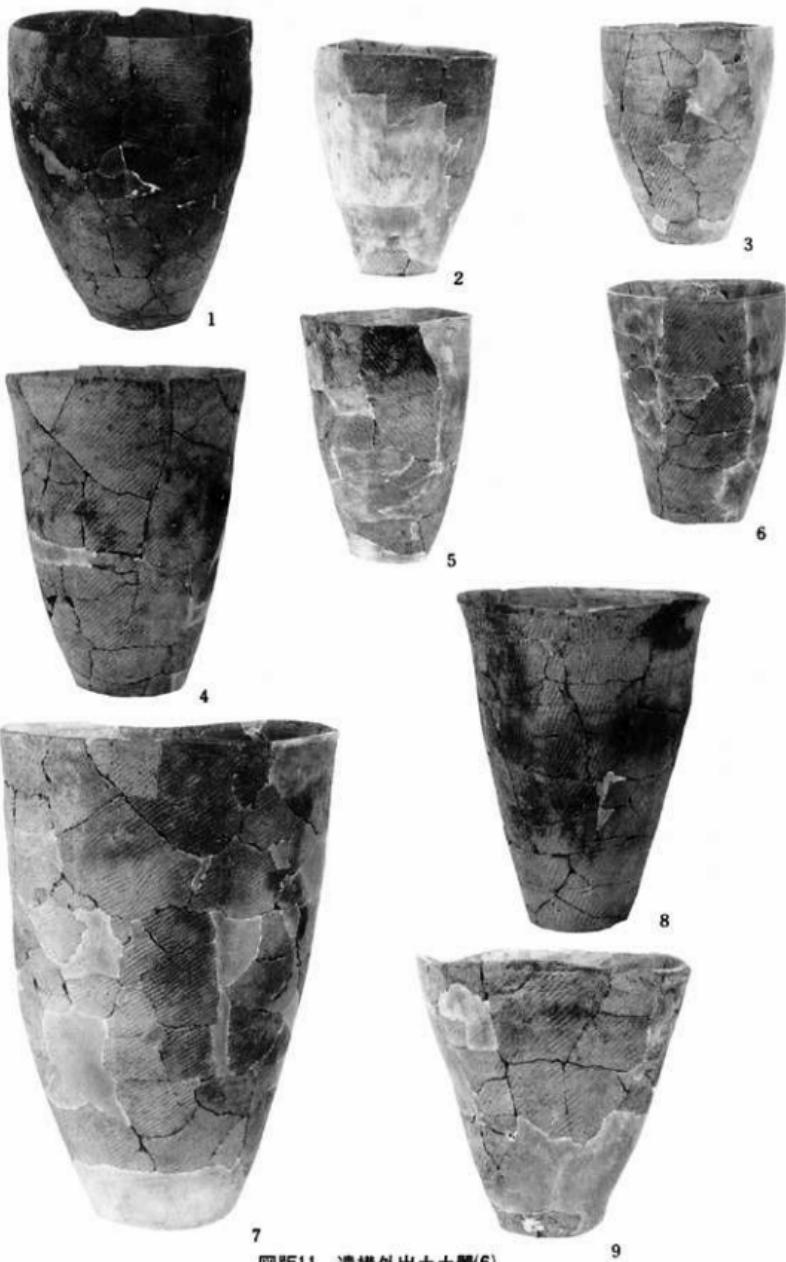
〔回転連続写真撮影 小川 忠博〕



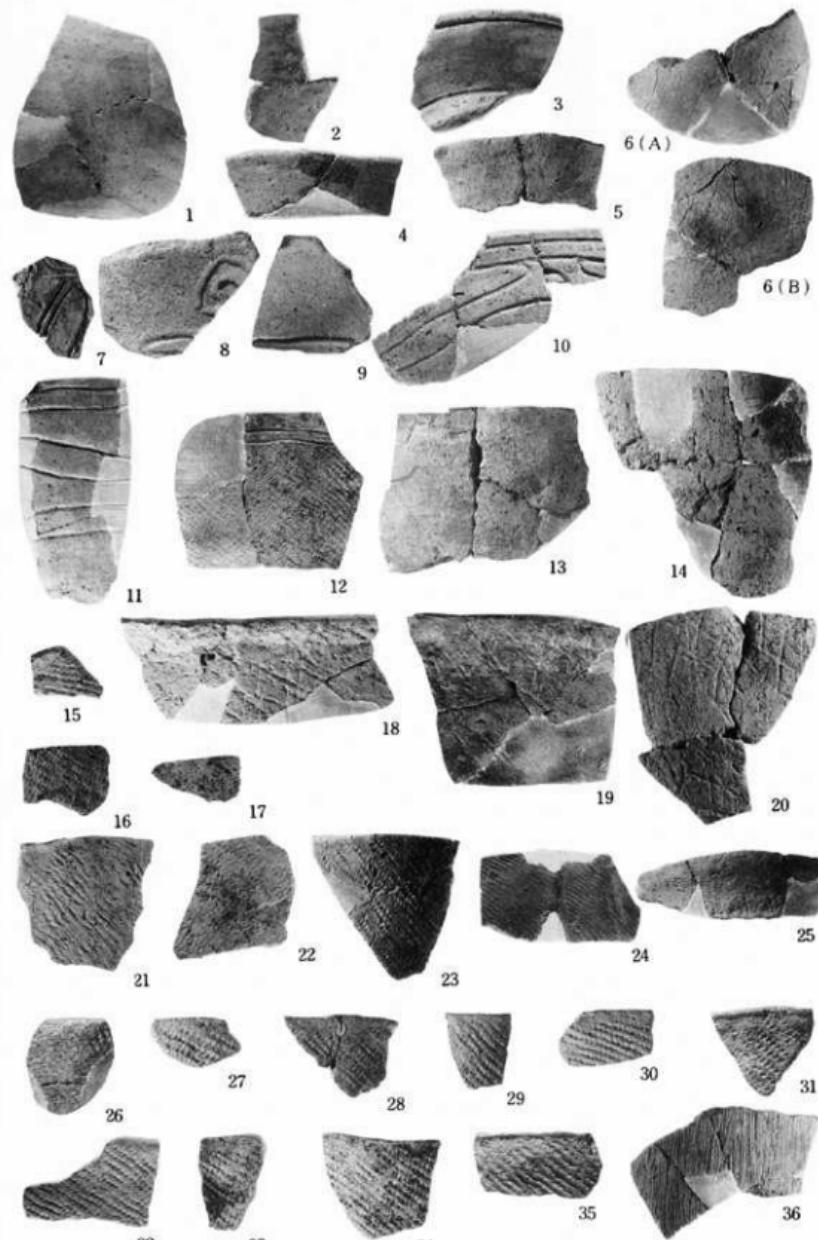
図版9 遺構外出土土器(4)



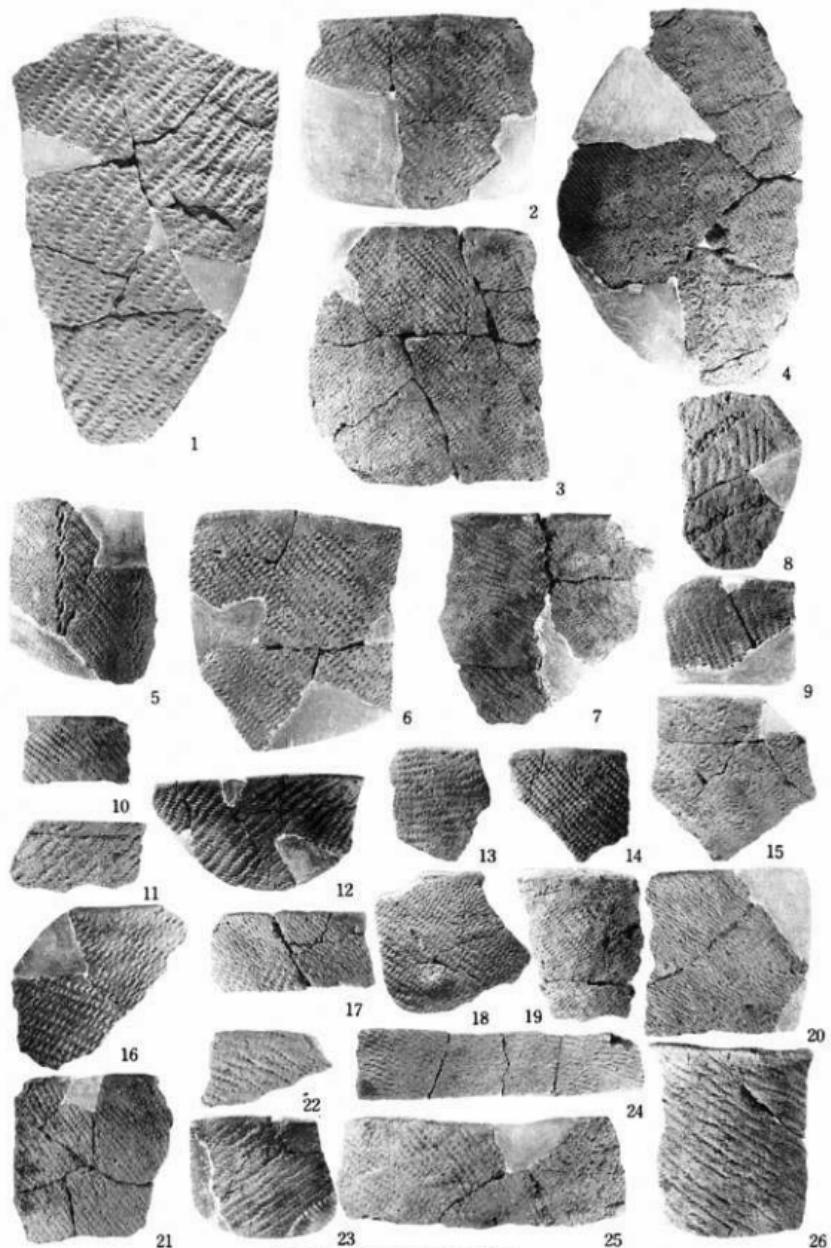
図版10 造構外出土土器(5)



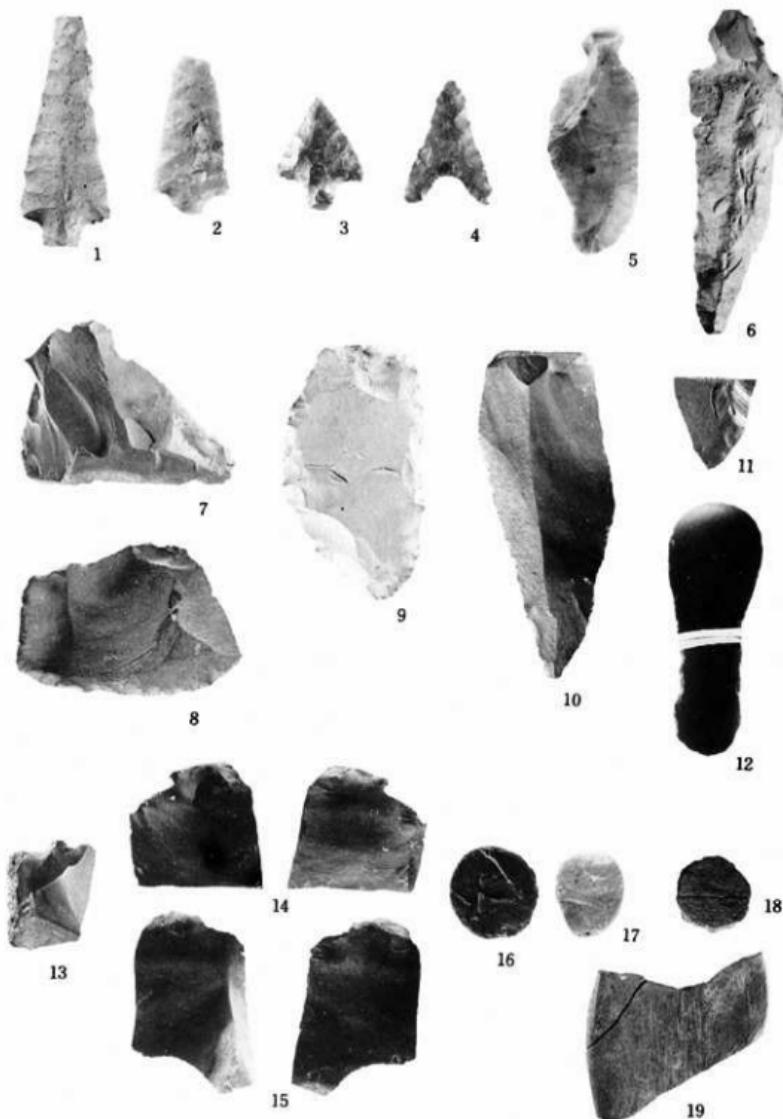
図版11 遺構出土土器(6)



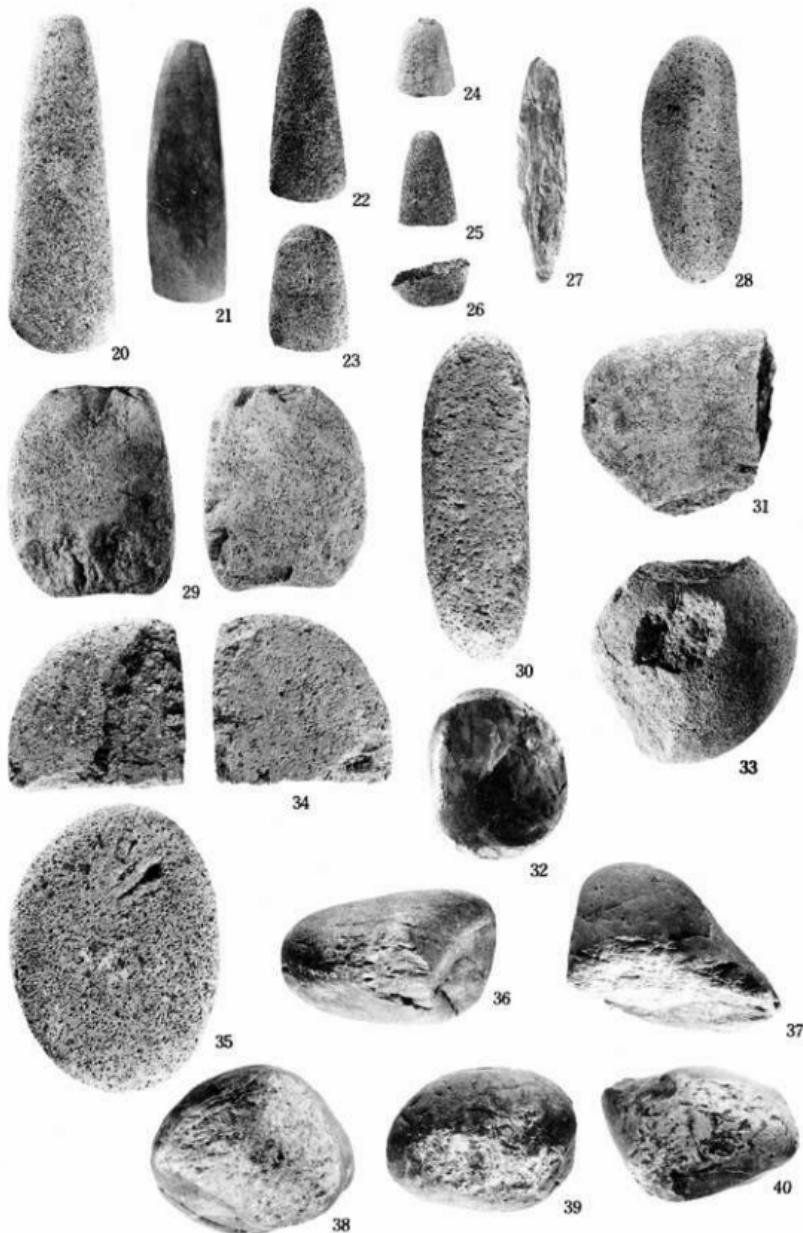
図版12 遺構外出土土器(7)



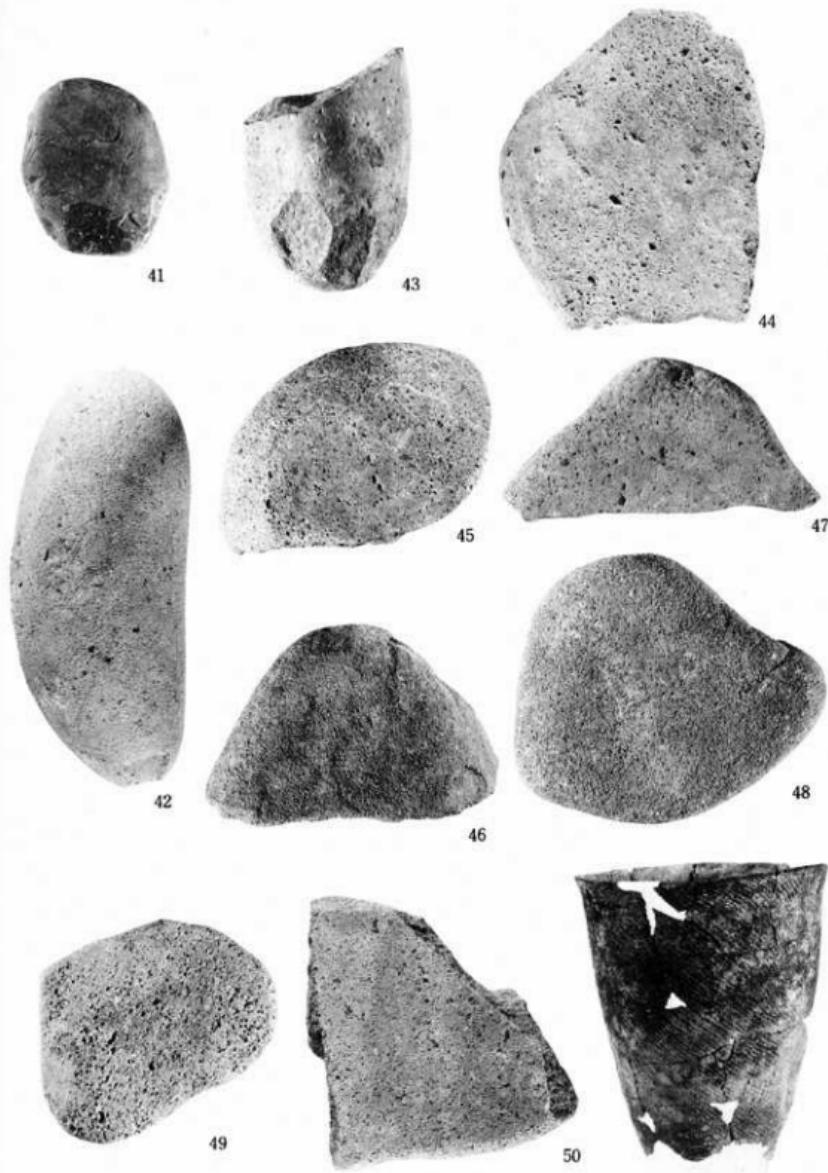
図版13 遺構出土土器(8)



圖版14 遺構外出土遺物，石器—(1)



圖版15 遺構外出土遺物，石器—(2)



図版16 遺構外出土遺物、石器—(3)、埋設土器

51



図版17 土器出土状況

青森県埋蔵文化財調査報告書第81集

弥栄平遺跡(2)

発掘調査報告書

発行年月日 昭和59年3月31日

編集・発行 青森県埋蔵文化財調査センター
〒030-02 青森市新城字天田内

152-15

印刷所 東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦一丁目2番12号
TEL 42-2221